

寺内京南遺跡発掘調査報告

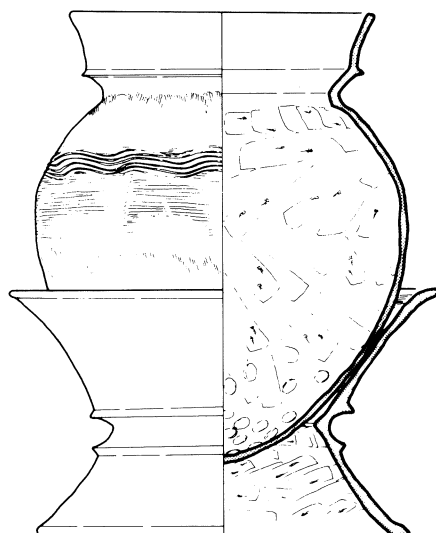
—ほ場整備に伴う調査—

1982

鹿野町教育委員会

寺内京南遺跡発掘調査報告

—ほ場整備に伴う調査—



1 9 8 2

鹿 野 町 教 育 委 員 会
関西大学文学部考古学研究室

序 文

鹿野町におけるほ場整備事業の進展は、旧来の田園風景を大きく変貌させています。このような状況の中で、祖先の貴重な文化遺産である埋蔵文化財の発見も時を追って増加し、保護か破壊かの選択に常に迫られるに至っております。

今回の寺内京南遺跡につきましても、ほ場整備事業中にピット及び遺物の散布が発見され、その存在が確認されました。早速鳥取県教育委員会と協議のうえ、遺構が削平される可能性のある部分について発掘調査を実施し、また遺跡の範囲を確認するため、周辺地域の調査も同時に行ないました。その結果、古墳時代の竪穴住居跡、土壇、溝などの遺構が遺存していることが判明し、関係諸機関と協議のうえ、盛土工法にて保存することになりました。

今後、工事の進展に伴い、多くの埋蔵文化財の発見が考えられますので、今後とも地元はじめ各位の御指導、御協力を賜われますよう切望してやみません。

昭和57年 3 月

鹿野町教育委員会教育長

長 岡 健 二

例 言

1. 本書は鳥取県気高郡鹿野町に所在する寺内京南遺跡の発掘調査報告である。この報告は、昭和55年に最終年度をむかえた団体営中園地区は場整備事業寺内工区の施行に伴い、新たに発見された遺跡の調査成果を、鹿野町教育委員会を主体としてとりまとめたものである。調査期間は昭和55年9月29日から昭和55年11月24日までである。
2. 現地調査に当り、鳥取県教育委員会、関西大学文学部網干善教教授など多数の方々から御指導、御助言を賜ったのを始め、土地所有者である勝谷土地改良組合（事務局長・森山亮夫氏）には、遺構の保存に関して御高配を得た。また、本書の製作に当って、武庫川女子大学薬学部安田博幸教授、奥野礼子氏には土器に塗布されている赤色顔料物質の分析に関して、玉稿をいただいた。さらに、気高町教育委員会吉村善雄氏には貴重な資料の提供を受け、奈良県立橿原考古学研究所石野博信・泉森皎氏には御助言をいただいた。
3. 資料整理及び本書の製作は、関西大学文学部考古学研究室で行った。本書の第Ⅰ章は萬谷幸美・山田貴賀子、第Ⅱ章1は米田文孝、2は藤田和尊、第Ⅲ章1は米田・藤田、2－Aaは西岡誠司、2－Abは山上弘、2－Acは西岡・ト部行弘、2－B・Cは合田茂伸、3は藤田、4は上田睦、5は合田、第Ⅳ章は米田が分担して執筆し、全員で検討してとりまとめた。第Ⅴ章1は安田博幸・奥野礼子氏の玉稿をいただき、2は合田、3は西岡、4は上田・山上が分担して執筆した。
4. 図面の作成は執筆者全員が分担した。写真は、遺構、遺物とも主として山上が担当し、遺物写真については、ト部が補助した。編集は米田が担当した。
5. 本書の製作にあたっては、上記関係者に加えて、山口卓也・服部聡志・瀬野耕平・柿沼菜穂・丹原佐智子・森久美子・長浜幸子ら関西大学文学部考古学研究室の諸氏の援助を受けた。
6. 出土遺物実測図の縮尺は、土器については1：4、土錘・硯・鉄製品については1：2に統一した。文中の遺物番号は挿図、図版中の番号とも全て統一した。
7. 本書に掲載した周辺遺跡分布図は、建設省国土地理院発行の二万五千分の一地形図、「浜村」・「鹿野」を複製した。
8. 本書に使用した遺構分類記号はSB：建物、SD：溝、SK：土壇、SX：墳墓である。

寺内京南遺跡発掘調査報告

本文目次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第Ⅱ章 調査経過	8
1. 調査概要	8
2. 調査日誌抄	9
第Ⅲ章 遺跡と遺物	10
1. 遺跡の立地	10
2. 遺跡北半部分の遺構	14
A. 北地区	14
a. 1号竪穴住居跡	17
b. 2号竪穴住居跡	20
c. 掘立柱建物跡	22
B. 土 壙	33
C. 溝	35
3. 遺跡南半部分の遺構	37
4. 排水溝	40
5. 遺 物	46
第Ⅳ章 総 括	61
第Ⅴ章 考 察	64
1. 鳥取県気高郡鹿野町寺内京南遺跡出土遺物に塗布された 赤色顔料物質の微量化学分析	64
2. 甕形土器の法量検討 ——鳥取県地方の古式土師器について——	66
3. 古墳時代前期の竪穴住居跡の一例をめぐって ——寺内京南遺跡の占める位置——	72
4. 掘立柱建物跡の年代について ——寺内京南遺跡と青木遺跡の比較を通して——	81

図 版 目 次

- PL. 1 寺内京南遺跡周辺地域航空写真（垂直）
- PL. 2 1. 寺内京南遺跡周辺地域航空写真（東北から）
2. 寺内京南遺跡遠景（西南から）
- PL. 3 1. 北地区全景（南から）
2. 北地区掘立柱建物群（東から）
- PL. 4 1. SB 1 全景（北から）
2. SB 1 炉跡 甕形土器出土状況（南から）
- PL. 5 1. SB 1 炉跡 甕形土器取り上げ後（南から）
2. SB 1 炉跡 完掘後（南から）
- PL. 6 1. SB 2 全景（南から）
2. SB 2 炉跡 完掘後（南から）
- PL. 7 1. SK 10 全景（南から）
2. N 1 トレンチ全景（南から）
- PL. 8 1. N 1 トレンチ SD 1 土層断面（西北から）
2. S 1 トレンチ SD 1 壺形土器出土状況（東北から）
- PL. 9 1. 排水溝 SB 3 土層断面（北から）
2. 排水溝 SB 4 土層断面（北から）
- PL. 10 1. S 2 トレンチ SX 1 検出状況（西南から）
2. S 2 トレンチ SX 1 鉄製品出土状況（西南から）
- PL. 11 出土土器 SD 1 SB 1 排水溝
- PL. 12 出土土器 SD 1 表面採集
- PL. 13 出土土器 SD 1 SB 1 P35 表面採集
- PL. 14 1. 出土土器 SB 1
2. 出土土器 表面採集
- PL. 15 1. 出土土器 表面採集
2. 出土土器 表面採集
- PL. 16 1. 出土土器 SK 4 P78 表面採集
2. 出土鉄製品 S 2 トレンチ SX 1
- PL. 17 土器細部写真
1. 壺 口縁部外面竹管文と半截竹管文
2. 壺 肩部外面竹管文と半截竹管文

3. 甕 肩部外面ハケメと櫛描直線・波状文

4. 甕 肩部外面ハケメと櫛描直線・波状文

PL. 18 土器細部写真

1. 甕 体部外面ハケメ

2. 甕 体部外面ハケメ

3. 高杯 脚裾部内面ハケメとヘラ削り

4. 高杯 杯部外面ハケメと杯・脚接合部

5. 高杯 杯部内面放射状ヘラ磨き

6. 甕 底部内面ヘラ削りと指頭圧痕

7. 器台 脚部内面横ナデとヘラ削り

8. 甕 肩部内面ヘラ削り

PL. 19 中世墓域出土 宝篋印塔・五輪塔各部分

PL. 20 中世墓域出土 宝篋印塔・五輪塔各部分

挿 図 目 次

1. 周辺遺跡分布図	2
2. 閉野(1)・寺内廃寺(2・3・4)遺跡出土石器実測図	4
3. 西中園8号墳出土遺物実測図	4
4. 谷奥1号墳出土遺物実測図	5
5. 上原(1)・寺内廃寺(2・3・4)遺跡出土瓦拓影	6
6. 寺内京南遺跡出土五輪塔実測図	7
7. 寺内廃寺遺跡東北地区中世墓主体備前焼甕実測図	7
8. 寺内廃寺遺跡東北地区中世墓実測図	7
9. 調査風景(北地区)	9
10. 調査風景(N1トレンチ)	9
11. 基本土層柱状図	10
12. 周辺地質図	11
13. 周辺字限図	12
14. 周辺土層柱状図	13
15. 遺跡周辺地形と調査区	14
16. 北地区遺構全体図	15
17. SB1実測図	18
18. SB1炉跡実測図	19

19. SK 6 高杯形土器出土状況	20
20. SB 2 実測図	21
21. SB 2 炉跡実測図	22
22. SB 8 実測図	23
23. SB 9 実測図	24
24. SB 10 実測図	25
25. SB 11 実測図	25
26. SB 12 実測図	26
27. SB 13 実測図	26
28. SB 14 実測図	27
29. SB 15 実測図	27
30. 北地区拡張部実測図	28
31. SK 10 実測図	34
32. SK 12 実測図	34
33. SD 1 実測図 (N 1 トレンチ)	36
34. SD 1 実測図 (S 1 トレンチ)	37
35. 木棺直葬墓実測図 (S 2 トレンチ)	39
36. 排水溝断面図	41
37. 排水溝V地点拡大図	44
38. 遺物実測図 (1)	54
39. 遺物実測図 (2)	55
40. 遺物実測図 (3)	56
41. 遺物実測図 (4)	57
42. 遺物実測図 (5)	58
43. 遺物実測図 (6)	59
44. 遺物実測図 (7)	60
45. 甕形土器分類図	66
46. 甕形土器統計図	67
47. 口径計測値頻度分布図	68
48. 胴部最大径計測値頻度分布図	69
49. 器高計測値頻度分布図	69
50. 容量計測値頻度分布図	70
51. 服部遺跡 2 号住居跡実測図	73

52. 青木遺跡 J S I 04実測図	73
53. 福市遺跡四ツ塚谷 5 号住居跡実測図	73
54. 西原遺跡10号住居跡実測図	73
55. 青木遺跡 F S I 29実測図	74
56. 福市遺跡吉塚18号住居跡実測図	74
57. 因伯地方における竪穴住居跡分布図	75
58. 掘立柱建物跡柱間距離の比較	82
59. 掘立柱建物跡の規模の比較	83

目 次

1. 周辺遺跡地名表	3
2. 掘立柱建物跡一覧表	29
3. 北地区ピット一覧表(1)	29
4. 北地区ピット一覧表(2)	30
5. 北地区ピット一覧表(3)	31
6. 北地区ピット一覧表(4)	32
7. 北地区ピット一覧表(5)	33
8. 土壌一覧表	35
9. 遺構・遺物対照表	47
10. 遺物観察表 (1)	47
11. 遺物観察表 (2)	48
12. 遺物観察表 (3)	49
13. 遺物観察表 (4)	50
14. 遺物観察表 (5)	51
15. 遺物観察表 (6)	52
16. 遺物観察表 (7)	53
17. ジフェニルカルバジドによるスポットの呈色とRf値	65
18. ジチゾンによるスポットの呈色とRf値	65
19. 長瀬高浜遺跡竪穴住居跡平面形・時期別一覧表	80
20. 福市遺跡竪穴住居跡平面形・時期別一覧表	80
21. 青木遺跡竪穴住居跡平面形・時期別一覧表	80

第Ⅰ章 位置と環境

てらうちきょうなん

寺内京南遺跡は、弥生時代後期以降鎌倉時代まで断続的に営まれた複合遺跡で、行政区画上は、鳥取県気高郡鹿野町大字寺内字京南・東千学に所在する。以下、地理的環境は第Ⅲ章 1 にゆずり、ここでは歴史的環境を中心に述べていきたい。

気高郡内では縄文時代の遺跡として明確なものは存在せず、遺物散布地が数ヶ所指摘されるのみである。鹿野町閉野の局部磨製石斧、気高郡高江および奥沢見の打製石斧、下光元の磨製石斧、殿の凹石など、各々単独の採集品で、発掘調査によって明確に縄文時代に比定し得る遺物は、気高町八束水・短尾遺跡(24)出土の縄文中期の土器片数点のみである。短尾遺跡ではさらに有舌尖頭器の出土も知られており、遺跡の上限が旧石器時代にまで遡り得る可能性がある。

弥生時代になっても鹿野町では明確な遺構を伴わずに、寺内廃寺遺跡(2)、今回報告の寺内京南遺跡(1)などで若干の弥生土器片の出土が知られるのみである。また、気高町上原遺跡(33)、会下郡家遺跡(28)では、各種の遺構とともに弥生土器などが検出されているが、特に会下郡家遺跡においては、ほぼ正五角形のプランをもつ弥生時代後期の竪穴住居跡の他、数多くの竪穴住居跡、土壌などの存在が知られる。また、奥沢見・船戸遺跡(38)では、弥生土器底部とともに、打製石錘、石斧、石鏃などが出土しており、宝木・高浜遺跡(34)では弥生後期の土器片が、短尾遺跡(24)では弥生土器のほか鉄鏃、石鏃、石錘、石包丁、石斧、貝製品などが採集されている。

古墳時代になると、丘陵裾部や尾根上に数多くの古墳が造営される。鹿野町では約130基、気高町では約400基が確認されている。

古墳時代前期の古墳としては、気高町二本木古墳群(56)中の二本木7号墳がある。南北17m、東西22mの方墳で、地山成形後盛土を施して築造されている。主体部は4基の土壌よりなる。墳丘中央部溝内で小形器台、周溝からは複合口縁を持つ壺形土器が出土しており、鍵尾Ⅱ式期と報告されている。

古墳時代中期にはいると、古墳数に若干の増加がみられる。勝見・勝見古墳群(43)中に所在する勝見15号墳・17号墳は小円墳で、小形の箱式石棺を内部主体とする。15号墳には、板状節理安山岩を使用したV字状石枕が認められ、また17号墳からは仿製振文鏡の出土が伝えられている。また、下坂本・西山古墳群(54)中には、全長47mの西山1号墳が、八束水・八束水古墳群(39)中には全長38mの八束水7号墳が知られる。いずれも、鳥取県下では例の少ない前方後方墳である。

古墳時代後期になると、狭隘な平野部に面した丘陵に群集墳が形成される。鹿野町および気高町の平野部は旧河内川の氾濫原上に発達したものであるが、度重なる流路変更のため3ヶ所の平野部が形成され、これらは丘陵によって各々隔てられている。このような地形的な理由の

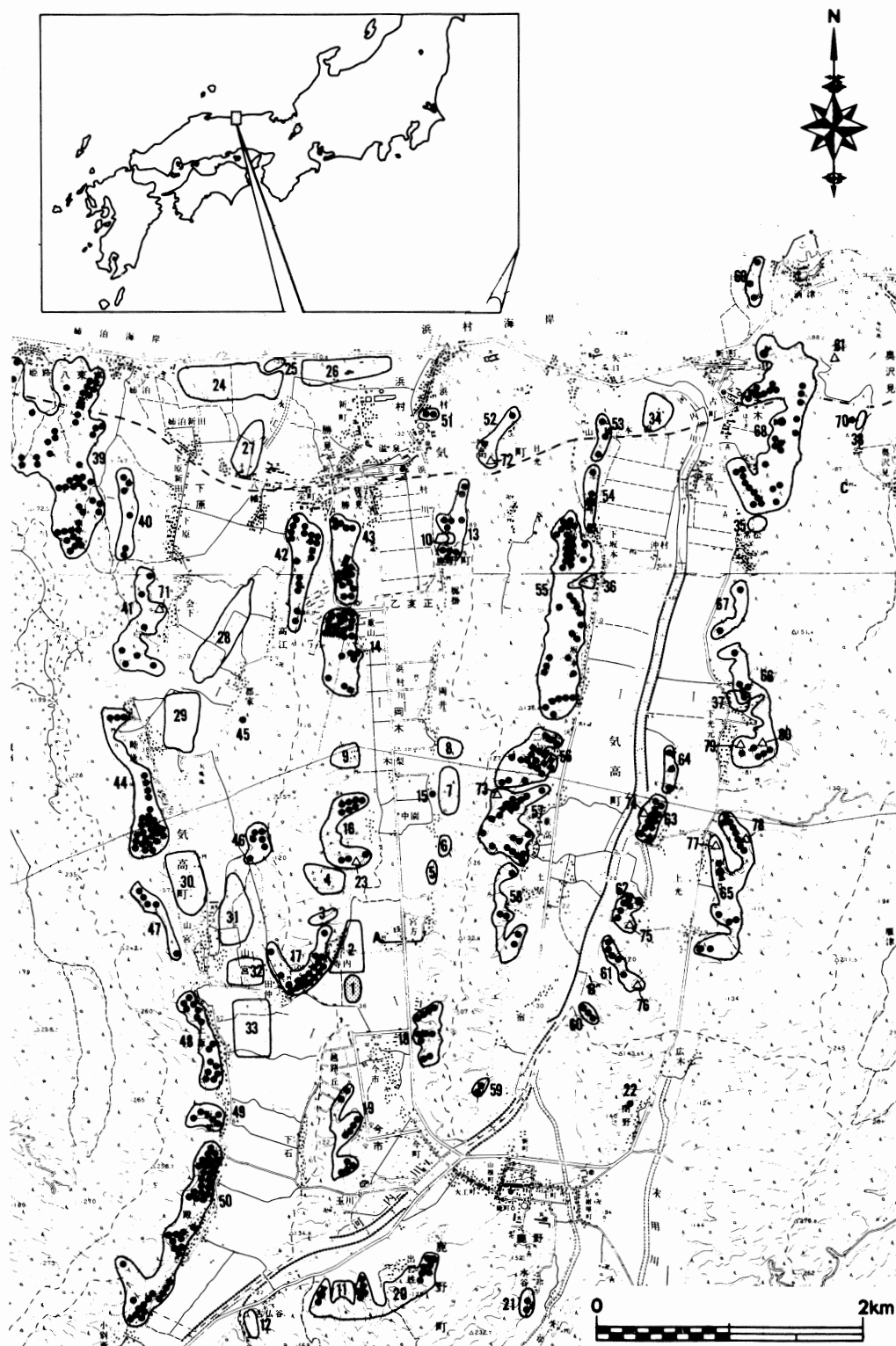


Fig. 1 周辺遺跡分布図

鹿 野 町

1. 寺内京南遺跡
2. 寺内廃寺遺跡
3. 宮谷遺跡
4. 中園遺跡
5. 宮方遺跡
6. 石ヶ谷遺跡
7. 東中園遺跡
8. 寄馬場遺跡
9. 木梨遺跡
10. 梶掛遺跡
11. 出百姓遺跡
12. 古仏谷遺跡
13. 梶掛古墳群(10基)
14. 重山古墳群(23基)
15. 東中園古墳
16. 西中園古墳群(10基)
17. 寺内・田仲古墳群(18基)
18. 神越谷古墳群(10基)
19. 馬池古墳群(10基)
20. 出百姓古墳群(14基)
21. 口水谷古墳群(3基)
22. 閉野1号墳
23. 西中園横穴群(5基)
30. 山宮笹尾遺跡
31. 山宮茶山畑遺跡
32. 山宮阿弥陀の森遺跡
33. 上原遺跡
34. 高浜遺跡
35. 常松第2遺跡
36. 下坂本遺跡
37. 夏ヶ谷遺跡
38. 船戸遺跡
39. 八束水古墳群(54基)
40. 下原古墳群(6基)
41. 会下古墳群(7基)
42. 谷奥古墳群(18基)
43. 勝見古墳群(18基)
44. 睦逢古墳群(29基)
45. 郡家古墳
46. 山宮東古墳群(6基)
47. 山宮西古墳群(5基)
48. 上原古墳群(15基)
49. 飯里古墳群(5基)
50. 殿古墳群(44基)
51. 浜村古墳群(2基)
52. 日光古墳群(2基)
53. 矢口古墳群(3基)
54. 西山古墳群(4基)
55. 下坂本古墳群(38基)
56. 二本木古墳群(20基)
57. 重高古墳群(18基)
58. 土居古墳群(5基)
59. 宿西古墳群(2基)
60. 宿東古墳群(3基)
61. 宿北古墳群(5基)
62. 西分古墳群(6基)
63. 戸島古墳群(11基)
64. 山崎古墳群(3基)
65. 加美美都古墳群(15基)
66. 下光元古墳群(10基)
67. 常松古墳群(2基)
68. 宝木古墳群(32基)
69. 酒津古墳群(3基)
70. 奥沢見2号墳
71. 会下横穴群
72. 日光横穴群
73. 漆谷横穴群
74. 戸島横穴群
75. 西分横穴群
76. 宿北横穴群
77. 加美美都横穴
78. 加美美都横穴群
79. 大杉横穴群
80. 堤谷横穴群
81. 奥沢見横穴群
- A. 加知弥神社
- B. 志加如神社
- C. 板井神社

気 高 町

24. 短尾遺跡
25. 北短尾遺跡
26. 西浜遺跡
27. 八幡遺跡
28. 会下郡家遺跡
29. 睦逢遺跡

Tab. 1 周辺遺跡地名表

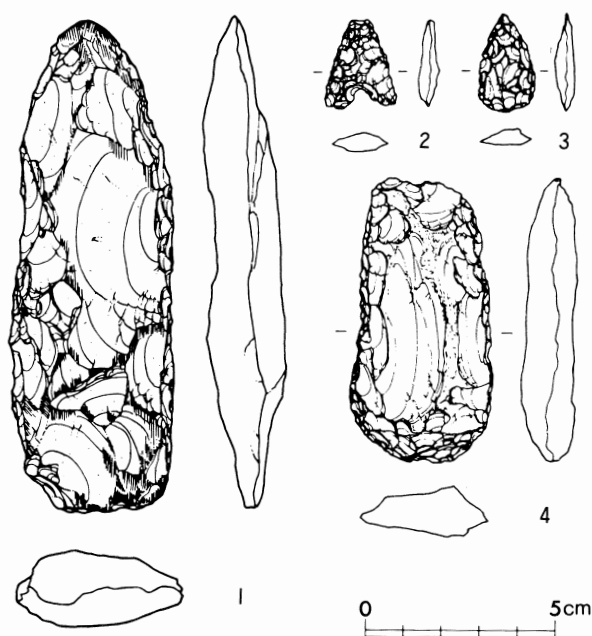


Fig. 2 閉野(1)・寺内廃寺(2・3・4)遺跡出土石器実測図

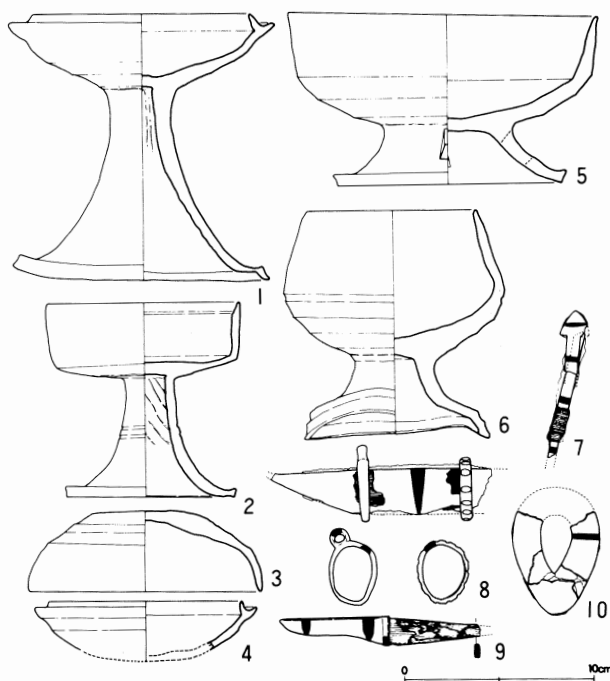


Fig. 3 西中園8号墳出土遺物実測図

ためか、この時期に至り、古墳群のあり方に明瞭な小地域性の反映が看取される。

西側地域の永江川水系に伴う平野部を東西から見おろす丘陵上には八束水(39)、下原(40)、会下(41)、陸逢(44)、山宮西(47)、上原(48)、飯里(49)、殿(50)、寺内・田仲(17)、山宮東(46)、谷奥(42)の各古墳群が存在する。多くが径10m程度の円墳によって構成されるが、主として丘陵裾部に密集して造営されている。

内部主体はいずれも奥壁1枚、側壁各2枚の板状節理安山岩を立位に使用し、その上に天井石を2枚重ねた形を基本とする在地型の横穴式石室か、弥生時代以来伝統的に内部主体に採用されている箱式石棺墓であって、横穴墓はほとんどみられない。

この横穴式石室は、奥壁側天井石1枚を欠失する以外はほぼ完存する西中園8号墳(16)を標式として「西中園型石室」と呼称するならば、その分布は東伯郡北条町土下古墳群を西限とし、鹿野町東中園古墳(15)、口水谷古墳群(21)を東限とする。また、その分布は、板状節理安山岩の産出地周辺に限定される。

中央地域の浜村川流域とその南方には、勝見(43)、重山(14)、西中園(16)、馬池(19)、出百姓(20)、口水谷(21)、神越谷(18)、浜村(51)、日光(52)の各古

墳群が形成されている。多くは小円墳で丘陵から平野部に向かって派生する支尾根上に造営されている。西中園古墳群などの西中園型石室と横穴墓で構成されるもの、重山古墳群などの箱式石棺を主体部にもつ小円墳、方墳で構成されるものなど、群構成に多様性がある。

この箱式石棺には、特殊な形態を示すものも存在する。神越谷6号墳(18)と、後述する東側地域の下光元3号墳(66)がそれで、長さ2m、幅0.5m程度の内法を有し、板状節理安山岩を立位に使用した後、割石をその上に小口積みするものである。天井石は、石棺に不相応の巨大なものを使用する。下光元3号墳では、山陰Ⅳ期の須恵器が出土している。

河内川流域の東側地域においては、多くは支尾根上に前方後円墳、前方後方墳を核とする群集墳が形成される。特に、二本木古墳群(56)、重高古墳群(57)、土居古墳群(58)の關係は、限定された小地域内での重層構造を具現している。さらに下光元(66)、加美美都(65)、西分(62)、戸島(63)、重高(57)古墳群のように、古墳群中に横穴墓群を包含するものもある。重高古墳群内の漆谷横穴(73)は、平面正方形、断面三角形の家形(四注式・妻入)を呈しており、古式の横穴墓である。

ところで、西中園型石室には線刻壁画を施すものがある。隣接する青谷町阿古山22号墳は、多数の舟・星などの線刻壁画が施されるが、殿15・25号墳(50)、睦逢10・11号墳(44)、西中園8号墳(16)、漆谷横穴(73)などにも、木葉文を中心として認められる。

また、全国的に出土例の少ない銅鉤を出土した谷奥1号墳(42)は、墳丘、石室ともに崩壊が著しいが、内部主体は西中園型石室であり、築造期に埋納された山陰Ⅳ期、陶邑TK217型式併行の須恵器の他、馬鐸、直刀装具、金環、変形神獸鏡などの出土が知られる。江戸時代、明治44年の2度にわたる盗掘に近い状態での遺物発見であったため、各種遺物の出土状態などは必ずしも明確ではない。

奈良時代の遺跡では、当遺跡の北方約500mに寺内廃寺(2)がある。昭和53年から3年間にわたる発掘調査の結果、寺院跡としての明確な遺構の検出はなかったが、藤原宮式軒丸瓦や内縁唐草文外縁素文の周縁を有す

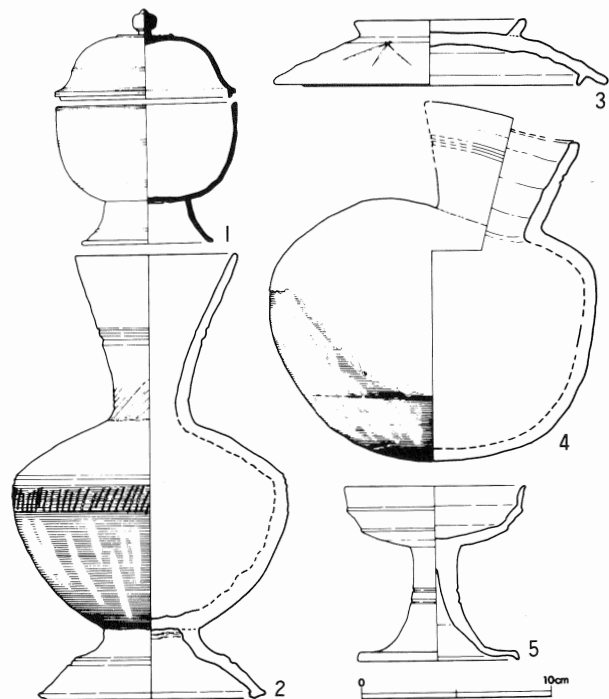


Fig. 4 谷奥1号墳出土遺物実測図

る新羅系軒丸瓦など、多量の遺物が出土した。この新羅系軒丸瓦である細弁十二葉蓮華文軒丸瓦は、当遺跡の西方約1kmに位置する上原遺跡でも同範瓦が出土しており、関連が注目される。

上原遺跡(33)は、弥生時代から鎌倉・室町時代に及ぶ複合遺跡であるが、特に大規模な掘形をもつ掘立柱建物跡の配置が、官衙における配置と共通性を有することから、気多郡衙跡である可能性が強いとされている。他には、掘立柱建物跡群や倉庫跡などが検出されている睦逢遺跡(29)、会下郡家遺跡(28)などがある。

さらに、平城京跡より出土した木簡中に「因幡国気多郡勝見郷中男神部直勝見麻呂作物海藻大贄壺籠六斤太」とあり、寺内・加知弥神社(A)、気高町宿・志加如神社(B)、奥沢見・板井神社(C)の存在とともに有力な勢力の存在が推定され、注目される。

鎌倉・室町時代の明確な遺跡の検出はないが、当遺跡東北部で、ほ場整備に伴う基礎工事の際(昭和55年7月)、宝篋印塔、五輪塔が一群をなして出土(Fig. 15 中世墓域)している。

また、寺内廃寺遺跡東北地区でも中世土壙墓群が検出されており、うち1基は備前焼甕を使用したものである。この備前焼甕は、間壁編年のⅢ期前半に比定されるものである。

[引用文献は省略した]

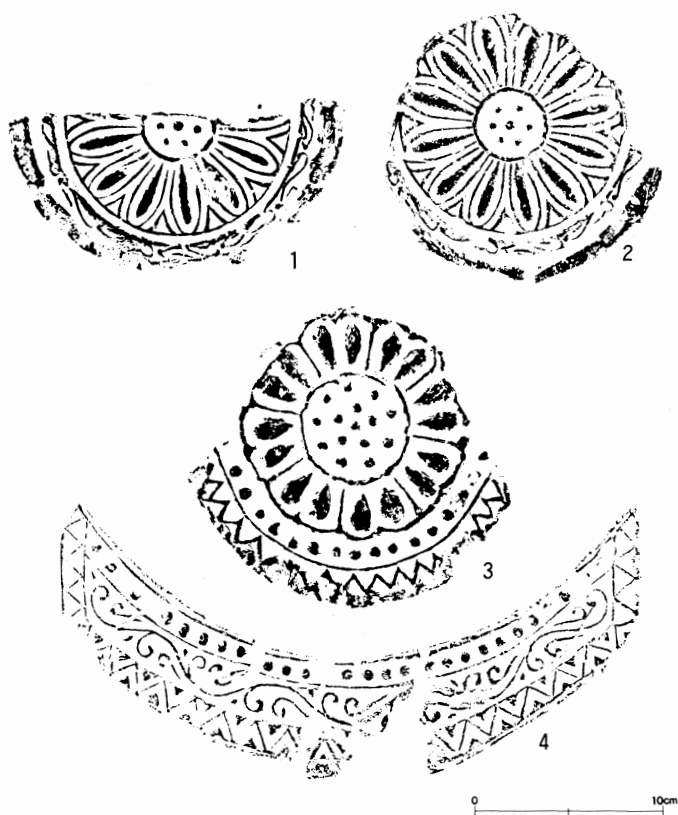


Fig. 5 上原(1)・寺内廃寺(2・3・4)遺跡出土瓦拓影

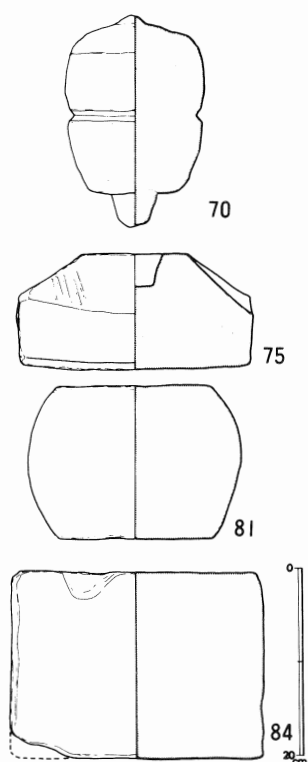


Fig. 6 寺内京南遺跡出土五輪塔実測図

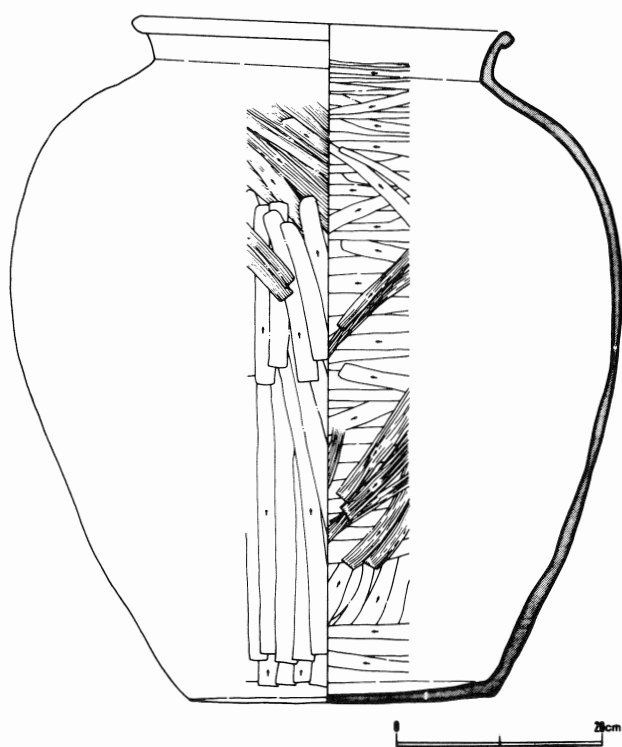


Fig. 7 寺内廃寺遺跡東北地区中世墓主体備前焼甕実測図

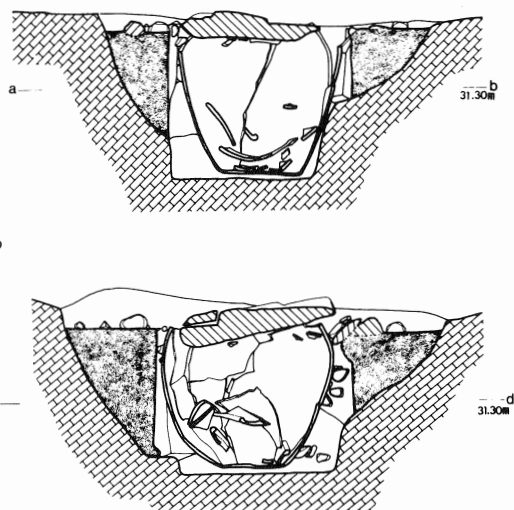
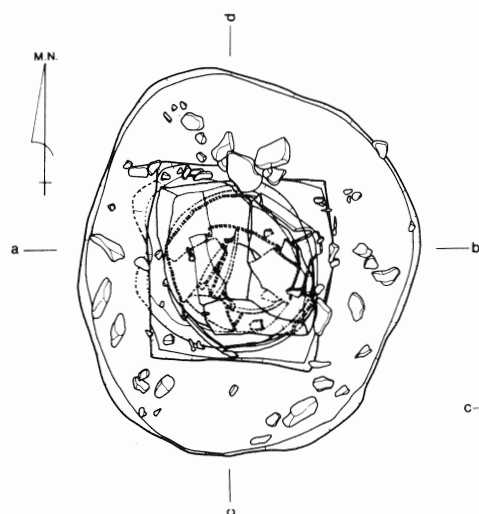


Fig. 8 寺内廃寺遺跡東北地区中世墓実測図

第Ⅱ章 調 査 経 過

1. 調 査 概 要

遺跡は、昭和55年9月19日、団体営中園地区ほ場整備寺内工区内で、鳥取県教育委員会文化財主事田中弘道氏による文化財パトロール中、ピット及び遺物の散布が認められたことにより、その存在が明らかになった。鹿野町教育委員会は即日工事の一時停止措置をとる一方、県教育委員会と協議し、ほ場整備事業との調整をはかるために、当該遺跡の性格・範囲などの確認を目的として発掘調査を実施することになった。

調査は鹿野町教育委員会（教育長・長岡健二）を主体とし、昭和55年9月25日より10月31日までの予定で、社会教育主事・大空寿満を担当者として実施することになった。調査の実施にあたっては、遺物の散布が濃厚に認められる北地区は全面発掘調査、同じく遺物の点在が確認された南地区は2m×5mを基準としたトレンチ調査とすることに決定した。

ところが、調査の進展に伴い遺構はかなり削平・損傷を受けているものの、濃厚に遺存することが判明し、遺跡範囲も字京南に止まらず、字東千学に及んでいることが確実になった。また、天候不順、農繁期による調査補助員確保の困難さなども重なり予定調査期間内に終了することに困難が予想された。そこで、関西大学文学部考古学研究室（代表・網干善教教授）に援助を要請し、11月11日より、9名が調査に参加することになった。しかし、11月12日より予算に制約され調査補助員の確保ができず、調査員のみで調査を実施した。11月24日、調査現場におけるすべての作業を終了した。

調査成果より、ほ場整備が当初計画のとおり施行されると広範囲にわたり遺構の削平・損傷が予想されるため、関係諸機関と協議した結果、遺跡想定範囲全域について、ほ場基盤高を盛土工法にて平均50cm上げ、保存することになった。

調 査 組 織

調 査 主 体	鹿野町教育委員会（教育長・長岡健二）
調査主任（兼事務局）	鹿野町教育委員会社会教育主事 大空寿満
調 査 員	関西大学大学院文学研究科 米田文孝 関西大学文学部史学・地理学科 白神典之 西本安秀 森田 実 上田 睦 合田茂伸 西岡誠司 藤田和尊 山上 弘
調査補助員	井上龍二郎 井上信男 今本久美子 上田かおる 上田すみえ 勝田万亀野 甲破春枝 鈴木憲男 田中かず 田中淑子 徳安こと 中原澄子 西浦房子 古田梅野 細谷みわ 森山亮夫 森山幸子 山宮和子 吉田 守 和田道興
調 査 指 導	鳥取県教育委員会文化課
調 査 協 力	本通むつみ 荘 前田きみよ

2. 調査日誌抄

- 9月19日 鳥取県教育委員会文化財担当職員により、遺物散布地として遺跡発見される。
- 9月29日 本日より現地調査を開始する。終日、散乱した遺物の表面採集を実施する。
- 9月30日 一辺30mの方眼により基準杭を打つ。遺跡北半部より調査を開始する。
- 10月1日 ほ場整備工事による削平当初の予想以上に著しい。北地区北端でピット群を検出する。
- 10月2日 前日検出のピット群(掘立柱建物跡群)の精査。その範囲は周辺に拡大するらしい。
- 10月3日 北地区東北部の排土にかかる。
- 10月4日 北地区東南部で1号竪穴住居跡検出。
- 10月5日 1号竪穴住居跡の南5mでもう1基の住居跡を検出(2号竪穴住居跡)。
- 10月10日 雨が4日間降り続け、午前中は水抜き作業を実施する。午後より排土を開始する。
- 10月15日 北地区の排土及び一部精査を続行。
- 10月16日 北端部ピット群を再度精査。範囲は東西10m、南北13mに及ぶことが判明する。
- 10月18日 ピット群を全て掘り上げる。
- 10月21日 北地区中央、1号竪穴住居跡の西北4mの地点で大型土壇を検出する。
- 10月23日 1号竪穴住居跡内の精査。かなり削平を受け、床面密着の遺物は皆無である。
- 10月24日 引き続き1号竪穴住居跡精査。炉跡内で古式土師器(甗・甕・高杯)の出土をみる。
- 10月25日 1号竪穴住居跡の遺構検出に努める。
- 10月27日 2号竪穴住居跡内の精査を開始。西北側に隣接して貯蔵穴状の土壇を検出、精査。
- 10月28日 2号竪穴住居跡中央部西側で、さらに土壇を検出する。同住居の精査を一応終える。
- 11月9日 排水溝の断面にかかった溝の検出を目的として、S1トレンチを設定する。表土排除作業で1日を終える。
- 11月10日 S1トレンチで溝を検出する。
- 11月11日 本日より関西大学学生が調査に参加する。1号竪穴住居跡の平面実測ならびに炉跡の実測を行なう(13日に終了)。
- 11月12日 2号竪穴住居跡の精査後平面実測。
- 11月14日 北地区内の遺構について再び精査する。新たにピット約10個を検出。北地区平面実測を開始する(24日に終了)。
- 11月15日 北地区東北部で、ピットの配列から遺構面がさらに東へおよぶ可能性が強まったため、拡張部を設ける。精査後、平面実測。
- 11月16日 1号竪穴住居跡および2号竪穴住居跡の写真撮影を行なう。
- 11月17日 北地区全景写真撮影のため終日清掃を行ない、夕刻撮影を終了する。
- 11月18日 遺構範囲確認のため、遺跡南半部にS2トレンチを設定し、掘り下げる。
- 11月19日 S2トレンチで木棺直葬墓検出。ただし、前日夜半に及ぶ作業であったため、中央部を分断していた。おおいに反省させられる。
- 11月20日 S2トレンチ木棺直葬墓実測終了。S1トレンチも溝を掘り上げ、実測を終える。N1トレンチを新たに設定し、遺跡北半部でもS1トレンチから続く溝を検出する。
- 11月23日 S1・S2トレンチ写真撮影。排水溝断面の実測、および写真撮影を終える。
- 11月24日 N1トレンチの実測ならびに写真撮影を行ない、現地における全調査を終了する。



Fig. 9 調査風景(北地区)



Fig. 10 調査風景(N1トレンチ)

第Ⅲ章 遺跡と遺物

1. 遺跡の立地

鹿野町の南方に聳える標高 920.6 m の鷲峰山とそれに連なる山塊から、北に向かって傾斜する急峻な斜面より派生した一支尾根が越路ヶ丘丘陵である。

越路ヶ丘丘陵は、標高 134.8 m をピークとし、北方は気高町浜村に至る小丘陵に、南方は鷲峰山塊に連続するものであったが、旧河内川の氾濫により二者に分断され、現在みるような独立丘陵状を呈するに至ったと推定される。

その証左は地質学的な検討によって得られるが、新第三紀鮮新世火山岩類下部（凝灰岩）層が南北に連続する事実は、このような状況を端的に物語るものである。

さて、寺内京南遺跡は、この越路ヶ丘丘陵の北方約 200 m の位置にあり、旧河内川が形成した低位段丘上に位置している。遺跡は標高 34 m から 36 m までの、比較的平坦な地にあり、今回の調査で確認した遺構は、舌状に張り出した先端部付近に集中している。また、東北部付近を中心にして、比高約 1 m を測る段差が認められるが、これは、現在本遺跡東方約 1 km に北流する浜村川の氾濫により形成されたものであろう。このように、本遺跡は氾濫による集落の冠水・流失の危険性が低い、微高地状を呈する当該地に選定されたのであろう。

次に、本遺跡周辺字限図に目を転じると、京南・東千学を中心にして北側に接する四反田から右廻りに南田、早焼田、西三角田、千学、上千学、西千学、流田である。この、西に接する流田の小字名からも遺跡の足下を襲った度重なる氾濫の激しさがうかがえよう。

さて、寺内京南遺跡の基本的な層序および堆積状況は、砂礫層（段丘礫層）上にローム層（約 70 cm）、さらにクロボクⅡ層（約 30 cm）、クロボクⅠ

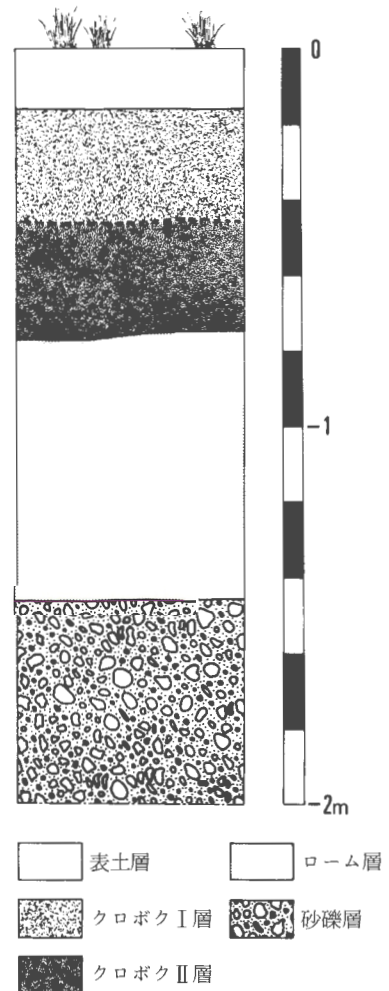


Fig. 11 基本土層柱状図

層(約30cm)、表土層(約15cm)である。今回の調査で確認されたうちで、最も古く位置づけられる古墳時代前期遺構面はクロボクⅡ層より確認され、遺構の性格によっては、その最下点レベルは下層のローム層中位にまで達している。クロボクⅠ層と同Ⅱ層の識別は断面観察では比較的容易であるが、平面観察でその差異を確認することはかなりの困難を伴い、本遺跡がローム層上面まで削平を受けた時点で、ようやくその存在が知られるに至ったことについては、止

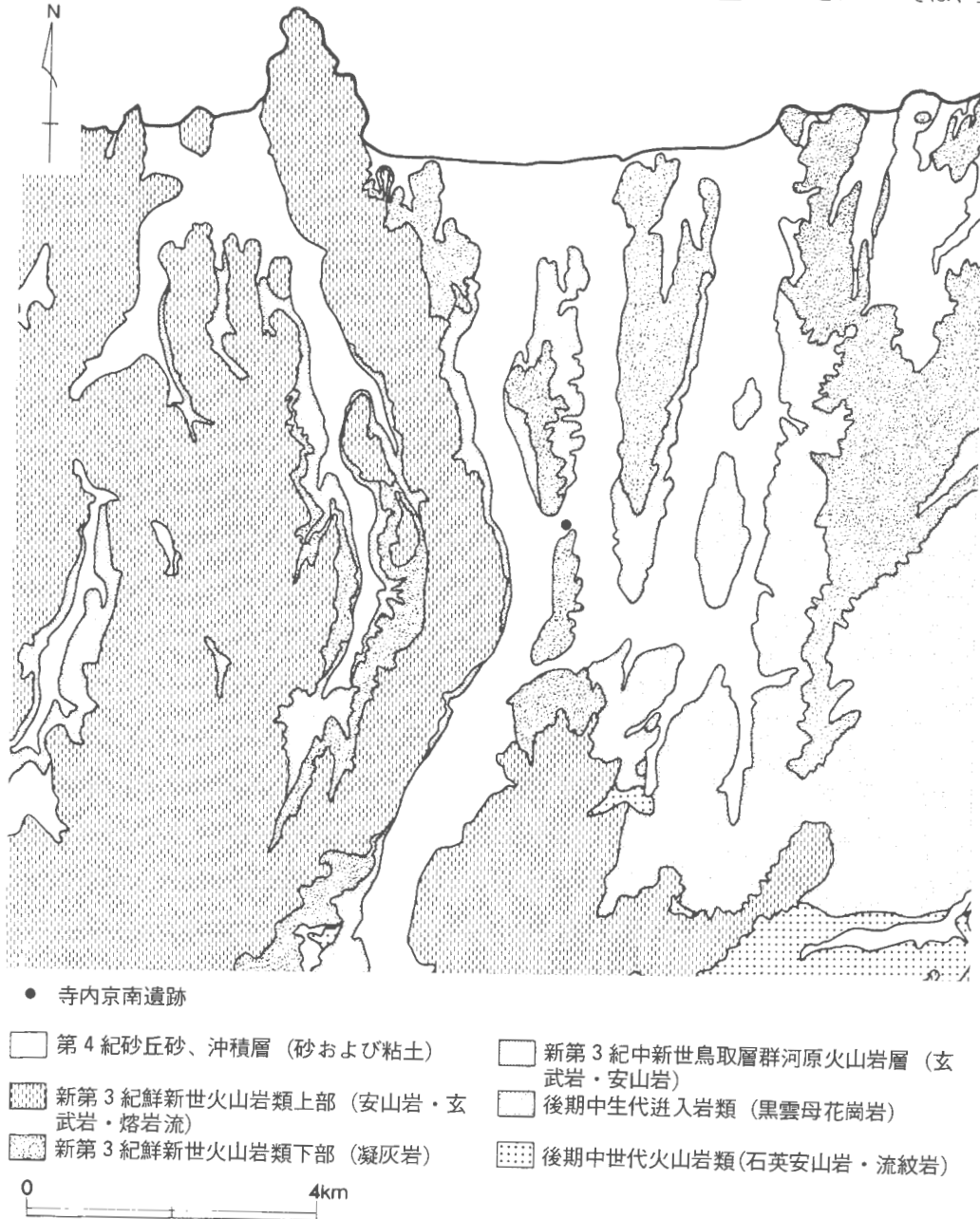


Fig. 12 周辺地質図

むを得ない一面を持っているといえよう。

さらに、寺内京南遺跡の立地上の特徴をより明確に理解するために、周辺に所在する諸遺跡の任意の地点より抽出した土層柱状図によって検討を加えておく。

まず、本遺跡が低位段丘上に位置するのに対し、気高町上原遺跡は、高位段丘上に位置するという立地上の差異はあるが、基本的な層序ならびに土層の堆積状況は、寺内京南遺跡（Fig. 14、B1・B2・B3・B4）と同様、下層からローム層、クロボク層、床土・耕土となっている（Fig. 14、A1・A2）。また、上原遺跡の北方約3kmの低位段丘上に位置する気高町会下郡家遺跡（Fig. 14、D1）においても近似した層序である。

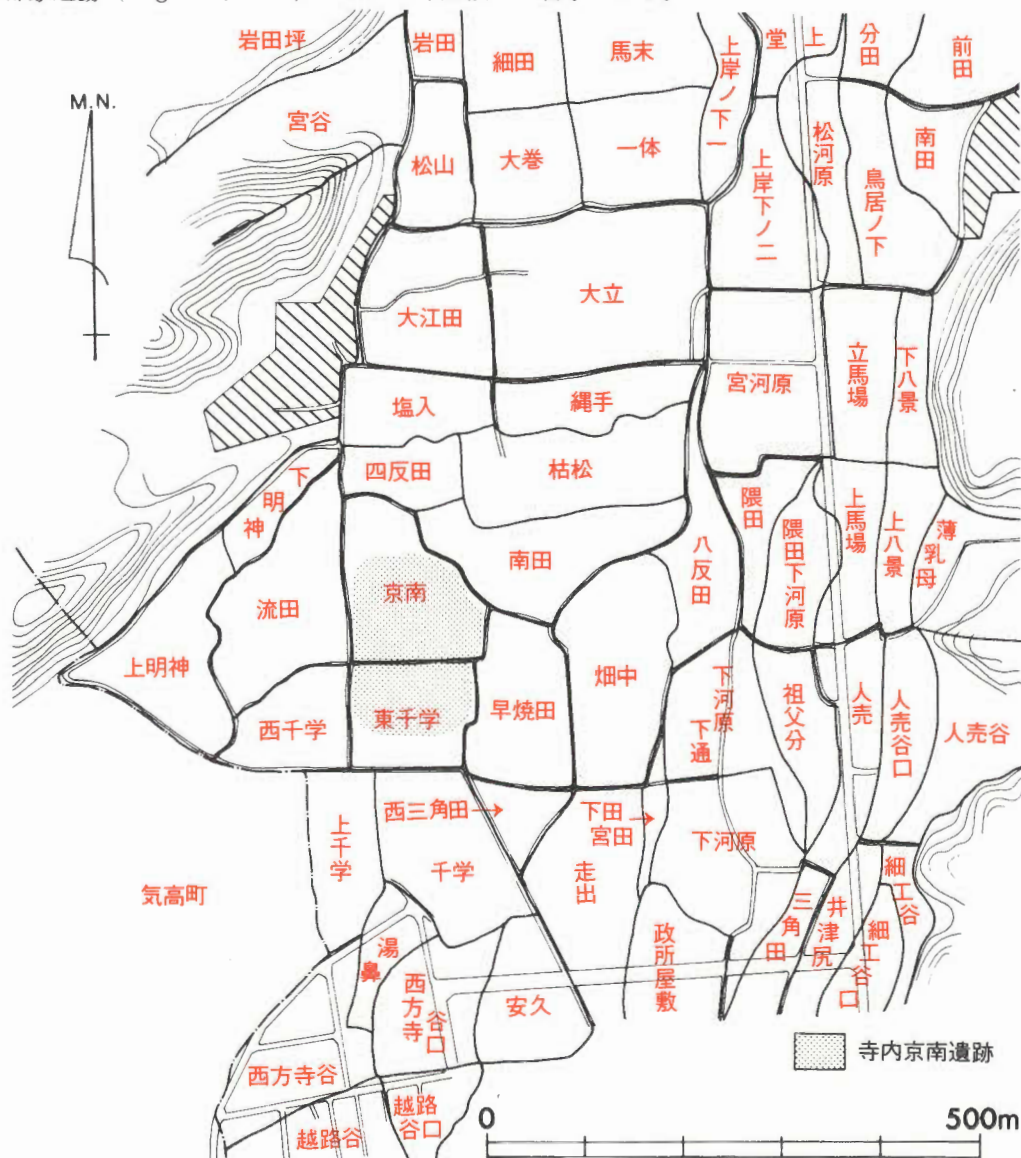


Fig. 13 周辺字限図

ところで、前述したように、クロボクⅠ層とⅡ層の識別は平面では困難であるため、上原遺跡ならびに会下郡家遺跡でも、その遺構面はクロボク層内に存在すると考えて大過ない。また、各遺跡に共通する段丘上の立地と、層序ならびに堆積状況からは、遺跡の選地が限定された地理的条件を満たす地域について行なわれたことを示唆する。

なお、本遺跡の北方約500mの低位段丘端に位置する寺内廃寺では、東北部の一部（Fig. 14、C 3）を除き、クロボク層が認められず（Fig. 14、C 1・C 2）、浜村川に流入する小河川の度重なる氾濫により、クロボク層と共に遺構も流失したものと考えられる。

さて、調査区の設定にあたっては、遺跡推定範囲南端に原点を定め、磁北方向に延長した中軸線と東西30m離れて平行する軸線を設定した。その後、軸線上に原点から30mごとに基準点を設け、各々東西方向に延長した。これにより、南北150m、東西60mの範囲に調査区を設定した。また、遺跡推定範囲の中央を分断する排水溝以北を遺跡北半部分、以南を遺跡南半部分とした。なお、調査は遺跡推定面積約22,000m²のうち、遺跡北半部分で450m²、遺跡南半部分で70m²、合計520m²について実施した。

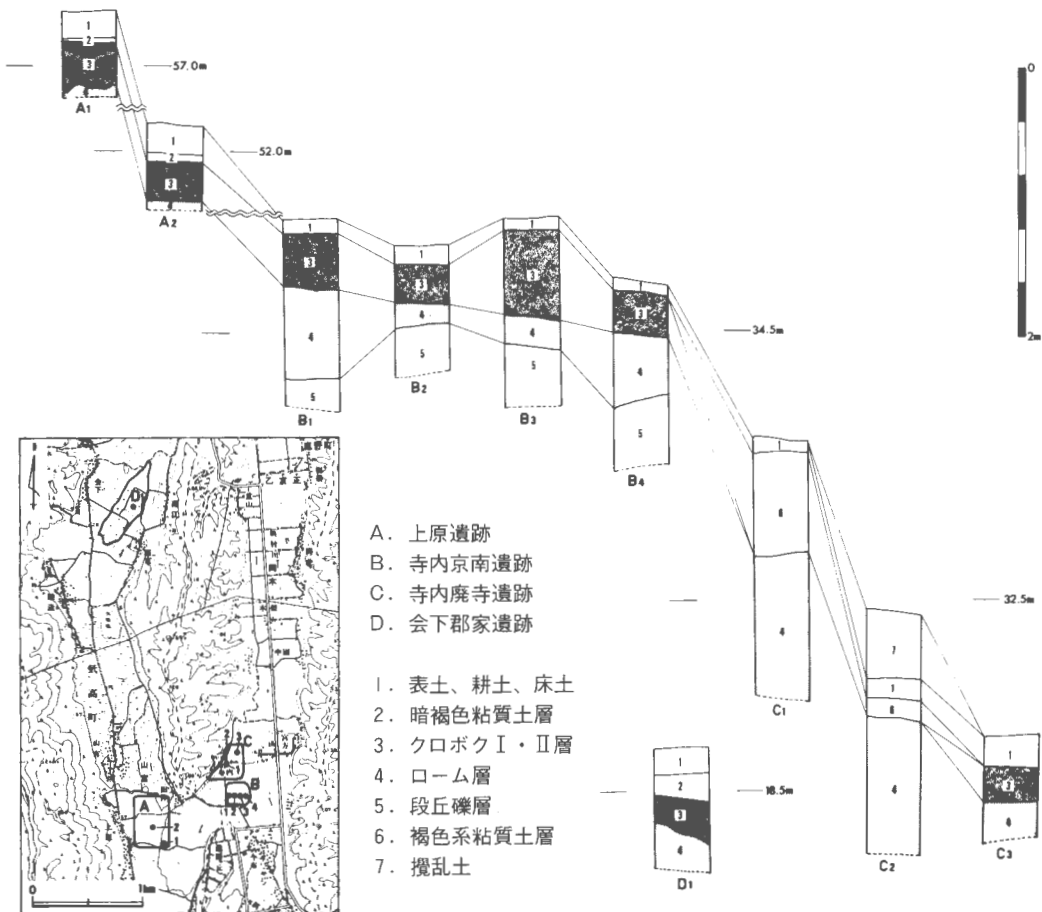


Fig. 14 周辺土層柱状図

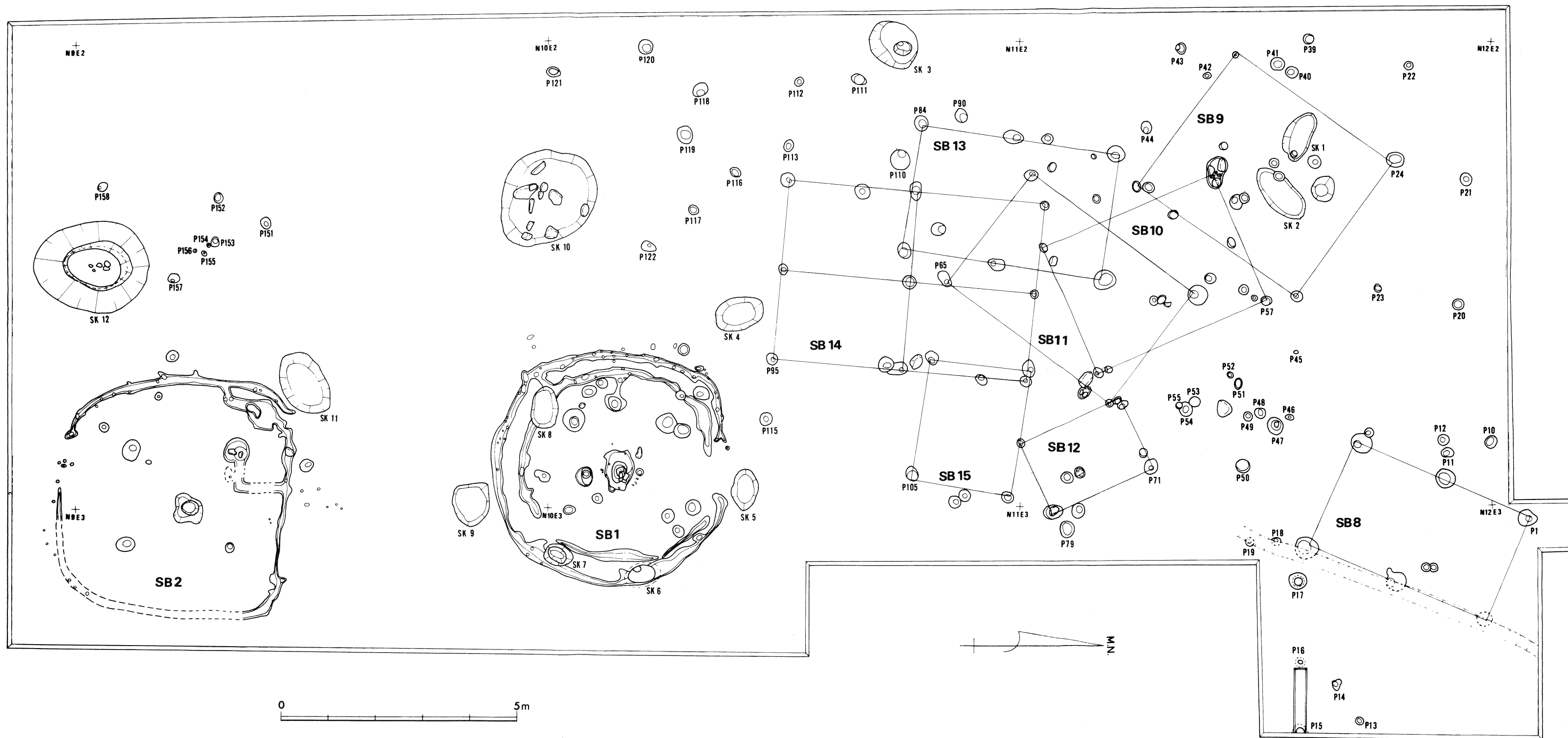


Fig. 16 北地区遺構全体図

a. 1号竪穴住居跡 (SB1)

北地区の東南部で、ほぼ南北にならんだ2基の竪穴住居跡を検出した。ここでは、北側を1号竪穴住居跡 (SB1)、南側を2号竪穴住居跡 (SB2) と呼称する。また、SB1 炉跡付近に据え置かれた台石や後述する排水溝の断面観察の所見などより、SB1、SB2とも、本来はクロボクⅡ層内から掘り込まれ、床面も同層内にある可能性が高いが、ここでは検出面 (ローム層上面) を床面とした。

さて、SB1は直径約5mを測る円形プランの竪穴住居跡で、建て替えによる規模拡張のため、二重の周溝が認められる。ここでは、当初掘削されたものをSB1-a、その後拡張されたものをSB1-bとする。床面積はSB1-aが10.2㎡、SB1-bが13.7㎡である。

SB1-aの周溝は、幅約5cm～約30cm、深さ約2cm～約5cmで、北側および東側の一部が切断されている。SB1-bの周溝は、幅約10cm～約40cm、深さ約2cm～約8cmで、北側の一部を除き、全周にわたって検出した。周溝内には径5cm程度の小ピットが数多くみられるが、これは周壁の崩壊を防止する土留め用打込み杭の痕跡と推定される。また、前述のように周壁はほとんど失われており、壁高を知ることはできない。

SB1の中央部分には、径約85cm×約60cm、深さ約55cmの楕円形を呈する炉跡 (P₁₂₈) がある。この炉跡は、二段に掘り込まれて、内部には黒灰色土 (炭化物を多量に含む) が充填しており、底には約35cm×約30cm×約20cmの二等辺三角形を呈する砂岩質の石を、底辺相当部分を上にして縦方向に置いている。石の上面はほぼ平坦になっており、その上に覆い被さるようには甕形土器 (Fig. 38、1) 1個体分が出土している。炉跡からは、他に甕形土器3個体 (Fig. 39、2・4・11)、高杯形土器1個体 (Fig. 39、9)、低脚杯形土器2個体 (Fig. 39、7・8) が出土している。なお、石には熱変を受けた痕跡は認められなかった。

なお、柱穴らしきピットは全部で10個あるが、SB1-aに伴う主柱穴は、P₁₂₄～P₁₂₇である。主柱穴間の距離はいずれも2m前後である。また、SB1-bへの拡張にあたってP₁₂₄→P₁₂₉、P₁₂₅→P₁₃₆への建て替えが考えられる。

一方、SB1およびその周辺には、6基の土壇がある。SK4は、SB1-bの周溝外側から西北約1.5mにある。径約1m×約0.7m、深さ約60cmで、楕円形を呈する。本土壇からは甕形土器の口縁部 (Fig. 40、18) が出土している。

SK5は、SB1-bの周溝の欠損部分外側に位置しており、径約90cm×約60cm、深さ約20cmで楕円形を呈する。

SK6は、SB1内の東側にあり、SB1-bの周溝と重複して掘り込まれている。上部径約55cm×約35cm、底部径約75cm×約50cm、深さ約40cmで、平面形は楕円形を呈し、断面は袋状をなす。この土壇の底部付近から高杯形土器杯部2個体 (Fig. 39、5・10) が出土している。

SK7は、SK6の南方約1.8mに位置し、同じくSB1-bの周溝と重複して、二段に掘

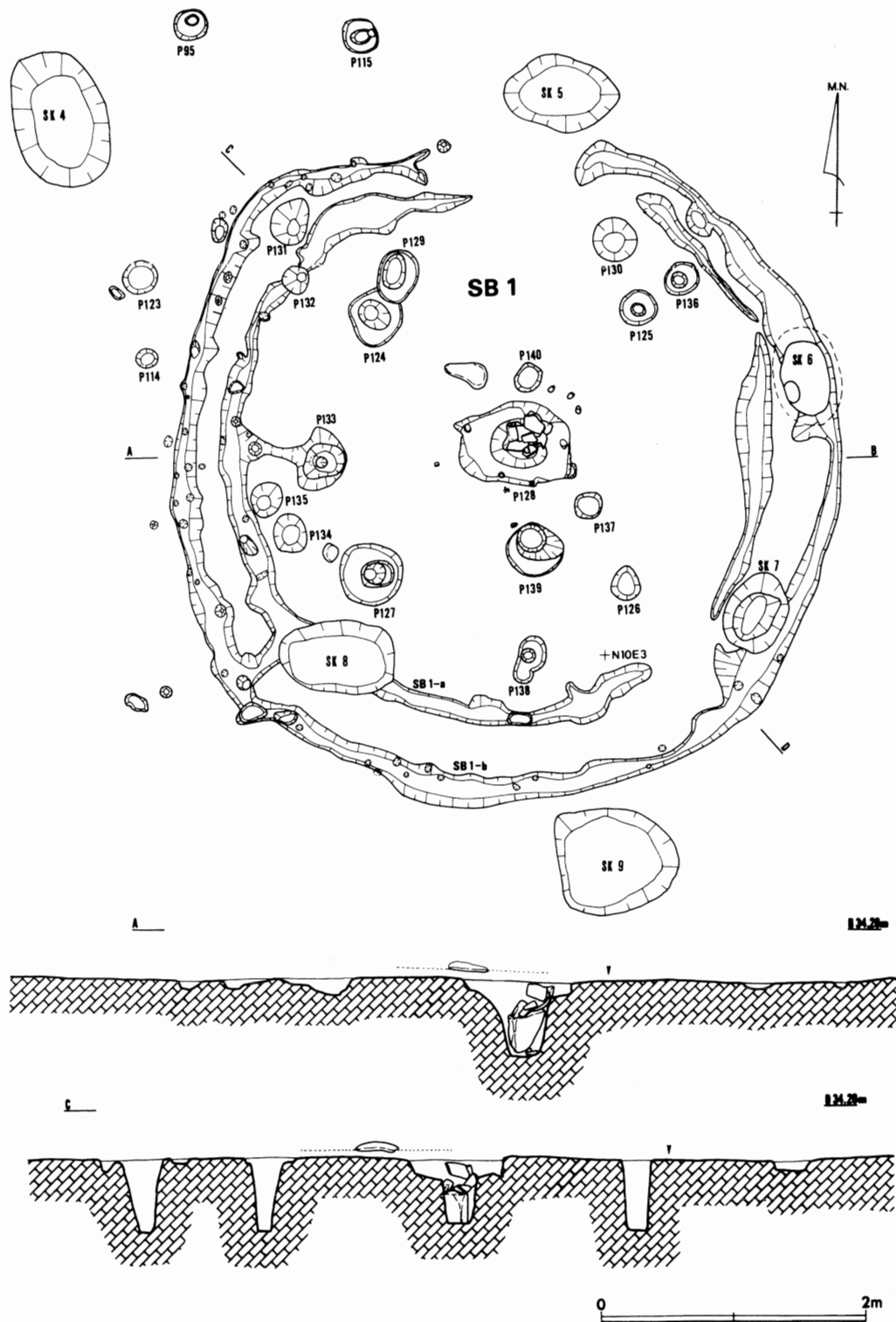


Fig. 17 SB 1 実測図

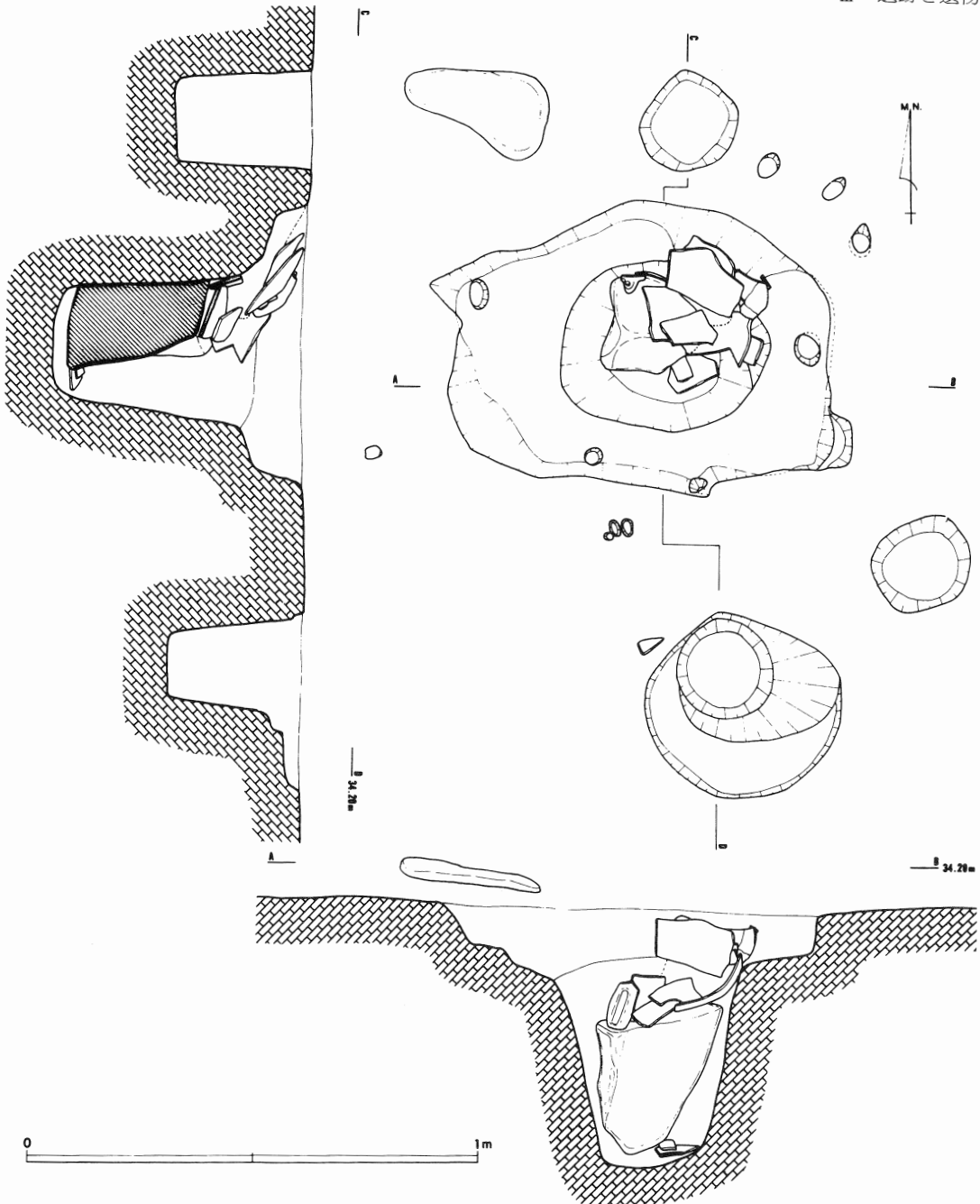


Fig. 18 SB 1 炉跡実測図

り込まれている。径約60cm×約45cm、深さ約20cmの楕円形を呈する。

SK 8は、SB 1内の西南部に位置し、SB 1-aの周溝と重複して掘り込まれている。径約90cm×約55cm、深さ約30cmの楕円形を呈する。



Fig. 19 SK 6 高杯形土器出土状況

SK 9は、SB 1ーbの周溝の外側に近接して掘り込まれており、径約90cm×約80cm、深さ約10cmで、楕円形を呈する。

SK 6はその形態からみて、SB 1ーbに伴う貯蔵穴であろうが、その他の土壌の性格に関しては不明である。

なお、これらの土壌をはじめ、周溝、柱穴およびその他のピットなどの埋土は、いずれも黒褐色粘質土である。

b. 2号竪穴住居跡 (SB 2)

2号竪穴住居跡 (SB 2) は、SB 1の南方約5mに位置し、南北5.0m×東西5.0mのやや胴張りのある隅丸方形プランを呈する。床面積は18.4㎡を測る。

周溝は、幅約8cm～約30cm、深さ約2cm～約5cmを測り、北側および西側においては明確に検出できたが、東側と南側は削平が著しく、痕跡程度にしか検出しえなかった。なお、西北隅では、周溝は二重になっている。

また、北側の周溝の中央部やや西側から、P₁₄₂へ向かって、L字状に延びる溝が検出された。この溝は全体的には不明確ではあるが、周溝との連結部およびコーナー部とP₁₄₂との連結部においては明確に検出でき、幅約20cm、深さ約2cmを測る。高低差を考えると、P₁₄₂の方よりコーナー部が若干高いため、P₁₄₂からの排水溝として適当ではないといえ、間仕切に伴う溝としての性格を考えた方が妥当であろう。しかし、遺構の残存状況が極めて悪いため、本来の掘り込み部分の状況が判明せず、断定は避けておきたい。

主柱穴はP₁₄₂～P₁₄₅で、各柱穴間の距離は、2.1m～2.2mを測る。また、P₁₄₂の底には根固めのものと思われる石が落とし込まれている。

SB 2の中央にも、SB 1同様、炉跡 (P₁₄₆) がみられる。二段の掘形をもち、一段目は平面形がほぼ四角形を呈する。二段目は円形を呈し、やや北側に寄せて掘り込まれている。

一段目の掘形は、東西約60cm×南北約60cmを測るいびつな円形を呈し、二段目の掘形は径約33cm前後の円形で、深さは47cmを測る。また、炉跡内部には、黒灰色土 (炭化物を多量に含む) が充満していたが、出土遺物は認められなかった。

一方、SB 2の西北隅の外側に近接して、長径約1.4m×短径約0.9mの楕円形を呈し、深さ約85cmを測る大型土壌 (SK 11) が掘り込まれている。出土遺物は認められなかったが、SB

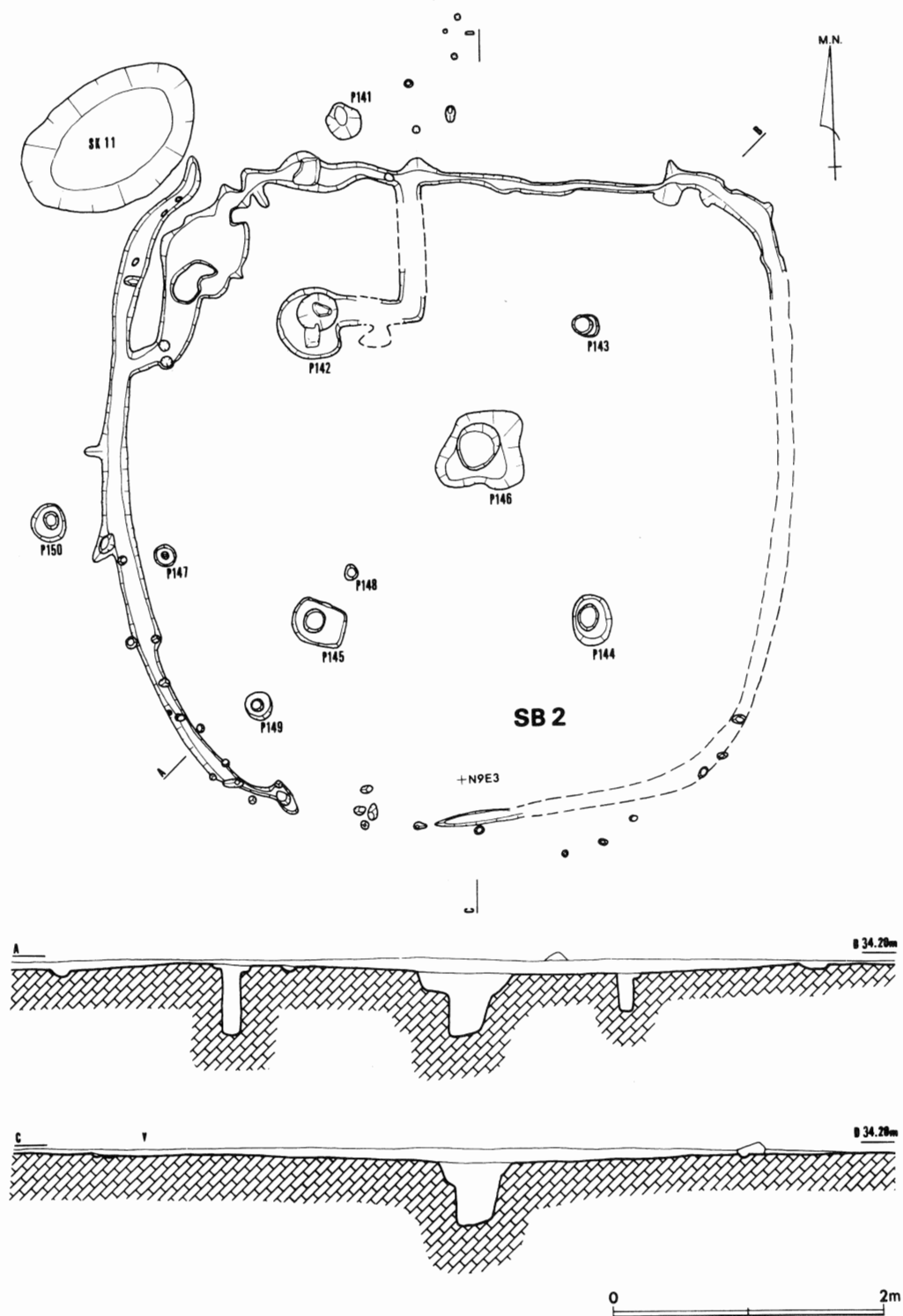


Fig. 20 SB 2 実測図

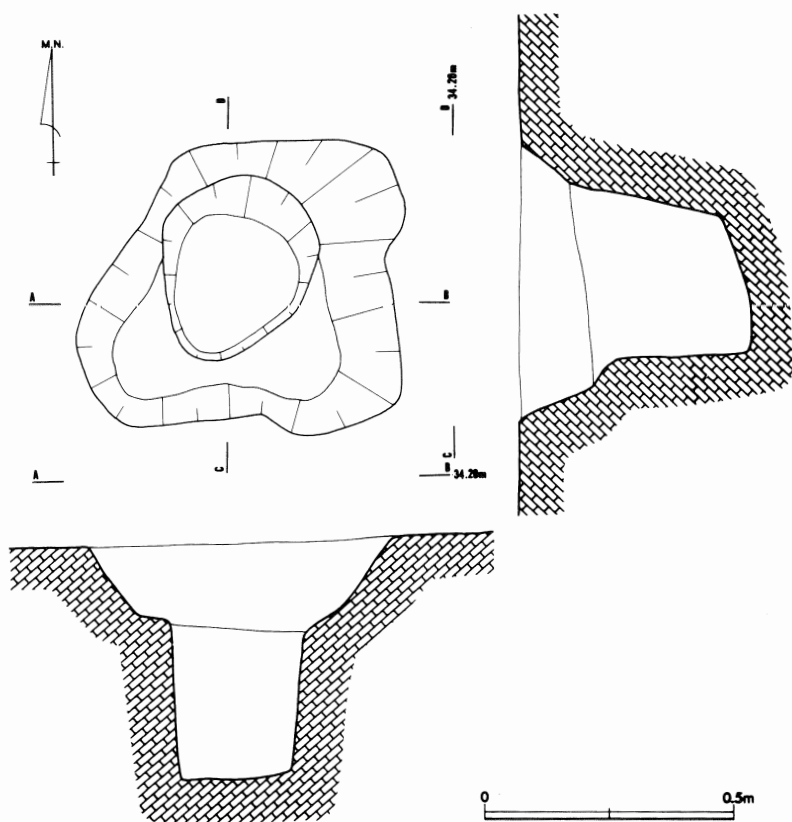


Fig.21 SB 2 炉跡実測図

2に伴う貯蔵穴的な性格が推定されよう。

なお、SB 2の周溝・柱穴・ピット・貯蔵穴の埋土は、SB 1および排水溝断面に観察されるSB 5・6・7と同様、いずれも黒褐色粘質土（クロボク）を基調としている。遺物は、西側の周溝内などから若干出土したが、いずれも細片で図化できるものはない。

本住居跡の時期は、平面形からみて、SB 1より下るかもしれない。しかし、西側周溝内から出土した土器は細片で図化できないが、SB 1のそれと胎土・色調・調整等が近似しており、また、後述するように、当地方においては円形平面を呈する住居が残存する事実もみられることから、本住居跡とSB 1とは併行関係をもつ可能性がある。

c. 掘立柱建物跡 (SB 8～SB15)

北地区の北半部において、190余個のピット群を検出したが、現状では、総柱のもの1棟を含む8棟の掘立柱建物跡が確認できる。

これらの建物跡には、一部柱穴相互の重複関係がみられるが、北地区西北隅のものから、掘立柱建物跡Ⅰ (SB 8)、掘立柱建物跡Ⅱ (SB 9) …… 掘立柱建物跡Ⅷ (SB 15) とした。

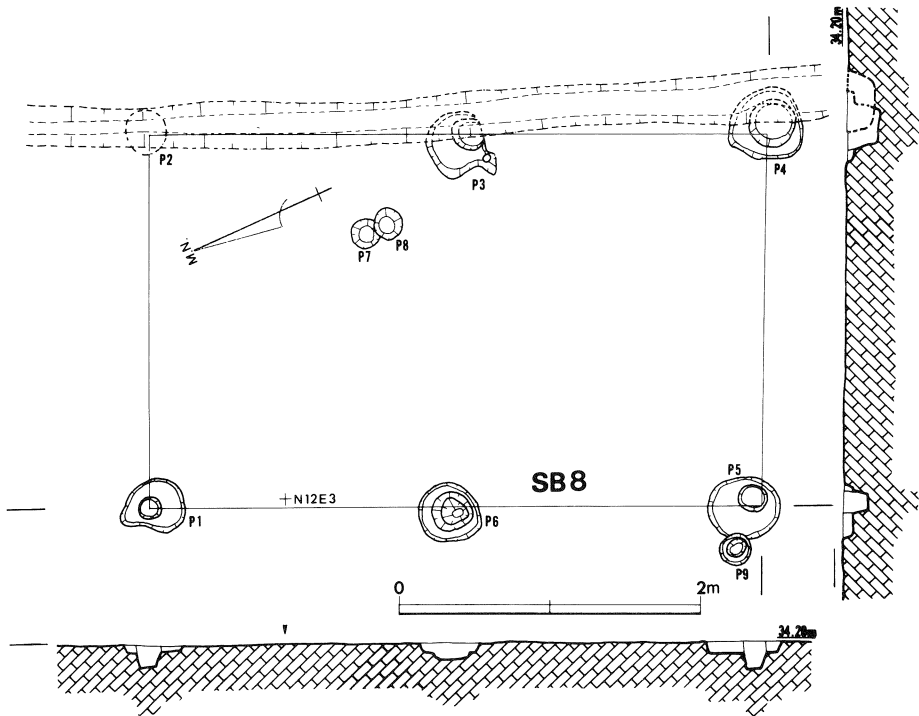


Fig. 22 SB8 実測図

SB8

1間×2間の建物で、梁間2.46m、桁行4.08mを測り、桁行方位はN-23°Eである。柱穴はP₁～P₆を数え、各柱穴間距離は、2.46・2.10・1.98・2.46・2.04・2.04mを測る。1尺を30cmとすれば（以下、1尺=30cm）、8.2尺×13.6尺の建物となる。粘土の施された痕跡がある。

SB9

1間×1間の建物で、梁間3.66m、桁行4.14mを測り、桁行方位はN-36°Eである。柱穴は、P₂₄～P₂₇を数え、各柱穴間距離は、3.66・4.08・3.66・4.08mを測り、12.2尺×13.6尺の建物である。遺物は検出できなかった。また、床面のSK1は受熱・赤化している。

SB10

1間×1間の建物で、梁間3.06m、桁行3.90mを測り、桁行方位はN-23°Wである。柱穴は、P₅₆～P₅₉を数え、各柱穴間距離は、3.06・3.90・3.00・3.92mを測り、10.2尺×13尺の建物である。遺物は検出できなかった。

SB11

1間×1間の建物で、梁間3.03m、桁行4.38mを測り、桁行方位はN-37°Eである。柱穴は、P₆₃～P₆₆を数え、各柱穴間距離は、3.03・4.38・3.00・4.36mを測り、10.1尺×14.6尺の建物

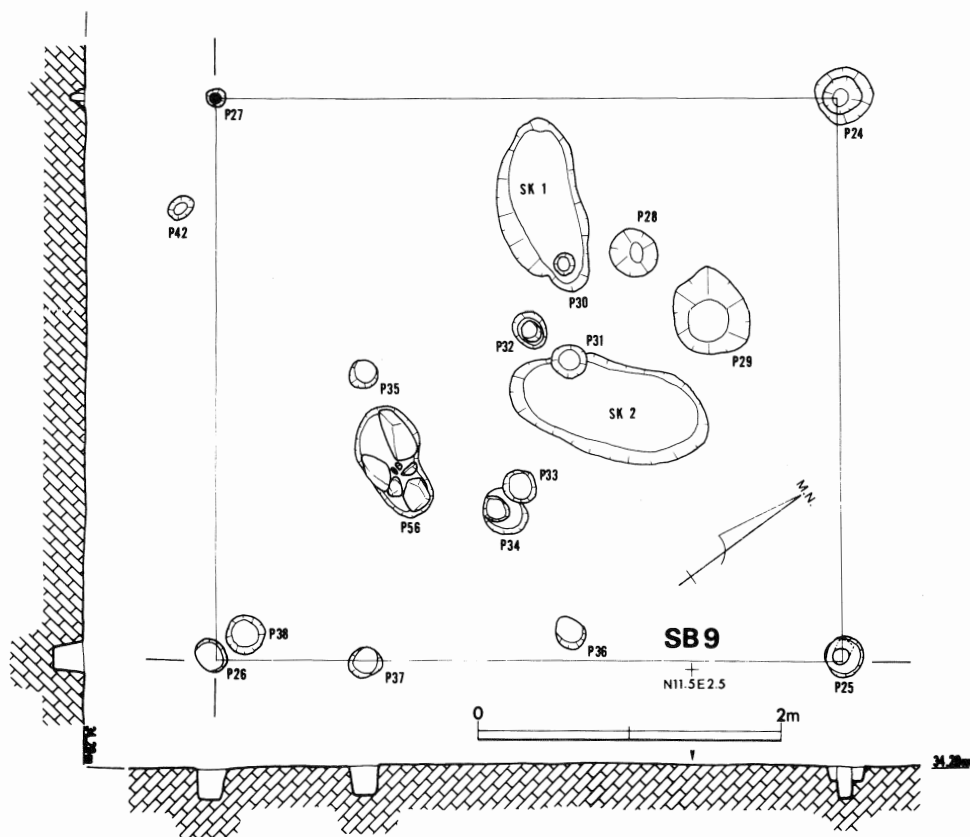


Fig. 23 SB9 実測図

である。遺物は検出できなかった。

SB12

1間×1間の建物で、梁間1.68m、桁行2.37mを測り、桁行方位はN-25°Wである。柱穴は、P₇₀～P₇₃を数え、各柱穴間距離は、1.68・2.37・1.68・2.36mを測り、5.6尺×7.9尺の建物である。P₇₁から木片が出土した他は、遺物は検出できなかった。

SB13

1間×2間の建物で、梁間2.70m、桁行4.20mを測り、桁行方位はN-8°Eである。柱穴は、P₈₀～P₈₅を数え、各柱穴間距離は、2.70・2.22・1.98・2.72・2.04・2.16mを測り、9尺×14尺の建物である。遺物は検出できなかった。

SB14

2間×2間の総柱建物で、梁間3.90m、桁行5.40mを測り、桁行方位はN-6°Eである。柱穴はP₉₁～P₉₉を数え、各柱穴間距離は、1.95・1.95・2.68・2.72・1.92・1.98・2.70・2.70mを測り、13尺×18尺の建物である。遺物は検出できなかった。

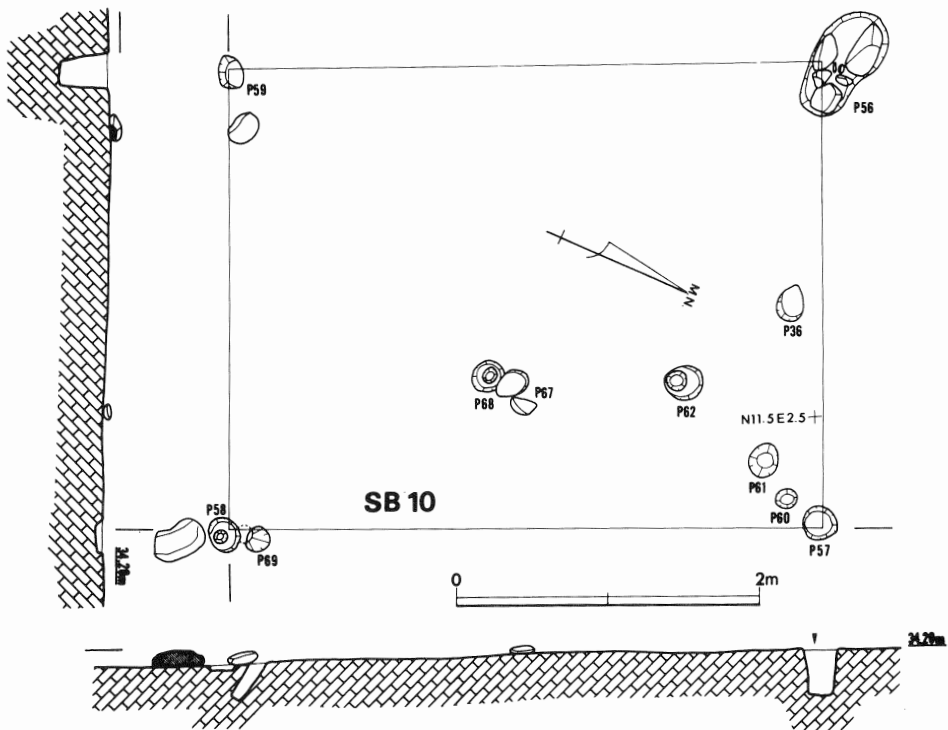


Fig. 24 SB10 実測図

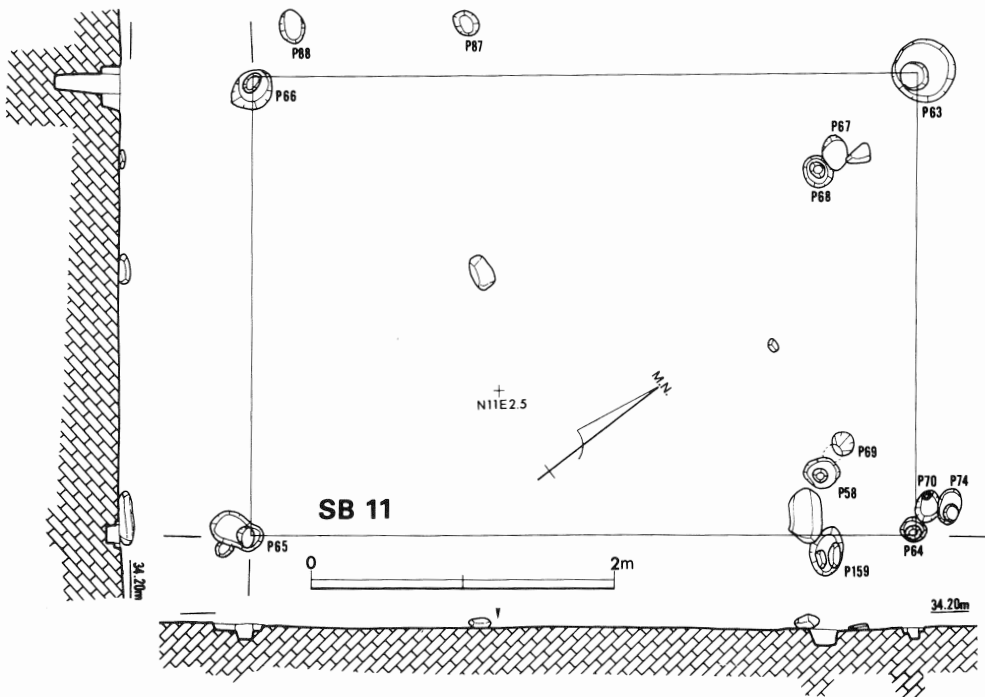


Fig. 25 SB11 実測図

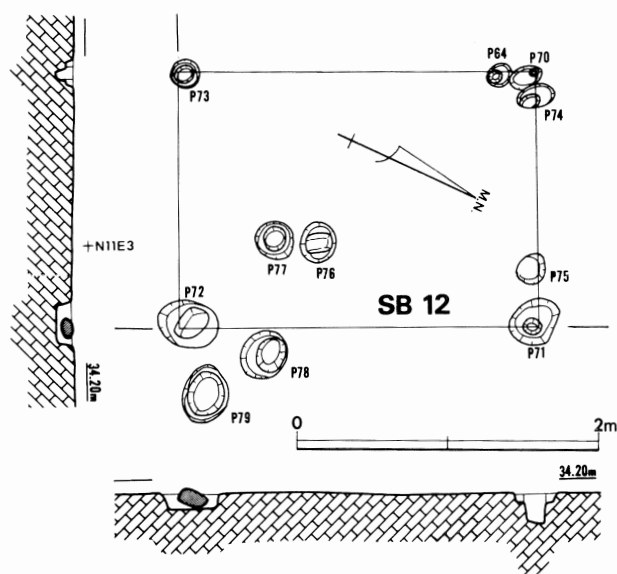


Fig. 26 SB 12実測図

SB 15

1間×1間の建物で、梁間2.10m、桁行2.70mを測り、桁行方位はN-82°-Wである。柱穴は、P₁₀₃～P₁₀₆を数え、各柱穴間距離は、2.70・2.10・2.70・2.11mを測り、7尺×9尺の建物である。遺物は検出できなかった。

これらの掘立柱建物の時期については、出土遺物がないため不明であるが、8棟すべての建物に関して尺度の使用が想定でき、奈良時代以降の可能性が高い。

また、これらの建物はその

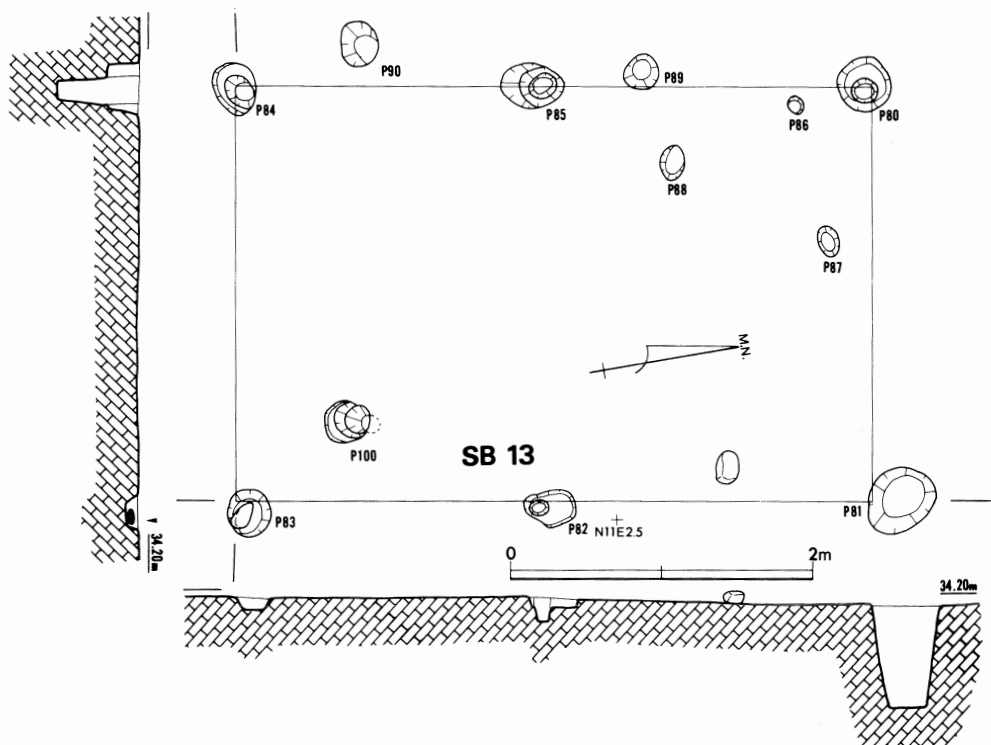


Fig. 27 SB 13実測図

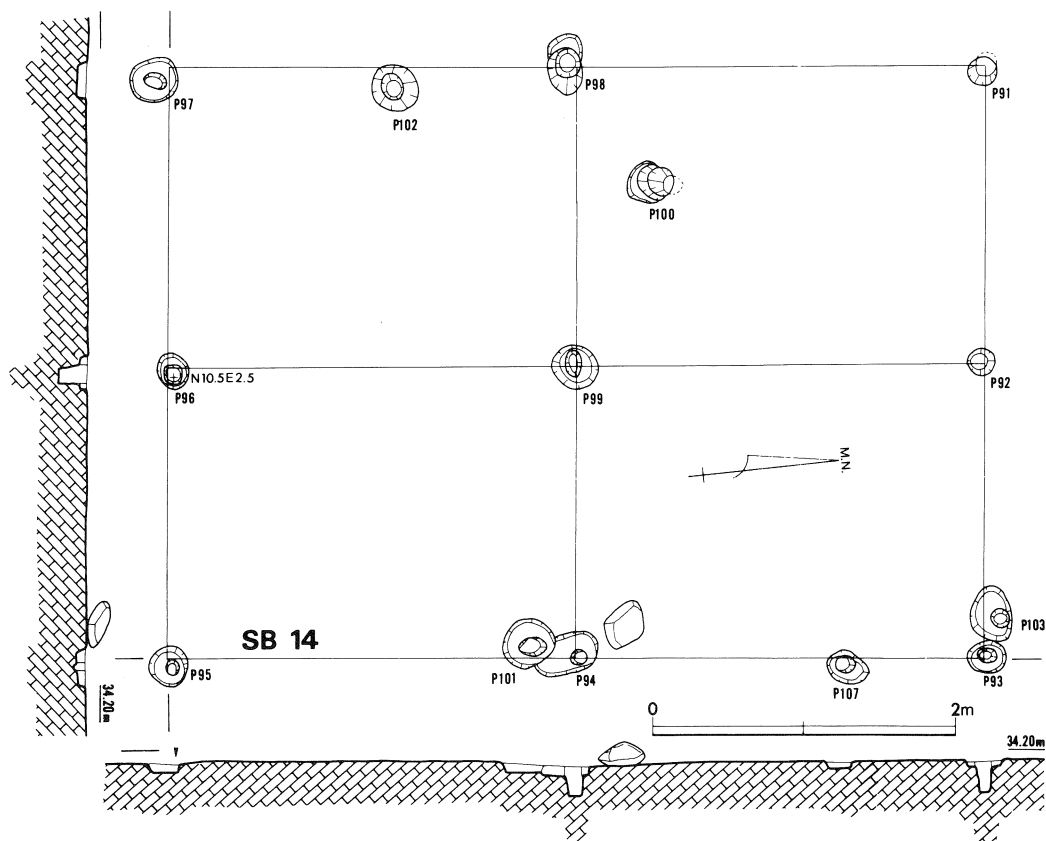


Fig. 28 SB14 実測図

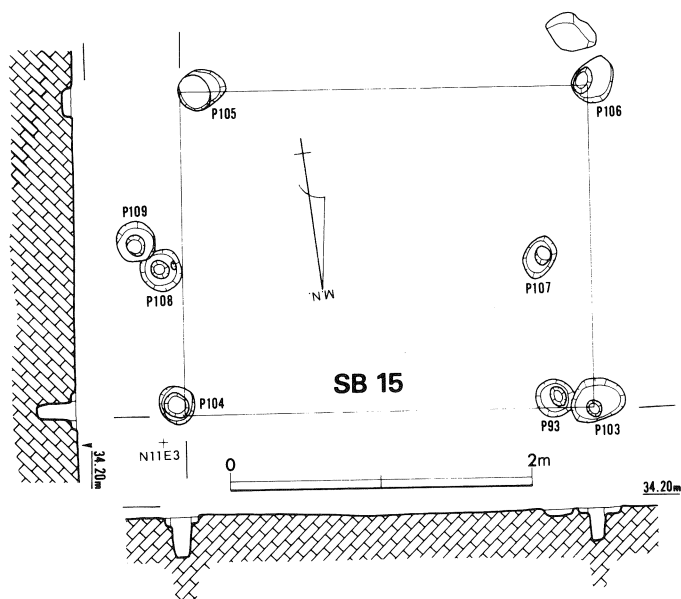


Fig. 29 SB15 実測図

桁行方位により、数グループに分けることができる。

まず、SB 8はN-23°EでこれをAグループとする。次に、SB 9とSB 11はそれぞれN-36°EとN-37°Eでほぼ同じところからこれをBグループとする。SB 10とSB 12は、それぞれN-23°WとN-25°WでこれをCグループとする。SB 14はN-6°Eで、これをDグループとする。

また、SB 13はN-8°E

で、S B 15はN-82°Wであるが、S B 15の梁間はN-8°Eであり、S B 13の桁行と同じところから、これをEグループとする。

Aグループを除いて、建物相互の重複からは、B～Eグループはいずれも同時に存在し得ず、柱穴相互の重複関係は、B→CおよびD→Eの変遷が考えられることから、各グループ間の前後関係として、B→C→D→E・B→D→C→E・B→D→E→C・D→B→C→E→・D→B→E→C・D→E→B→Cの6通りを考えることができる。これらの掘立柱建物群の性格については、現在のところ不明である。

なお、本地区東北隅の拡張部において、袋状を呈するピット（P₁₅～P₁₇）を検出した。クロボクを埋土とするため、柱痕は認め得なかったが、いずれも掘立柱建物群を形成するものと考えて大過ない。P₁₅より西方向に設定したトレンチの所見によると、まずクロボクⅡ層を除去、黄褐色ローム層の上面より掘形を掘り込み、柱を設置した後、クロボクⅠ層を埋土とし、さらに黄褐色ロームとクロボクの混合土で、貼土をおこなったものであろう。

これら3基のピットから建物の全容を確認することは困難であるが、このような入念な造成のあり方は、張床中より出土した布目瓦片〔10条/cm×10条/cm〕（P L 16、59）の存在を考慮に入れるとき、北方約500 mに所在した寺内廃寺および、西方約1 kmに所在する気多郡衙の可能性が高い上原遺跡との関係を想定することができよう。

なお、S B—8を構成するピット群のうち、P—4にはこの貼床が及んでいることが確認でき、少なくともS B—8には全面に貼土が施されている可能性が高い。

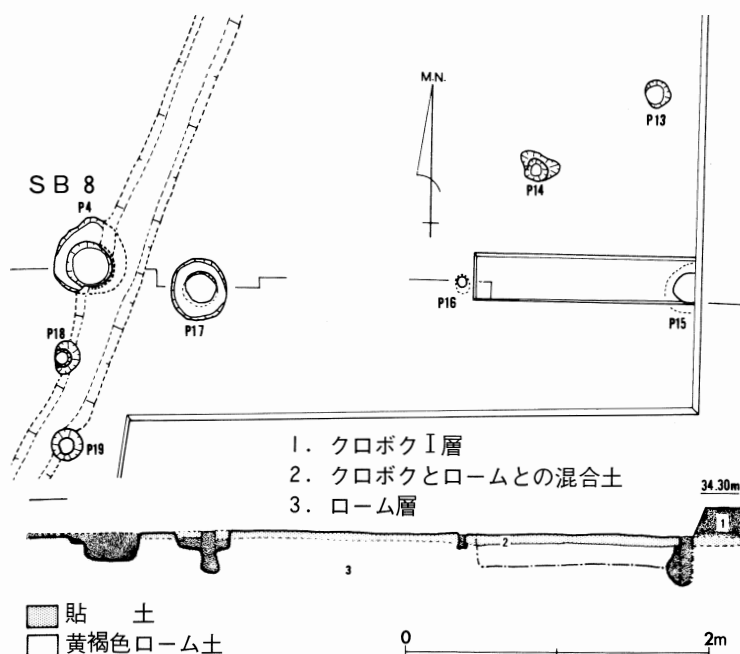


Fig. 30 北地区拡張部実測図

	柱 間	梁間距離(m)	桁行距離(m)	面積(m ²)	桁行方位
S B 8	1×2	P ₄ —P ₅ 2.44	P ₁ —P ₅ 4.08	9.96	N—23°—E
S B 9	1×1	P ₂₄ —P ₂₅ 3.68	P ₂₅ —P ₂₆ 4.14	15.24	N—36°—E
S B 10	1×1	P ₅₆ —P ₅₇ 3.06	P ₅₇ —P ₅₈ 3.90	11.93	N—23°—W
S B 11	1×1	P ₆₃ —P ₆₄ 3.03	P ₆₄ —P ₆₅ 4.38	13.27	N—37°—E
S B 12	1×1	P ₇₀ —P ₇₁ 1.67	P ₇₁ —P ₇₂ 2.37	3.96	N—25°—W
S B 13	1×2	P ₈₀ —P ₈₁ 2.70	P ₈₁ —P ₈₃ 4.20	11.34	N—8°—E
S B 14	2×2	P ₉₁ —P ₉₃ 3.90	P ₉₃ —P ₉₅ 5.40	20.95	N—6°—E
S B 15	1×1	P ₁₀₃ —P ₁₀₆ 2.10	P ₁₀₃ —P ₁₀₄ 2.70	5.67	N—82°—W (N—8°—E)

Tab. 2 掘立柱建物跡一覧表

	ピット番号	平 面 形	掘 形 法 量	柱 痕 法 量	深 さ
S B 8	P ₁	橢 円 形	44 × 36	16 × 14	16
	P ₂	—	—	—	—
	P ₃	橢 円 形	約 44 × 40	約 20 × 20	約 18
	P ₄	円 形	50 × 約 50	30 × 約 30	約 24
	P ₅	橢 円 形	48 × 40	19 × 18	17
	P ₆	円 形	44 × 38	28 × 26	25
	P ₇	円 形	20 × 20	12 × 10	13
	P ₈	円 形	20 × 18	12 × 10	12
	P ₉	円 形	20 × 20	10 × 8	8
	P ₁₀	橢 円 形	30 × 26	19 × 13	—
	P ₁₁	橢 円 形	28 × 20	12 × 8	5
	P ₁₂	円 形	24 × 24	10 × 9	17
	P ₁₃	円 形	19 × 19	10 × 6	20
	P ₁₄	橢 円 形	25 × 20	12 × 10	8
袋状ピット	P ₁₅	橢 円 形	20 × 20	—	34
	P ₁₆	円 形	6 × 6	—	5
	P ₁₇	円 形	40 × 36	16 × 14	26
	P ₁₈	橢 円 形	21 × 16	8 × 7	25
	P ₁₉	円 形	22 × 20	9 × 8	24
	P ₂₀	円 形	27 × 24	16 × 12	18
	P ₂₁	円 形	29 × 27	11 × 10	—
	P ₂₂	円 形	22 × 18	10 × 7	—
	P ₂₃	橢 円 形	17 × 17	14 × 9	11
S B 9	P ₂₄	円 形	40 × 40	—	20
	P ₂₅	円 形	26 × 26	11 × 10	29
	P ₂₆	橢 円 形	24 × 19	—	19

Tab. 3 北地区ピット一覧表 (1)

寺内京南遺跡発掘調査報告

	ピット番号	平面形	掘形法量	柱痕法量	深さ
S B 9	P ₂₇	円形	13 × 12	6 × 5	9
	P ₂₈	橢円形	30 × 28	28 × 26	21
	P ₂₉	円形	58 × 52	11 × 10	23
	P ₃₀	円形	16 × 16	10 × 9	17
	P ₃₁	橢円形	23 × 16	14 × 12	32
	P ₃₂	円形	24 × 22	13 × 12	32
	P ₃₃	円形	24 × 24	14 × 13	35
	P ₃₄	橢円形	34 × 32	13 × 11	23
	P ₃₅	円形	18 × 18	12 × 12	37
	P ₃₆	橢円形	25 × 18	22 × 13	12
	P ₃₇	橢円形	21 × 19	18 × 17	19
	P ₃₈	円形	28 × 20	17 × 14	21
	P ₃₉	円形	23 × 22	16 × 16	21
	P ₄₀	円形	26 × 25	12 × 10	23
	P ₄₁	橢円形	30 × 30	17 × 12	29
	P ₄₂	橢円形	18 × 13	8 × 6	7
	P ₄₃	橢円形	23 × 22	18 × 16	13
	P ₄₄	円形	26 × 24	14 × 10	13
	P ₄₅	円形	11 × 7	——	6
	P ₄₆	橢円形	20 × 14	6 × 5	10
	P ₄₇	円形	39 × 33	28 × 21	10
	P ₄₈	円形	22 × 21	15 × 10	16
	P ₄₉	円形	20 × 20	10 × 11	—
	P ₅₀	円形	29 × 29	26 × 22	7
	P ₅₁	橢円形	26 × 16	18 × 10	9
	P ₅₂	円形	15 × 15	8 × 6	2
	P ₅₃	円形	24 × 22	——	6
	P ₅₄	円形	32 × 27	18 × 13	35
	P ₅₅	円形	16 × 14	12 × 10	6
S B 10	P ₅₆	橢円形	77 × 40	——	9
	P ₅₇	円形	22 × 22	——	30
	P ₅₈	円形	24 × 20	9 × 8	6
	P ₅₉	橢円形	23 × 18	——	32
	P ₆₀	円形	13 × 13	10 × 8	6
	P ₆₁	橢円形	26 × 19	12 × 11	10
	P ₆₂	円形	24 × 21	14 × 13	—
S B 11	P ₆₃	円形	42 × 40	19 × 19	18
	P ₆₄	円形	16 × 16	12 × 10	6

Tab. 4 北地区ピット一覧表 (2)

	ピット番号	平面形	掘形法量	柱痕法量	深さ
S B 11	P ₆₅	橢円形	37 × 22	14 × 12	11
	P ₆₆	橢円形	30 × 25	25 × 10	42
	P ₆₇	橢円形	25 × 16	16 × 12	17
	P ₆₈	円形	22 × 18	8 × 6	15
	P ₆₉	円形	14 × 12	——	26
S B 12	P ₇₀	橢円形	20 × 14	7 × 5	10
	P ₇₁	橢円形	35 × 28	13 × 10	19
	P ₇₂	橢円形	39 × 30	——	12
	P ₇₃	円形	20 × 19	14 × 14	8
	P ₇₄	橢円形	24 × 15	12 × 12	11
	P ₇₅	円形	20 × 17	16 × 15	5
	P ₇₆	円形	25 × 22	22 × 17	4
	P ₇₇	橢円形	24 × 24	14 × 12	20
	P ₇₈	橢円形	35 × 29	23 × 19	46
	P ₇₉	橢円形	40 × 30	26 × 24	16
S B 13	P ₈₀	円形	36 × 35	18 × 16	27
	P ₈₁	橢円形	49 × 40	——	68
	P ₈₂	橢円形	36 × 27	14 × 12	16
	P ₈₃	橢円形	32 × 28	——	11
	P ₈₄	橢円形	33 × 29	22 × 18	38
	P ₈₅	橢円形	42 × 28	18 × 17	37
	P ₈₆	円形	12 × 10	——	16
	P ₈₇	橢円形	22 × 12	16 × 10	23
	P ₈₈	橢円形	23 × 16	20 × 13	16
	P ₈₉	橢円形	25 × 22	17 × 17	18
	P ₉₀	橢円形	30 × 26	18 × 17	36
S B 14	P ₉₁	円形	18 × 18	15 × 14	26
	P ₉₂	円形	18 × 18	13 × 10	20
	P ₉₃	円形	25 × 24	13 × 10	21
	P ₉₄	橢円形	44 ? × 26	10 × 9	19
	P ₉₅	円形	26 × 25	10 × 9	17
	P ₉₆	橢円形	23 × 21	14 × 14	21
	P ₉₇	橢円形	30 × 29	14 × 8	21
	P ₉₈	橢円形	30 × 23	17 × 17	28
	P ₉₉	円形	32 × 29	17 × 9	19
	P ₁₀₀	橢円形	30 × 28	20 × 17	38
	P ₁₀₁	橢円形	33 × 32	17 × 13	24
	P ₁₀₂	円形	31 × 29	17 × 11	32

Tab. 5 北地区ピット一覧表 (3)

	ピット番号	平面形	掘形法量	柱痕法量	深さ
S B 15	P ₁₀₃	橢円形	37 × 27	12 × 12	23
	P ₁₀₄	円形	25 × 24	17 × 17	26
	P ₁₀₅	橢円形	32 × 26	24 × 19	12
	P ₁₀₆	橢円形	31 × 26	16 × 14	34
	P ₁₀₇	橢円形	30 × 20	13 × 12	9
	P ₁₀₈	円形	25 × 25	12 × 11	—
	P ₁₀₉	円形	27 × 27	14 × 12	—
	P ₁₁₀	橢円形	42 × 41	17 × 16	29
	P ₁₁₁	橢円形	32 × 21	22 × 20	44
	P ₁₁₂	橢円形	22 × 16	12 × 12	16
	P ₁₁₃	橢円形	27 × 20	16 × 14	20
	P ₁₁₄	円形	16 × 15	—	10
	P ₁₁₅	円形	28 × 26	16 × 12	12
	P ₁₁₆	橢円形	22 × 18	17 × 12	11
	P ₁₁₇	橢円形	21 × 21	17 × 14	15
	P ₁₁₈	橢円形	34 × 26	22 × 16	28
	P ₁₁₉	橢円形	40 × 32	22 × 18	40
	P ₁₂₀	円形	30 × 30	20 × 10	31
	P ₁₂₁	橢円形	30 × 21	—	—
	P ₁₂₂	橢円形	30 × 27	20 × 19	17
S B 1	P ₁₂₃	円形	24 × 33	18 × 18	20
	P ₁₂₄	橢円形	44 × 44 ?	26 × 20	55
	P ₁₂₅	円形	30 × 28	10 × 9	73
	P ₁₂₆	橢円形	25 × 21	—	49
	P ₁₂₇	円形	48 × 48	25 × 19	47
	P ₁₂₈	橢円形	(85 × 60)	(40 × 37)	55
	P ₁₂₉	橢円形	40 ? × 30	27 × 17	53
	P ₁₃₀	円形	32 × 32	—	42
	P ₁₃₁	橢円形	38 × 27	—	55
	P ₁₃₂	円形	20 × 20	—	27
	P ₁₃₃	橢円形	46 × 36	8 × 8	26
	P ₁₃₄	円形	28 × 27	—	46
	P ₁₃₅	橢円形	28 × 24	—	22
	P ₁₃₆	橢円形	29 × 25	13 × 13	27
	P ₁₃₇	橢円形	24 × 20	—	21
	P ₁₃₈	橢円形	38 × 21	11 × 10	21
	P ₁₃₉	橢円形	43 × 40	23 × 23	27
	P ₁₄₀	円形	22 × 20	—	30

Tab. 6 北地区ピット一覧表 (4)

	ピット番号	平面形	掘形法量	柱痕法量	深さ
S B 2	P ₁₄₁	楕円形	28 × 26	——	10
	P ₁₄₂	楕円形	52 × 48	30 × 28	28
	P ₁₄₃	楕円形	22 × 16	16 × 16	28
	P ₁₄₄	楕円形	38 × 29	19 × 15	44
	P ₁₄₅	隅丸方形	40 × 32	16 × 14	49
	P ₁₄₆	不整形	(60 × 60)	(36 × 31)	47
	P ₁₄₇	円形	18 × 16	6 × 5	5
	P ₁₄₈	円形	12 × 11	——	6
	P ₁₄₉	円形	22 × 21	10 × 10	4
	P ₁₅₀	円形	29 × 27	13 × 12	9
	P ₁₅₁	楕円形	12 × 10	6 × 4	7
	P ₁₅₂	円形	12 × 10	6 × 8	8
	P ₁₅₃	楕円形	20 × 20	6 × 6	11
	P ₁₅₄	楕円形	4 × 4	——	11
	P ₁₅₅	楕円形	8 × 4	——	6
	P ₁₅₆	楕円形	4 × 3	——	3
	P ₁₅₇	楕円形	24 × 20	——	16
	P ₁₅₈	楕円形	22 × 18	——	10

Tab. 7 北地区ピット一覧表 (5)

B. 土 壙 (SK10・SK12)

SB1、SB2周辺の土壙については、第Ⅲ章2-Aで述べたが、ここで他の主要な土壙の位置・平面形・規模などについて記しておきたい。

SK10

SB1の西約6mに位置する。平面形は、上面で長径2.35m、短径1.95m、底面で長径1.87m、短径1.52mの楕円形を呈し、深さは現状で0.5mである。

埋土土質は黒褐色粘質土を基調とし、埋土中に拳大から人頭大の砂岩質円礫（石皿、磨石各1点を含む）および片岩10点と、土器細片1点を検出した。この円礫は、土壙の上端に設置されていたものが崩れ落ちこんだ状態で出土している。検出された土器片1点は調査後不注意のため紛失したが、表採した土器片（PL15、69）と同質であり* SK10とSB1は同時期の遺構ではないと判断する。また、土壙内およびその付近には、土壙に伴う掘立柱あるいは打込柱の柱痕は検出されておらず、柱を用いた上屋構造はなかったと思われる。

SK12

SB2の西約6mに位置する。平面形は、上面で長径2.45m、短径1.95m、頸部で1.15mと0.7m、底面で同じく1.3mと0.9mの楕円形である。断面形はいわゆる袋状を呈しており、深

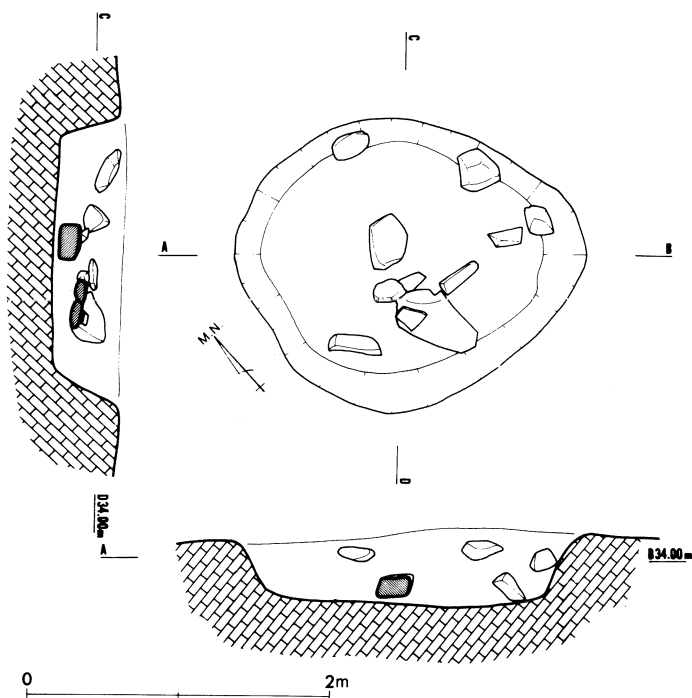


Fig. 31 S K 10実測図

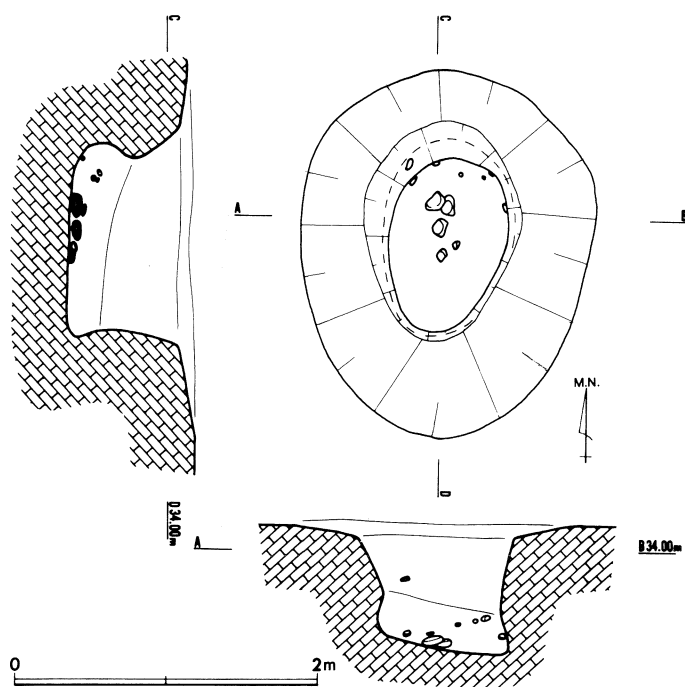


Fig. 32 S K 12実測図

さは現状で0.86mである。
埋土土質は黒褐色粘質土
を基調とする。

埋土中には拳大以下の
円礫が12点検出されてい
る。礫は1点頸部よりも
高い位置で検出されてい
ることから、原位置を保
ってはならず上部からの
流入と考えられる。

他の遺構との関連は、
S K 12の埋没時期が不明
のため把握し難いが、断
面形が袋状であることか
ら、住居跡に関連した貯
蔵穴である可能性がある。

※ このような格子目の叩
きを施す軟質の土器は、
中国地方においては、亀
山窯・勝間田窯産のもの
が知られている。ただ、
山陰地方では、米子市青
木遺跡にみられるように
少数の類例を見るにすぎ
ず、中世の所産であると
いう見解に止めるべきで
あろう。

井上勇「青木遺跡出土の
須恵器系甕について」

『青木遺跡発掘調査報告
書Ⅲ』 青木遺跡発掘調
査団 1978

土 壙 番 号	平 面 形	上部径(cm)	底部径(cm)	深さ(cm)	備 考
S K 1	橢 円 形	110×55	100×38	14	全面に受熱・赤化。
S K 2	橢 円 形	133×64	120×48	9	
S K 3	橢 円 形	104×99	30×18	76	中央にピットあり。
S K 4	橢 円 形	100×70	70×45	60	
S K 5	橢 円 形	90×60	60×35	20	
S K 6	橢 円 形	55×35	75×50	40	断面は袋状を呈する。
S K 7	橢 円 形	60×45	32×13	20	
S K 8	橢 円 形	90×55	74×37	30	
S K 9	橢 円 形 ?	90×80	72×65	10	
S K 10	橢 円 形	235×195	187×152	50	
S K 11	橢 円 形	140×90	104×58	85	
S K 12	橢 円 形	245×195	130×90	86	断面は袋状を呈する。

Tab. 8 土 壙 一 覧 表

C. 溝 (SD1)

溝 (SD1) は、N1トレンチ、S1トレンチ、排水溝南壁断面に検出した。

SD1はクロボクⅡ層より掘削されており、後述する排水溝南壁断面Ⅱ地点の観察によれば、その最下点レベルはローム層のさらに下層である淡褐色礫層にまで達している。幅は上面で約0.5m、底面で約0.2m、深さは約0.7mを測り、断面形は上方でやや外に開くU字形溝である。

SD1は、検出した各地点とも、同様の形状をもって、西南から延びる舌状微高地の主軸にほぼ直交して東南―西北方向に掘削されており、確認し得た総延長は約47mにおよぶ。また、N1トレンチとS1トレンチで約1mの高低差があり、西北に高く、東南に低い。

SD1の埋土は、下層がクロボクⅡ層土に鉄分の浸透したものであり、掘削当時、底面付近でわずかながら水流があったものと理解できる。中層は、クロボクⅡ層とSD1の肩部を構成するローム層との混合土で、クロボクⅡ層土の流入とともに肩部ローム層が徐々に崩れたものと理解すべきであり、ここでも急激な埋没状況は想定し難い。上層は、SB1～SB7などと同様、クロボクⅠ層がおおっている。

SD1の周囲にはN1・S1トレンチとも多数の柱穴や小土壙が検出されたが、調査範囲が限られ、かなりの削平も考えられるため、柱穴相互やSD1との関連は、不明である。

SD1の出土遺物は、N1トレンチでは複合口縁を有する甕形土器 (Fig.41、23・24・27・28)、器台形土器 (Fig.41、25)、高杯形土器 (Fig.41、26) などが、S1トレンチでは甕形土器 (Fig.42、29)、壺形土器 (Fig.42、30) などが出土している。N1トレンチの土器はSD1内の埋土上層にまとまって出土し、一括遺物として取り扱うことができよう。また、S1トレンチでは壺形土器1個体分の破片が、横転した状態で出土している (PL. 8、2)。

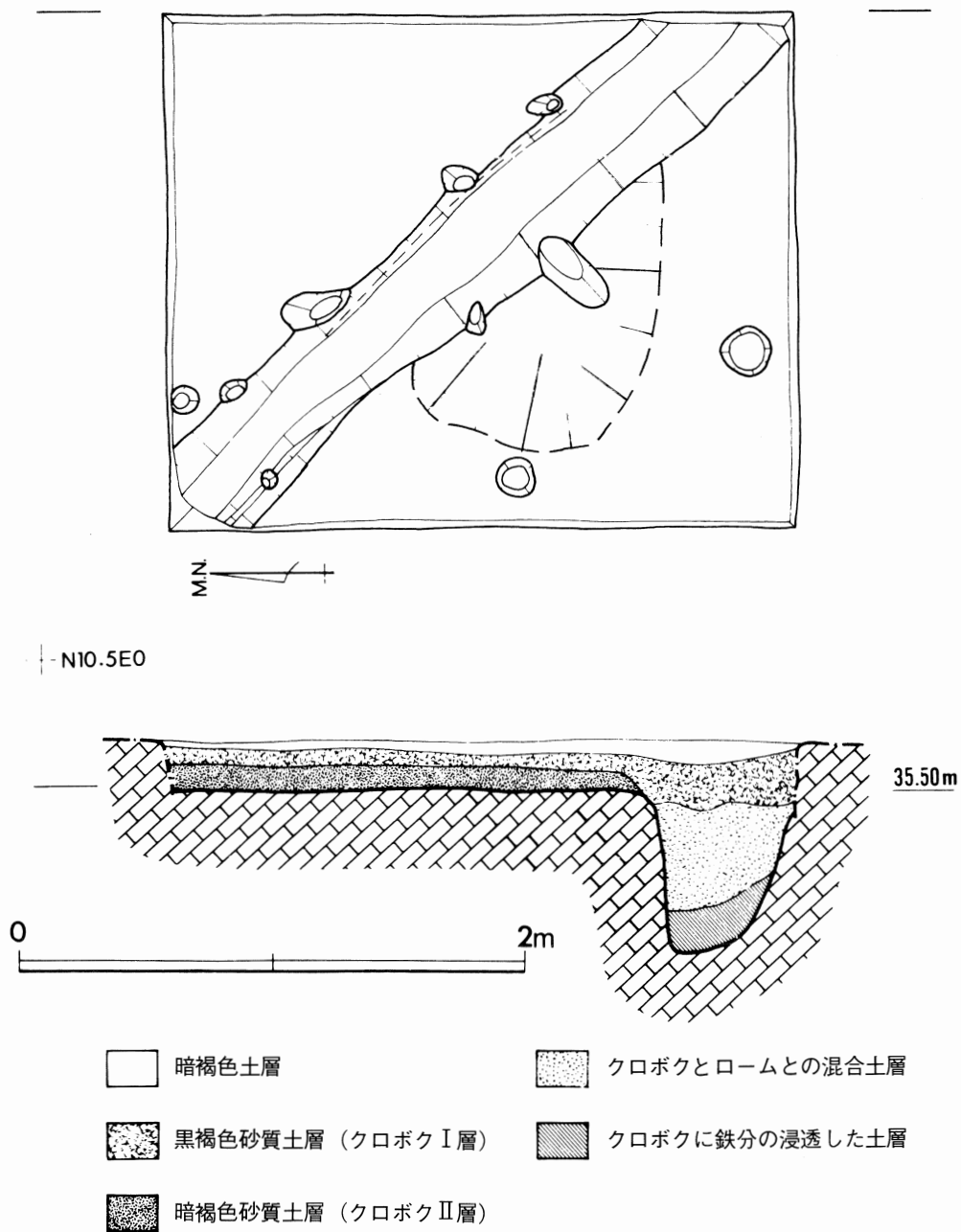


Fig. 33 SD1実測図（N1トレンチ）

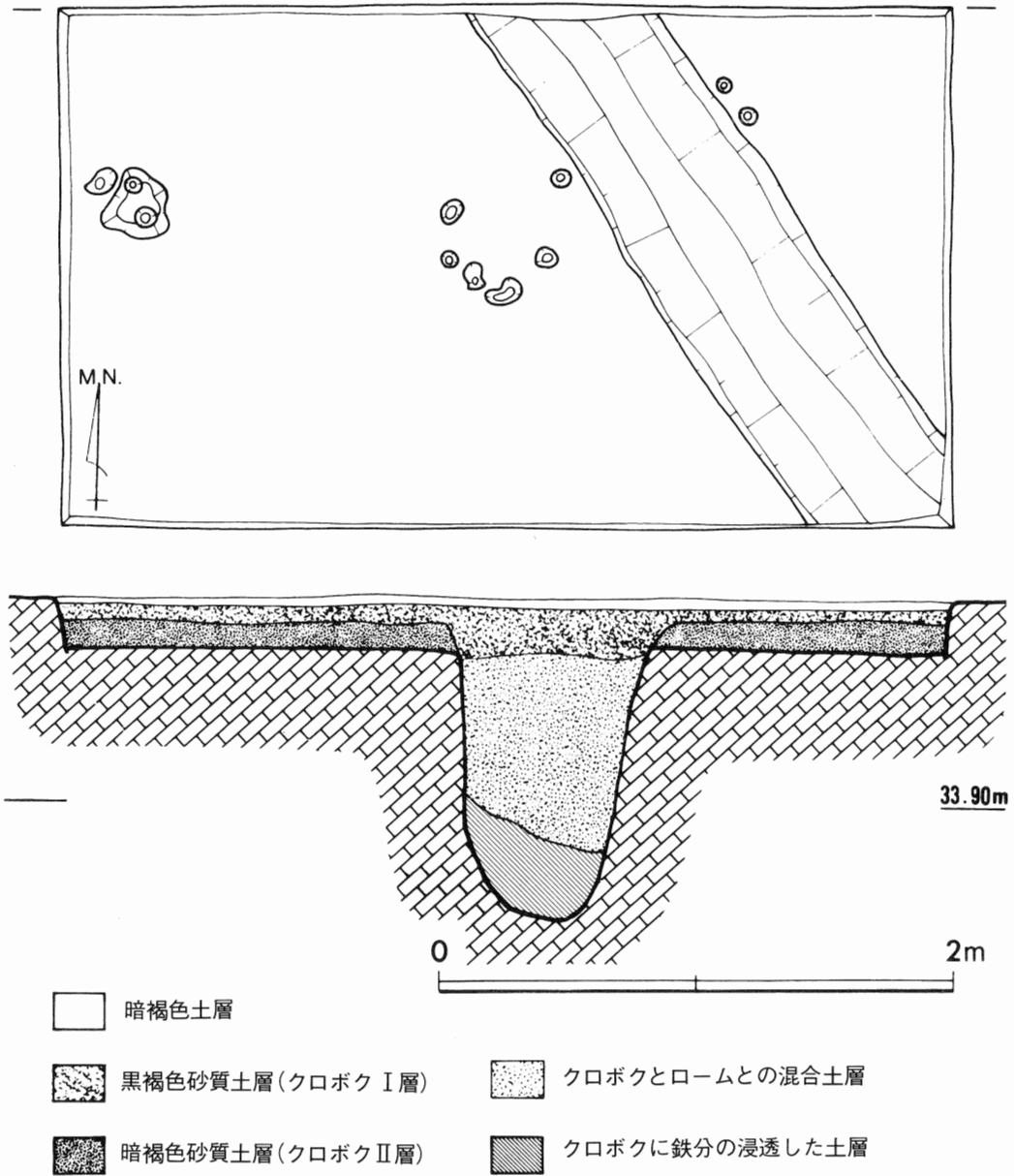


Fig. 34 SD 1 実測図 (S 1 トレンチ)

3. 遺跡南半部分の遺構

調査区を二分する排水溝以南を遺跡南半部分とし、遺跡範囲確認のため計 8 か所のトレンチを設定したが、事前にかなり削平を受けていることや調査費用、日数などとの関係で検出した

遺構の性格を必ずしも明らかにすることはできなかった。しかしながら、NOライン以南の4本のトレンチで各々若干数のピット、溝などの遺構が確認でき、遺跡範囲はさらに南方に拡大することが判明した。ここでは、明確な遺構を検出したS2トレンチに限定して、述べることにする。

S2トレンチ

遺跡範囲の確認を目的として設定した、南北4m、東西1.5mのトレンチで、中央付近で木棺直葬墓と推定できる土壌を検出した。

土壌は、クロボクI層より掘削され、おそらく楕円形平面を呈する掘形第1段の中央をさらに隅丸方形に掘り下げる、いわゆる2段掘りのもので、その最深部は、掘形第1段の肩部より約0.5mを測る。なお、掘形第1段は南側では検出できなかった。

掘形第2段の中央に、主軸をN-50°Eにとる、木棺様の施設を置くが、両側板は土圧により大きくゆがんでいる。また、その構造は極めて特異である。すなわち、東北側小口部に2本の杭痕と推定し得る先細りのピットを保有する点で、北側のピットは東北側小口板と西北側側板を、南側のピットは東南側側板を木棺内部より支持すると理解すべき箇所位置している。

南・北両ピットともにその尖った底部は、土壌基底である第13層（暗褐色砂質土層）の内部にまで達しており、ピットの形状よりこれを杭痕とすれば、この木棺様の施設には底板の存在しなかったことは明らかである。

なお、当トレンチにおいては、木材の痕跡は全て黄色細砂土として検出できるものと推定でき、先述の南・北両ピットの埋土をはじめ、稀薄に遺存した木棺の痕跡も同質・同色土である。掘形第2段の肩部以下15cm程度までには、この黄色細砂土の散在がみられ、何らかの施設が存在した可能性がある。

出土遺物は微量であるが、掘形第1段埋土である第5層（黒褐色砂質土層）中位より出土した鉄鏃・鉄鎌等の鉄器群が挙げられる。

60・61・62・65・66 (Fig.44) は、鏃身こそ検出し得なかったが、その法量・断面形より、長頸式鉄鏃の茎部分と判断した。60には上位に木質、下位に糸巻痕が、62にも木質が遺存する。また、60・61・62・66は、直径1cm前後の断面正円形を呈する筒状遺物中に入った状態で検出された。これについては、その内面の木目痕が縦方向に走ること、非常に薄いものであることから、鉄鏃装着時における桜皮類の良好な遺存例として理解でき、鉄鏃は出土当時の状況や相互の接合可能なものが存在しないことなどを勘案すると、少なくとも5個体以上が埋納されたい。ただし、周囲には攪乱の痕跡は認められず、欠失している理由は判明しない。

64 (Fig.44) は鉄鎌茎部分の残欠で、都出氏分類のC類1*に相当するものであろう。また、63 (Fig.44) は断面が扁平な長方形を示す中空の不明鉄製品残欠である。

以上、出土遺物は微量であるが、これらより導き出されるこの木棺直葬墓の造営年代は、古

墳時代後期、さらに限定すれば7世紀以降をあてることができよう。

※ 都出比呂志 「農具鉄器化の二つの画期」 『考古学研究』 第13巻第3号 1967

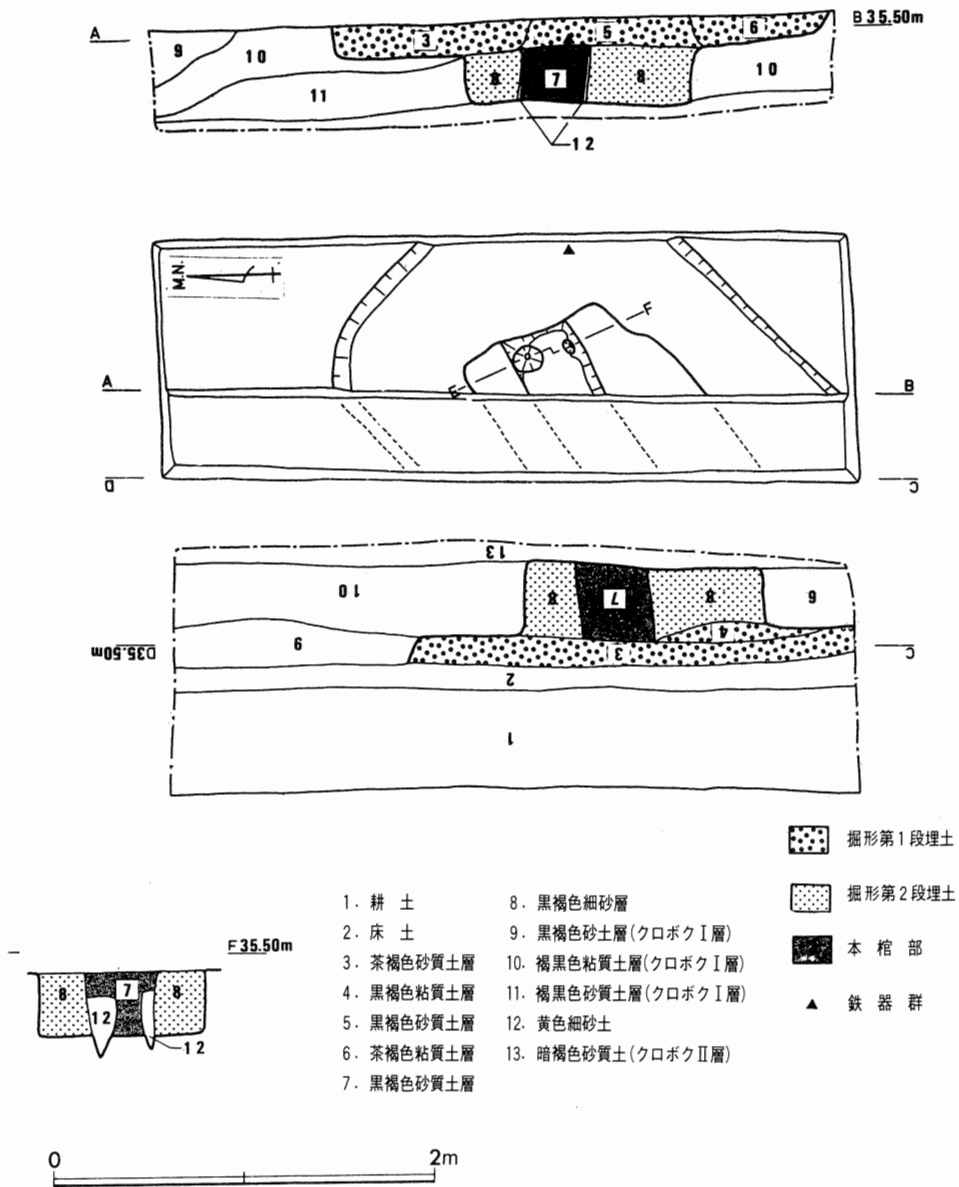


Fig. 35 木棺直葬墓実測図 (S2 トレンチ)

4. 排水溝

は場整備事業の一環として幹線排水溝を設けるため重機で掘削された溝であり、断面図は排水溝南壁を図化したもので、東西約83mにわたる。断面観察の結果、竪穴住居跡群や溝・土壇と推定される遺構を確認した。また、地表面は、東端で標高34.8m、西端で標高35.4mと西方に行くにしたがって、漸次高くなっている。

基本層序としては、地山としての黄褐色ローム層の上に、クロボクⅡ層（暗褐色砂質土）とやや粘質度の高いクロボクⅠ層（黒褐色砂質土）、黄褐色ロームとクロボクとの混合土である暗黒褐色砂質土、そして表土（耕土）が覆っている。地山のローム層は上位の粘質のもの（地山Ⅰ）と下位の砂質のもの（地山Ⅱ）に分けられるが、排水溝断面中央部分（W2より東に2m周辺）で急激に砂質度が增加する。また、ローム層の下部には、洪積層である礫層（地山Ⅲ）が堆積している。遺構は、ほとんどがクロボクⅡ層より掘り込まれたものであるが、すべて断面観察のみの調査しか行えなかったため、クロボクⅡ層内における遺構の掘形は不明なものが多く、規模・平面形などの詳細については不明である。

以下、遺構として特筆すべき部分について詳述しておきたい。

I 地点

E3ラインより7m西に存在する落ち込みは、溝状遺構か土壇かは不明であるが、上面で幅40cm、深さ80cmを測る。埋土は上層と下層とに分けられ、上層はクロボクⅠ層、下層はクロボクⅠ層よりやや粘質度の高い土であり、堆積状況より2つの遺構が重複しているか、もしくは2度の掘り込みを行っていると考えられる。後者のように考えると、下層の遺構は地山掘り抜きのもので地山Ⅱ層（黄褐色砂質土）の下位、洪積礫層近くまで達している。また、東側には、やや西側に傾いて掘られた幅10cm、深さ10cmのピットも存在している。

II 地点（溝）

E2より1.5m西に存在する落ち込みは、N1トレンチとS1トレンチで確認された溝（SD1）の中間点に位置し、これよりSD1の断面と推定できる。

断面図より見ると、上面で幅約1m、深さ約1mを測り、少なくとも2度の掘削が行われている。下層遺構の上面は不明であるが、埋土はやや粘質度の高いクロボクであり、底は礫層まで達している。下層遺構の埋土が黒褐色砂質土であるのに対し、上層遺構は黒褐色砂質礫混り土を埋土としており、両者は礫の混入の有無によって分層した。また、上層遺構の東側には杭状のものが打たれていたのか、鋭い落ち込みがみられる。

III 地点

E2より8.5m西に存在する落ち込みは、土壇か溝状遺構かは不明であるが、ローム層上面で幅1.2m、深さ30cmを測り、地山Ⅲの洪積礫層まで達している。埋土は2層に分かれ、上層

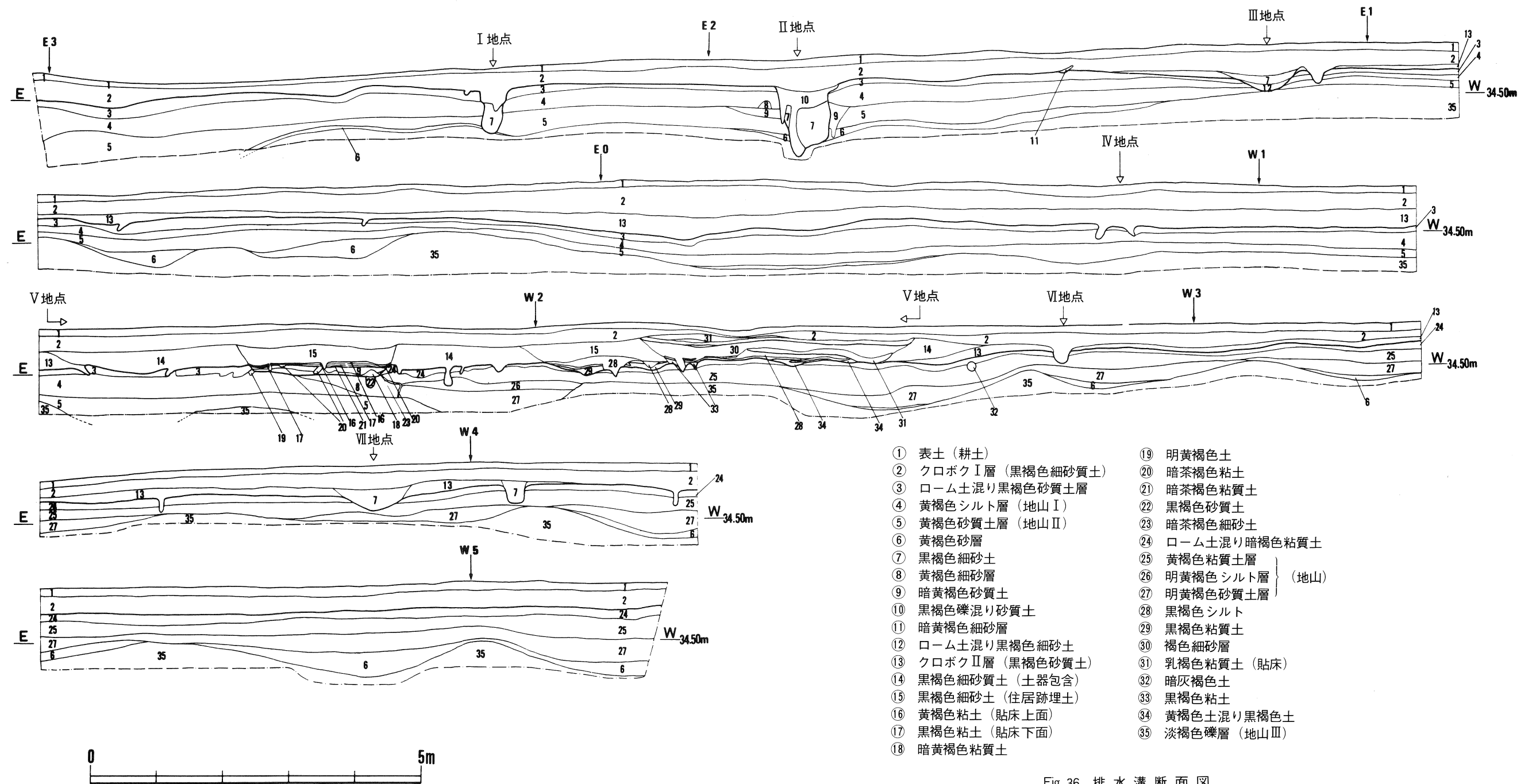


Fig. 36 排水溝断面図

(クロボクⅠ層)・下層(クロボクとロームとの混合土)である。また、この遺構の西側にはピットと思われる幅20cm、深さ30cmの落ち込みがみられる。

Ⅳ地点

Oラインより8m西に存在する約40cmの間隔で並んだ2つの落ち込みで、東側が西方向に傾き、西側が東方向に傾いた丁度向い合わせの状態で存在し、東側の方がやや深く、25cmの深さである。

Ⅴ地点(竪穴住居跡群・SB3～SB7)

排水溝断面のほぼ中央、W1より3m程度西より断面中に土器の含有率が増加し、さらにそこから西2.5mから竪穴住居跡群がはじまる。なお、この土器包含部分は基本土層序のクロボクⅠ層にあたり、同時期と思われる。

住居跡群は、断面より5基の住居跡が確認されたが、おおまかに分けて床面が地山面密着のもの(SB3・SB4・SB5)とクロボクⅡ層内に存在するもの(SB6・SB7)とに大別できる。竪穴住居跡の番号は、北地区の竪穴住居跡と通し番号で東側の古いと思われるものより順次付与した。

次に、各住居跡についてやや詳しくみていきたいと思う。

SB3 (PL. 9、1)

W1より西に5.5mの位置にあり、住居跡群の中でも1番遺存度の良いものである。クロボクⅡ層上面よりの掘り込みで、断面長2.4m、深さ0.3mを測り、貼り床の状態より2面の生活面が存在することが判明する。下面をSB3-a、上面をSB3-bとする。

SB3-aは貼り床の厚さ3cmを測り、床面は西側のレベルの方がやや高く、標高34.65mである。SB3-aに伴う柱穴は、断面では2ヶ所確認でき、西側ピットは斜め方向に掘り込んでいる。

SB3-bは貼り床の厚さ4cmを測り、SB3-aの直上にある。貼り床面の西端には周溝と思われる落ちも確認できるが、炉跡・柱穴など住居跡付属の施設は確認できず、平面形が明確なSB1、SB2が床面中央部に炉跡を設置していることより類推すると、この住居跡断面が中央部分の断面ではなく、中心線からずれた断面であると推定されよう。また、SB3-bに伴う柱穴は断面より2ヶ所確認でき、西側ピットは斜めに掘られたSB3-aのピットと重複している。

次に、SB3の構築順序としては、まず地山(ローム層)まで掘削後、床面のレベルを合わせるためクロボクを入れ、その上に貼り床を設けていると考えられる。

SB4 (PL. 9、2)

SB3の西側、ほぼ同じレベルに存在する。住居跡中央には、上面40cm、深さ20cmを測る2段掘りの炉跡と思われる落ち込みが認められ、この断面がほぼ住居跡の中央断面ということが

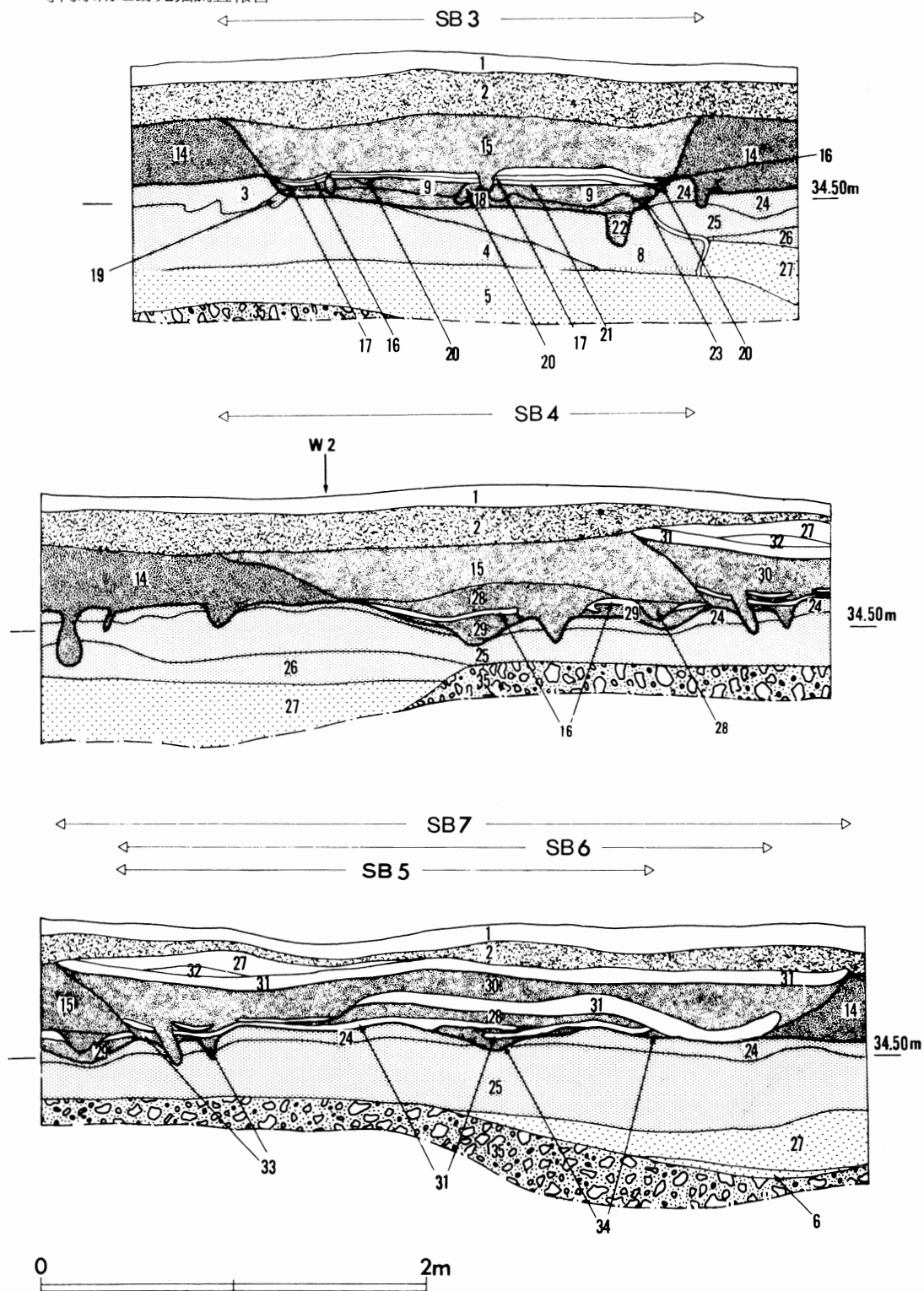


Fig. 37 排水溝V地点拡大図

わかる。しかし貼り床遺存部分は少なく、炉跡より東で約1 m、西ではSB 5と重複することによって、60cm余りの遺存を認めるのみである。この住居跡に伴うと思われるピットより類推し、住居跡断面長は少なくとも4 m以上であろう。

SB 5

W 2より約4 m西に存在し、床面には地山面に密着して厚さ約3 cmの貼り床を設けている。この住居跡は残存長約2.8 mを測り、床面高は標高34.70 mである。住居跡東側には斜め方向に掘り込まれた落ち込みがあり、西側には幅0.8 m、深さ0.15 mの浅い落ち込みも認められる。なおこの住居跡はSB 4より約5 cm上位にあること、SB 4西端との重複関係などより、SB 4より新しい時期と思われる。

SB 6

SB 5の上面に存在し、東側の貼り床の薄い部分と西側のややレベルの高い部分とに分けられる。これは、SB 5の拡張時に屋内高床部を設けた結果と推定される。

SB 6の東側は標高34.70 mで、貼り床は踏み固められたためか、3 cm前後と薄いのに対し、西側の高床部は標高34.80 mで貼り床部もやや軟質で土色も薄く、厚さも10 cm前後を測る。この住居跡の残存断面長は3.45 mを測り、高床部は2.2 mを測る。また、住居跡東端は不明であるが、西側拡張部（屋内高床部）端には周溝とも想定できる落ち込みが認められる。

SB 7

住居跡群では最も上位の標高約35.0 mに位置する。残存断面長は約4 mを測り、ほぼ住居跡の中央部断面と推定される。しかし、住居跡に伴う施設は、貼り床中央部の約0.9 mの範囲で土色の薄くなっている部分があり、ここに炉跡の可能性が認められるほかは不明である。

これらの竪穴住居跡はすべて断面のみの確認で、平面形や規模などの詳細は不明であるが、ここで観察の結果判明した2、3の事項について記しておきたい。

貼り床は、地山面密着のものはすべて堅く踏み締められており、断面を削るのもやや困難であるほど堅固であった。

次に、住居跡の構築法をSB 3、SB 4より類推すると、下記のような順序で行われたと推定されよう。

- ① 地山面まで掘り下げる。
- ② 床面高を揃えるためクロボクを入れる。
- ③ その上にローム土をのせ、丁寧に踏み締めて貼り床を設ける。この時、先に周溝を掘っておき、周溝に沿って貼り床を行なう方法と、貼り床を行なった後、周溝を掘削する方法の両者が考えられるが、ここでは前者で造成されたと推定される。
- ④ 貼り床を行なった後、柱穴や炉跡を掘削する。

また、5基の住居跡の構築時期であるが、SB 3とSB 4がほぼ同時期で、その次にSB 5、

S B 6、S B 7と連続して構築されたのであろう。

このように、排水溝の断面観察で5基の竪穴住居跡が確認されたが、これはこの地域に相当数の住居跡が重複関係を保持しながら存在していることの想定を妨げるものではないであろう。

なお、この住居跡群より東に15mの地点には先述したS D 1が存在するが、両者の関係は不明である。

Ⅵ地点

S B 7の西端より約2m、W 3ラインより2m東に位置する遺構で、クロボクⅡ層より掘り込まれている。上面で幅約30cm、深さ約30cmを測る。埋土は黒褐色砂質土（クロボクⅠ層）のみである。またこれより東側1mのところ、標高34.5mに位置する円形のブロックは、おそらく斜めに入り込んだピットの断面であると推定される。

Ⅶ地点

W 4より1.5m東に存在し、溝状遺構か土壌かは不明であるが、クロボクⅡ層より掘り込まれている。上面で幅約1.2m、深さ約35cmを測り、地山面のローム層まで達している。また、ここより約2m西、W 4ラインより5m西には柱穴と推定される落ち込みが認められる。これはクロボクⅡ層より掘り込まれ、幅約40cm、深さ約35cmを測る。

これらの遺構は、すべて断面のみの確認であり、平面形・規模など不明な点が多く、また、時期も遺物がほとんど採集されなかったため、不明である。しかし、断面のみでこれだけの竪穴住居跡、柱穴、溝等の遺構が確認されたということは、前述のように、この地域には遺構が多数存在することを十分想定させるものである。

5. 遺 物 (Fig. 38~44、PL. 11~18)

出土遺物のうち、実測可能なものは全て図化（合計65点）した。S 2トレンチで検出された鉄製品以外は、観察表で一括掲載した。観察表の記述にあたっては、下記凡例に従った。

土 器 観 察 表 凡 例

〔遺物番号〕 本文・実測図・写真を全て統一した。

〔器種〕 一般的な分類・名称を用いた。

〔出土地点〕 遺構・トレンチ等の名称を適宜用いた。

〔形態と調整〕 土器を3分（口縁部・体部・底部）した部位ごとに記述した。

〔胎土〕 肉眼による識別の可能な鉱物を記載した。鉱物の大きさ0.5mm程度を中粒としたうえでそれを著しく逸脱するものについてはその大きさを付記した。量の多少は1cm²当りの個数を記載した。

〔色調〕 土器は、その断面観察によれば表面と内部では相当異なる色調を呈することが多いので、外面・内面・断面として記載した。色調同定には標準土色帖*を使用し、その記号も併記した。

なお、遺物是一部を除いて出土地点・出土状況の不明なものが多く、それらは全て採集遺物

として扱った。

※小山正忠・竹原秀雄 『新版標準土色帖』 日本色研事業株式会社 1976

出土位置		遺物番号
S B 1	炉 跡	1・2・4・7・8・9・11
	S K 6	5・10
	埋 土	3・6
S B 8 }	S K 4	18
	P 78	13・14・15・16
	P 35	17
	表面採集	12・19・20・21・22
S D 1	N 1 トレンチ	23・24・25・26・27・28
	S 1 トレンチ	29・30
S	X 1	60・61・62・63・64・65・66・67・68
排水溝		31・37
表面採集		32・33・34・35・36・38・39・40・41・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・57・58・59・69

Tab. 9 遺構・遺物対照表

遺物番号 器 種 出土地点	形態と調整 ○口縁部 ○体 部 ○底 部 (脚部)	胎 土	色 調 ○外面 ○内面 ○断面	備 考
1 甔形土器 S B 1 炉跡	○内外面とも横ナデ。 ○左右対象に半環状把手を装着。その際外面には接合痕を消すため粗いハケメ。以下に縦方向ハケメ。内面は口縁下を横方向ヘラ削り、その下を縦方向ヘラ削り。接合部に粗いハケメ。 ○——	細かい長石 (少量)	○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○にぶい黄橙 (10YR7/2)	口径は回転復原。外面に黒斑。
2 甔形土器 S B 1 炉跡	○外折して直線的に立ちあがる。端部はやや肥厚。突帯は断面三角形でやや下方に延びる。内外面とも横ナデ。 ○—— ○——	石英、長石、雲母、赤色粒 (60粒程度)	○にぶい黄橙 (10YR7/4) ○にぶい黄橙 (10YR7/4) ○にぶい黄橙 (10YR7/4)	口径は回転復原。口縁部外面には煤付着。
3 甔形土器 S B 1 埋土	○直口。内湾気味に立ち上がり、端部は丸みを持つ。 ○内面ヘラ削り、外面横方向ハケメ (7条/cm)。 ○——	微細な長石、石英 (65粒)	○全面に煤が付着し観察不能。 ○にぶい黄橙 (10YR6/3) ○にぶい黄橙 (10YR6/3)	口縁部、体部とも器壁は厚い。口径は回転復原。
4 甔形土器 S B 1 炉跡	○突帯部までしか残存していないが、外面内面とも横ナデ。突帯は断面三角形で水平に突出。 ○外面横ナデ、内面ヘラ削りするも弱い。 ○——	大粒石英、微細な長石、石英 (30粒)	○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○黄灰 (2.5YR5/1)	肩部に黒斑。径は回転復原。

Tab. 10 遺物観察表 (1)

寺内京南遺跡発掘調査報告

遺物番号 器 種 出土地点	形態と調整 ○口縁部 ○体 部 ○底 部 (脚部)	胎 土	色 調 ○外面 ○内面 ○断面	備 考
5 高杯形土器 S K 6	○腕状杯部を有する。端部はあまい面をもつ。 ○外面は放射状のハケメ (7条/cm) を時計まわりに施した後、強い横ナデで整える。 内面は2段のへう磨き (暗文)。杯部底部外面には刺突痕。 ○――	微細な長石 (10粒)	○橙 (2.5YR6/6) ○橙 (2.5YR6/6) ○表層：にぶい橙 (5 YR 7/4) 深層：褐灰 (5 YR5/1)	焼成時、赤色に発色する素地。外面の黒斑周囲は発色していない。脚一杯接合はいわゆる挿入 (付加) 法。
6 高杯形土器 S B 1 埋土	○―― ○―― ○ラッパ状に開き、端部及び接地面には面を持つ。外面横ナデ、内面はらせん状ハケメ (12条/cm)。	長石、赤色粒 (60粒)	○赤橙 (10R6/6) ○淡赤橙 (2.5YR7/4) ○浅黄橙 (7.5YR8/4)	赤色に発色する素地を用いる。
7 低脚杯形土器 S B 1 炉跡	○端部は明瞭な面を持つ。外面は横ナデ内面は方向不定ハケメ (8条/cm) にナデ。 ○―― ○――	石英、大粒長石、赤色粒 (85粒)	○浅黄橙 (10YR8/3) ○浅黄橙 (10YR8/3) ○浅黄橙 (10YR8/3)	口径は回転復原。
8 低脚杯 S B 1 炉跡	○―― ○外面横ナデ、内面には指頭圧痕が残る。 ○内外面とも横ナデ。	多くの長石、石英、少量の雲母 (30粒)	○浅黄橙 (10YR7.5/4) ○浅黄橙 (10YR7.5/4) ○浅黄橙 (10YR8/4)	低脚杯に多く見られる底部外面の小孔がない。
9 高杯形土器 S K 6 炉跡	○外反し、端部にはあまい面をもつ。内面は縦方向へう磨き。外面は時計まわりに2段のハケメを施した後、横ナデ横方向へう磨きを行なっている。 ○口縁部との間には段を持たず、内面中央若干の盛り上りを見せる。内面は放射状へう磨き、外面は脚部との接合部に縦方向ハケメと横方向へう磨きを施している。 ○――	微細な長石 (40粒)	○にぶい黄橙 (10YR7/3) ○にぶい黄橙 (10YR6/3) ○にぶい黄橙 (10YR8/3)	杯部底部の形成は円盤充填による。杯部内面には広範に黒斑が見られる。口径は回転復原。
10 高杯形土器 S K 6	○―― ○不明瞭な稜をもって内湾しつつ立ち上がる。やや大型品。外面ハケメ (13条/cm) 後、脚一杯接合時に強い横ナデによって段を形成。内面は観察しにくいナデ。 ○――	大粒、長石、石英、赤色粒、雲母 (24粒)	○淡黄 (2.5Y8/2.5) ○淡黄 (2.5Y8/2.5) ○黄灰 (2.5Y6/1)	脚一杯接合面に多数の刺突痕。
11 甕形土器 S B 1 炉跡	○ほぼ一定の厚さをもって立ち上がる。開きは少ない。端部上面は若干凹面である。内外面とも横ナデにより、突帯部付近は特に強い。突帯は断面三角形を呈し、ほぼ水平に延びる。 ○肩の張りは弱い。外面は、頸部は縦方向、肩部は横方向、以下は方向不定のハケメで、頸部 (8条/cm) 以外は12条/cm、総じて雑。内面はへう削り。 ○――	大粒石英、微細な長石、雲母 (35粒)	○灰黄褐 (10YR6/2) ○灰黄褐 (10YR6/2) ○浅黄橙 (10YR6/2)	外面に煤付着。口径は回転復原。
12 硯 表面採集	外法：底面巾4.1cm～4.2cmを測り、墨道に向かってやや巾広である。高さは現状で1.1cm。肉厚は最も薄い箇所0.2cm。 内法：墨池の巾 2.9cm	材質：暗灰色、緻密な粘板岩質		使用のため磨り減っている。
13 土錘 P 78	手づくねによる。	細かい砂粒を含む	○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○暗灰 (N3/0) ○にぶい黄橙 (10YR7/2)	長さ4.7cm、最大径10cm、孔径0.3cm、外面に赤色スリップ。

Tab.11 遺物観察表 (2)

III 遺跡と遺物

遺物番号 器 種 出土地点	形態と調整 ○口縁部 ○体 部 ○底 部 (脚部)	胎 土	色 調 ○外面 ○内面 ○断面	備 考
14 土 錘 P 78	手づくねによる。	細かい砂粒を含む	○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○にぶい黄橙 (10YR7/2)	長さ 4.2 cm、最大径 0.9 cm、孔径 0.3 cm、外面に赤色スリップ。
15 土 錘 P 78	手づくねによる。	細かい砂粒を含む	○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○にぶい黄橙 (10YR7/2)	長さ 4.1 cm、太さ 0.9 cm、外面に赤色スリップ。
16 土 錘 P 78	手づくねによる。	細かい砂粒を含む	○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○にぶい黄橙 (10YR7/2)	長さ 6.1 cm、太さ 1.0 cm、外面に赤色スリップ。
17 土師質小皿 P 35	○内湾ぎみに立ち上がり、中位において肥厚する。内外面に列状の指頭圧痕後、横ナデ。 ○ ○口縁部に較べ器壁は厚い。内面は横ナデ。回転糸切り底。	石英、長石、雲母(30粒)、5mm大の赤色粒。	○浅黄橙 (7.5YR8/3) ○浅黄橙 (7.5YR8/3) ○浅黄橙 (7.5YR8/3)	底部内・外に焼成時のひび割れ。
18 甕形土器 S K 4	○複合口縁の退化形態で、段を境に内折する。端部にはあまい面をもつ。全体に厚手。内外面とも横ナデ。 ○外面は横ナデ、内面はへら削り。 ○	微細な石英、長石、黒色粒 (33粒)	○灰黄 (2.5Y7/2) ○灰黄 (2.5Y7/2) ○灰黄 (2.5Y7/2)	胴部内面は変色し暗い色調を呈する。口縁外面に黒斑。口径は回転復原。
19 高杯形土器 表面採集	○端部付近で外折し、内湾ぎみに終わる。内面はハケメ (6条/cm)、外面は横ナデ。 ○ ○	黒色粒、石英、長石 (66粒)	○にぶい橙 (7.5YR7/4) ○にぶい橙 (7.5YR7/4) ○浅黄橙 (10YR8/3) ~ にぶい黄褐 (10YR7/2)	表面に赤色顔料 (ベンガラ) を塗布、小片のため径不明。
20 甕形土器 表面採集	○外反する複合口縁。外面櫛描直線文 (6条/cm)、内面横ナデ。 ○ ○	大粒石英、長石(30粒)	○にぶい黄橙 (10YR7/3) ○橙 (25YR6/6) ○にぶい黄橙 (10YR7/2)	外面に煤付着。
21 甕形土器 表面採集	○突帯は小さく断面三角形を呈し、やや上方に突出する。内外面とも横ナデ。 ○外面横ナデ、内面へら削り。 ○	長石、赤色粒 (30粒)	○浅黄橙 (7.5YR8/4) ○浅黄橙 (7.5YR8/4) ○浅黄橙 (7.5YR8/3)	表面の風化・剝離著しい。
22 甕形土器 表面採集	○突帯はなく、段を有し、大きく外反する。全体に器壁は薄く頸部は長い。内外面とも強い横ナデ。 ○ ○	石英、長石、赤色粒(少) (50粒)	○浅黄橙 (7.5YR8/3) ○にぶい橙 (7.5YR7/4) ○にぶい黄橙 (10YR7/3)	一群の甕形土器に較べやや古い形態である。
23 甕形土器 S D 1 N 1 トレン チ	○口径の比較的大きな複合口縁。内外面とも横ナデによる。突帯は断面三角形で水平に延びる最も発達した形態。突帯付近の横ナデは強い。 ○なで肩の倒卵形。外面は、頸部に短い縦方向、肩部横方向、最大腹径部以下縦方向ハケメ (8条/cm)。肩部には櫛描直線文 (7条)、同波状文 (6条) を施す。内面はへら削り。最後に施された最大腹径部外面の縦方向ハケメに対応して内面には一列に指頭圧痕がみられる。 ○小さな底部を有する。外面、方向不定のハケメ (8条/cm)。内面は底部の最も深い部分まではへら削りが及ばず、指頭圧痕を残すのみ。	石英、長石、雲母、黒色粒 (30粒)	○にぶい黄橙 (10YR7/4) ○にぶい黄橙 (10YR6/4) ○にぶい黄橙 (10YR7/4)	外面下半に全面煤付着、口縁部外面の一部に黒斑。

Tab.12 遺物観察表 (3)

寺内京南遺跡発掘調査報告

遺物番号 器 種 出土地点	形態と調整 ○口縁部 ○体 部 ○底 部 (脚部)	胎 土	色 調 ○外面 ○内面 ○断面	備 考
24 甕形土器 SD1 N1トレン チ	○外反し、端部には水平な面を持つ。突帯は断面三角形で水平。内外面とも横ナデ。 ○なで肩の倒卵型である。頸部外面縦方向ハケメ (6条/cm)、肩部横方向ハケメ (6条/cm)、以下は縦方向の長いハケメ (6条/cm)。肩部には櫛描直線文6条～8条、波状文6条～7条 (いずれも5条/cm) を施す。内面は入念なへう削り。最大腹径部以下には広範に指頭圧痕が見られる。 ○小さな平底を残す。底面外面には方向不定ハケメ。内面は指頭圧痕を残す。	石英、長石、雲母 (30粒)	○浅黄橙 (10YR8/3.5) ○浅黄橙 (10YR8/3.5) ○浅黄橙 (10YR8/3.5)	口縁部外面の一部に黒斑。
25 鼓形器台 SD1 N1トレン チ	○下部は内湾、上部は外反気味に立ち上がる。端部は折り返しに近い。上部内面は横方向へう磨き。以外は内外面とも横ナデ。 ○上部突帯は小さな面をもって断面三角形で下方に突出。下部突帯は断面三角形で段状をなす。屈曲部内面は小さな面を持つ。 ○やや外反して開く。端部は広い面を持つ。外面及び内面端部付近は横ナデ、くびれ部以下内面はへう削り。端部付近の横ナデは内外面とも強い。	微細な長石 (60粒) 極めて精良な素地	○にぶい黄橙 (10YR7/4) ○にぶい黄橙 (10YR6.5/3) ○淡黄 (2.5Y8/3)	
26 高杯形土器 SD1 N1トレン チ	○端部は内側に稜を持ち外側は丸くおさめる。内外面とも横ナデ。 ○口縁部との間に小さな段を有する。内外面とも横ナデ。 ○ラップ状に広がる。端部には面を持つ。外面はラセン状ハケメ (10条/cm)、内面は柱状部を時計まわりへう削り後、下部を横ナデ。裾部を横方向ハケメ (8条/cm)。	微細～1mm 大の長石 (66粒)	○部分によりばらつきがある。 ○浅黄橙7.5YR8/3 ～橙5YR6/6	杯部底部外面に棒状工具による刺突痕。
27 甕形土器 SD1 N1トレン チ	○外反し端部にはあまい面を持つ。内外面とも横ナデ。突帯は断面三角形で水平。 ○やや胴の張った倒卵形。外面は頸部縦方向ハケメ、肩部横方向ハケメ、以下は縦方向ハケメ (6条/cm)、肩部には10条の櫛描文、6条の波状文を施す。内面はへう削り、広範に指頭圧痕がみられる。 ○外面ハケメ、内面指頭圧痕を残す。	長石、石英、赤色粒、微細な雲母 (30粒)	○にぶい黄褐 (10YR7/3) ○にぶい黄 (2.5Y6/3) ○灰黄褐 (10YR5.5/2)	口縁部一部の内外面に黒斑。底部を除く肩部以下に厚く煤が付着。口径は回転復原。
28 甕形土器 SD1 N1トレン チ	○外反し、端部には外傾する面を持つ。内外面とも横ナデ。突帯は端部に丸みを持つ断面三角形のもの。 ○肩の張った倒卵形であろう。肩部外面には横方向ハケメ (10条/cm)、縦方向ハケメ (10条/cm)、一気に櫛描直線文と波状文を施す (5～9条)。内面はへう削り後、横方向ハケメ (8条/cm)。 ○――	大粒石英、微細な長石 (50粒)	○にぶい黄橙 (10YR7/3) ○浅黄橙 (10YR8/3) ○浅黄橙 (10YR8/3)	口縁部一部内外面に黒斑。
29 甕形土器 SD1 付近 S1トレン チ	○内湾する単純口縁。突帯は退化し、凹線一条が口縁中位を横走する。端部は内傾する面を持つ。内外面とも強い横ナデ。 ○肩が張らない球形体部。外面は不定方向ハケメ (7条/cm)。内面はへう削り。なお、外面には体部成形時の指頭圧痕が残されている。 ○――	微細～3・4mm大の長石、石英、雲母 (30粒)	○にぶい橙 (5YR6.5/3) ○にぶい橙 (7.5YR7/4) ○にぶい橙 (10YR7/4)	外面全体に煤が付着している。

Tab.13 遺物観察表 (4)

Ⅲ 遺跡と遺物

遺物番号 器 種 出土地点	形態と調整 ○口縁部 ○体 部 ○底 部（脚部）	胎 土	色 調 ○外面 ○内面 ○断面	備 考
30 壺形土器 S D 1 S 1 トレン チ	○外傾し直線的に立ち上がる複合口縁。頸部 は短い。突帯は断面長方形で下方に突出 する。内外面とも強い横ナデ。二次口縁部 中位に一系列の円形竹管文を配している。 ○やや肩の張ったいわゆる倒卵形をなす。外 面は頸頭縦方向、肩部横方向、体部不定方 向のハケメ（7～9条/cm）。内面はへう削 り、広範に指頭圧痕が見られる。 ○小さな平底を残す。外面ハケメ、内面へう 削り、指頭圧痕。	微細な長石、 1mm大の石 英（11粒）	○にぶい黄橙（10YR7/3） ○浅黄橙（10YR8/3） ○浅黄橙（10YR8/3）	口縁部外面の竹 管文はほぼ3.5 cm間隔、頸部 には、(1)竹管文を ほぼ3.2cm間隔 で18個、(2)1よ りやや小ぶりの 変形竹管文を 2.5cm間隔で7 個施している。
31 甕形土器 排水溝 表面採集	○短い頸部から肉厚断面三角形の突帯が水平 に突出し、直線的に立ち上がる口縁を持つ。 端部は外傾する面を持つ。内外面とも横ナ デ。 ○球形体部。外面は上半横方向、下半縦方向 のハケメ（6条/cm）。肩部に4箇所ハケ 原体による刺突痕がある。内面はへう削り。 指頭圧痕が最大腹径部内面に認められる。 ○	雲母、赤色 粒、黒色粒 （60粒）	○灰白（7.5YR8/2.5）～に ぶい赤橙（10R7/4） ○浅黄橙（10YR8/3） ○浅黄橙（10YR8/3）	他の複合口縁甕 形土器に比べ口 径が小さい。
32 甕形土器 表面採集	○頸部は短く「く」の字形に屈曲する。断面 三角形の突帯は水平に突出する。 ○ ○	長石（多）、 石英、赤色 粒（少）（65 粒）	○明褐灰（7.5YR7/2） ○明褐灰（7.5YR7/2） ○灰（N4/0）	突帯下に煤付着。 口径は口転復原 による。
33 甕形土器 表面採集	○下部のふくらむ断面三角形の突帯。内外面 とも強い横ナデ。肩部内面へう削り。 ○ ○	赤色粒、長 石、石英 （65粒）	○浅黄橙（10YR8/2） ○浅黄橙（10YR8/2） ○浅黄橙（10YR8/2）	口径は回転復原 による。
34 甕形土器 表面採集	○外反する口縁には強い横ナデによる凹凸が 目立つ。突帯は下部のふくらむ断面三角形。 ○ ○	微細な長石、 石英（35粒）	○にぶい黄橙（10YR7/3） ○にぶい黄橙（10YR7/3） ○にぶい黄橙（10YR7/3）	口径は回転復原。
35 甕形土器 表面採集	○端部は角ばっている。突帯は断面三角形。 ○ ○	長石、石英 （53粒）	○灰白（10YR8/2） ○淡黄（25Y8/3） ○浅黄橙（10YR8/3）	外面には煤付着。
36 甕形土器 表面採集	○突帯は下部のふくれる断面三角形。内外面 とも横ナデ。 ○ ○	1～2mmの 石英、微細 な長石（27 粒）	○にぶい黄橙（10YR7/3） ○にぶい黄橙（10YR7/3） ○にぶい黄橙（10YR7/3）	口径は回転復原。
37 甕形土器 排水溝 表面採集	○最大腹径を凌駕する口縁部。突帯は断面三 角形で小さい。端部にはあまい面を持つ。 内外面とも横ナデによるが、突帯付近の横 ナデは強い。 ○扁平な体部。外面は底部から放射状に施さ れたハケメ（9条/cm）。内面のへう削りに よって器壁は薄い。下半には指頭圧痕が残 る。 ○	雲母、長石、 赤色粒、黒 色粒（微細） （70粒）	○にぶい黄橙（10YR7/3） ○にぶい黄橙（10YR7/3） ○灰白（10YR7/1）	体部下半部は内 外面とも暗い色 調に変化してい る。
38 器台形土器 表面採集	○ ○ ○突帯は端部が下垂している。外面横ナデ、 内面はへう削りだが方向不定。	微細な長石、 石英（33粒）	○にぶい黄橙（10YR8/3） ○にぶい黄橙（10YR8/3） ○にぶい黄橙（10YR8/3）	

Tab. 14 遺 物 観 察 表 (5)

寺内京南遺跡発掘調査報告

遺物番号 器 種 出土地点	形態と調整 ○口縁部 ○体 部 ○底 部 (脚部)	胎 土	色 調 ○外面 ○内面 ○断面	備 考
39 壺形土器 表面採集	○強く外反する頸部。突帯は下部のふくれる断面三角形を呈する。内面は指頭調整後、横ナデ。外面は横ナデ。 ○ ○	石英、雲母、黒色粒、赤色粒(60粒)	○灰白 (10YR8/1) ○灰白 (10YR8/1) ○灰白 (10YR7/1)	口縁は直立すると思われる。
40 甕形土器 表面採集	○端部は外反し丸くおさめる。突帯は断面長方形。 ○ ○	1～2mmの石英、長石(35粒)	○にぶい黄橙 (10YR7/4) ○にぶい黄橙 (10YR7/4) ○にぶい黄橙 (10YR7/4)	口径は回転復原による。
41 甕形土器 表面採集	○「く」の字形に外折し、内湾しながら立ち上がる。突帯退化の段は口縁中位にあり、浅い。端部はあまい面を持つ。内外面とも横ナデ。○肩の張る球形体部。 ○	2mm 石英(多)、長石、赤色粒(25粒)	○灰黄褐 (10YR6/2) ○灰黄褐 (10YR6/2) ○にぶい黄橙 (10YR7/2)	全体に厚手である。口径は回転復原による。
42 壺形土器 表面採集	○断面三角形に垂下した端部外面には二条の凹線文。 ○ ○	1～1.5mmの石英及び長石(25粒)	○にぶい褐 (7.5YR6/3) ○にぶい褐 (7.5YR6/3) ○橙 (7.5YR6/6)	小片のため口径は不明。
43 壺形土器 表面採集	○ ○ ○へう等による上げ底、内面は指頭圧痕を残す。内外面とも不定方向横ナデ。	1～3mm石英、微細な長石(28粒)	○橙 (2.5YR7/6) ～黒 ○にぶい黄褐 (10YR7/3) ○	外面は二次的な火災を受けている。
44 表面採集	○ ○ ○底面は広い。厚手	1～2mmの長石、石英、微細な長石(60粒)	○橙 (2.5YR6/6) ○にぶい黄橙 (10YR6/3) ○灰黄褐 (10YR4/2)	外面は二次的な火災を受けている。
45 高杯形土器 表面採集	○外反する。端部は外側に小さな面を持つ。外面はハケメ及び横ナデ。内面はへう磨き。 ○ ○	微細な長石(20粒)	○にぶい黄橙 (10YR7/3) ○にぶい黄橙 (10YR6/2) ○灰黄褐 (10YR7/2)	
46 高杯形土器 表面採集	○ ○碗状を呈する。外面ハケメ(8条/cm)内面は暗文効果のあるへう磨き。 ○杯部との接合部に棒状工具による刺突痕がある。	微細な長石、赤色粒、1mmの灰色粒(30粒)	○にぶい橙 (5YR7/4) ○にぶい橙 (5YR7/4) ○灰白 (10YR8/2)	表面には赤色顔料(ベンガラ)を塗布。
47 高杯形土器 表面採集	○ ○底部には小孔が貫通している。内外面とも縦方向ハケメ。 ○	赤色粒(53粒)	○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○淡黄 (2.5YR8/3) ○淡黄 (2.5YR8/3)	
48 高杯形土器 表面採集	○ ○ ○強く外方に開く。外面はラセン状、内面は柱状部にはラセン状、裾部にはクモの巣状のハケメ(8条/cm)後、柱状部内面はへう削り。	赤色粒、石英、2mmの長石(43粒)	○にぶい橙 (7.5YR7/3) ○灰白 (10YR8/2) ○灰白 (10YR8/2)	裾径は回転復原による。
49 高杯形土器 表面採集	○ ○ ○強く外方に開き、端部には面を持つ。外面柱状部は板状原体による縦方向ナデ後、横ナデ。裾部は横ナデ。杯一脚接合部はハケメ後、横ナデ。内面上半はシボリ目を横ナデで消す。下半はクモの巣状ハケメ(6条/cm)。各所に指頭圧痕を残す。	長石(35粒)	○にぶい黄橙 (10YR7/3) ○にぶい黄橙 (10YR7/3) ○にぶい橙 (7.5YR7/3)	内面には柱状部にへうによる列点か2段、裾部にへうによる切り込みがある。内・外面に赤色顔料(ベンガラ)塗布。

Tab. 15 遺物観察表(6)

III 遺跡と遺物

遺物番号 器 種 出土地点	形態と調整 ○口縁部 ○体 部 ○底 部 (脚部)	胎 土	色 調 ○外面 ○内面 ○断面	備 考
50 高杯形土器 表面採集	○ ○ ○外面は板状原体による縦方向ナデ及び杯一脚接合部のハケメ (6条/cm) 後、横ナデ。	長石、石英 (27粒)	○赤橙 (10R6/6) ○赤橙 (10R6/6) ○灰白 (7.5YR8/2) ~ 褐灰 (10YR5/1)	外面全体及び内面下半一部に赤色顔料 (ベンガラ) 塗布。
51 壺形土器 表面採集	○直口。端部は横ナデのため内側に肥厚。内外面とも横ナデ。 ○ ○	1mm石英 (4粒)、赤色粒 (10粒)	○橙 (2.5YR8/3) ○橙 (2.5YR8/3) ○浅黄橙 (7.5YR8/3)	内・外面に赤色顔料 (ベンガラ) を塗布。
52 壺形土器 表面採集	○ ○やや扁平な球形体部。外面不定方向ハケメ (5条/cm) 後、横ナデ。内面下半へう削り。肩部内面に指頭圧痕を多く残す。 ○	微細な長石、チャート、赤色粒 (70粒)	○橙 (2.5YR7/6) ○浅黄橙 (7.5YR8/3) ○浅黄橙 (7.5YR8/3)	外面及び、内面上部に赤色顔料 (ベンガラ) を塗布。回転復原により図化。
53 土鍋 表面採集	○外反し、端部に面を持つ。外面は千鳥状縦方向ハケメ (5条/cm)。内面は横方向ハケメ (5条/cm)。 ○ ○	1~2mmの長石、石英、赤色粒 (20粒)	○ (煤付着で不明) ○にぶい黄橙 (10YR6/4) ○にぶい黄橙 (10YR6/4)	外面には煤が厚く付着。
54 土鍋 表面採集	○外折し、内湾する。端部はつまみ上げ状、外面は横ナデ、内面横方向ハケメ (6条1cm)。 ○外面ハケメ (9条/cm)、内面ハケメ (6条/cm)。 ○	微細な長石 (30粒)	○煤付着 ○浅黄橙 (10YR8/3) ○浅黄橙 (10YR8/3)	外面は煤が厚く付着、内面は暗い色調に変色。
55 土鍋 表面採集	○外折する。端部には凹線が一条。外面は横ナデ、内面は横方向ハケメ (5条/cm)。 ○ ○	微細~2mm長石、石英、雲母 (100粒)	○煤付着 ○にぶい黄橙 (10YR7/2) ○灰 (N5/0)	外面には煤が厚く付着。
56 瓦質鍋 表面採集	○「く」の字形に外折し、内湾。内外面とも横ナデ、屈曲部外面に指頭圧痕が残る。 ○ ○	1mm石英、微細な長石 (33粒)	○にぶい黄橙 (10YR6/3) ○灰黄 (2.5Y6/2) ○灰白 (2.5Y9/1)	外面に煤付着。
57 小皿 表面採集	○ ○ ○平底で、外上方にやや内湾しつつたあがる。内外面とも横ナデ。底面には、糸切痕がみられる。	細かい長石 (少量)	○浅黄橙 (10YR8/3) ○浅黄橙 (10YR8/3) ○浅黄橙 (10YR8/3)	径は回転復原。土師質。
58 甕形土器 表面採集	○外側に低い突帯、内面に沈線。端部は内側に稜を持ち、外側に丸くおさめる。内外面とも回転ナデ。 ○ ○ ○	長石、石英、黒色粒、赤色粒 (85粒)	○青灰色 (10BC6/1) ○青灰色 (10BC6/1) ○青灰色 (10BC6/1)	やや軟質の須恵質。

Tab.16 遺物観察表 (7)

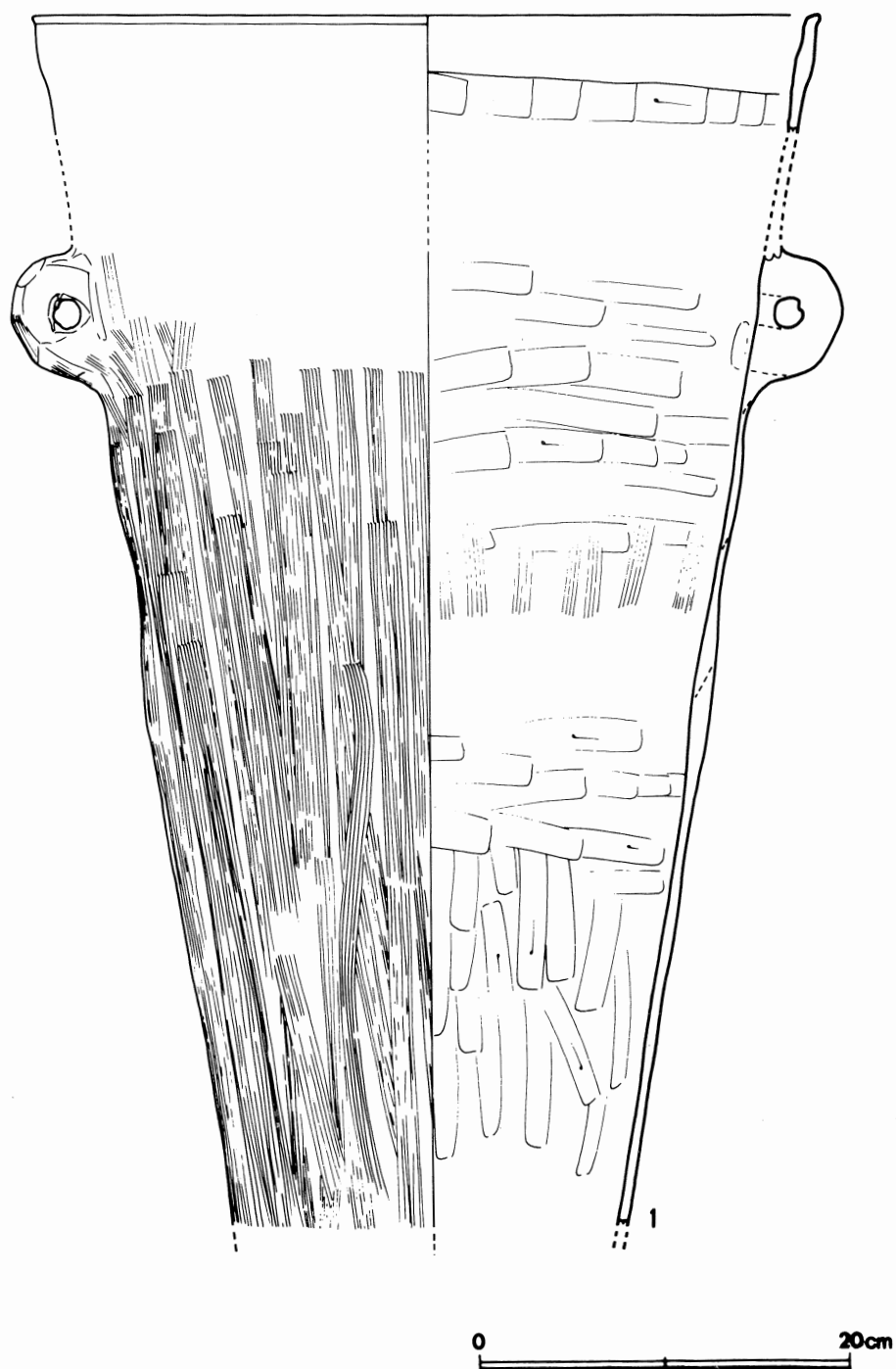


Fig. 38 遺物実測図(1)

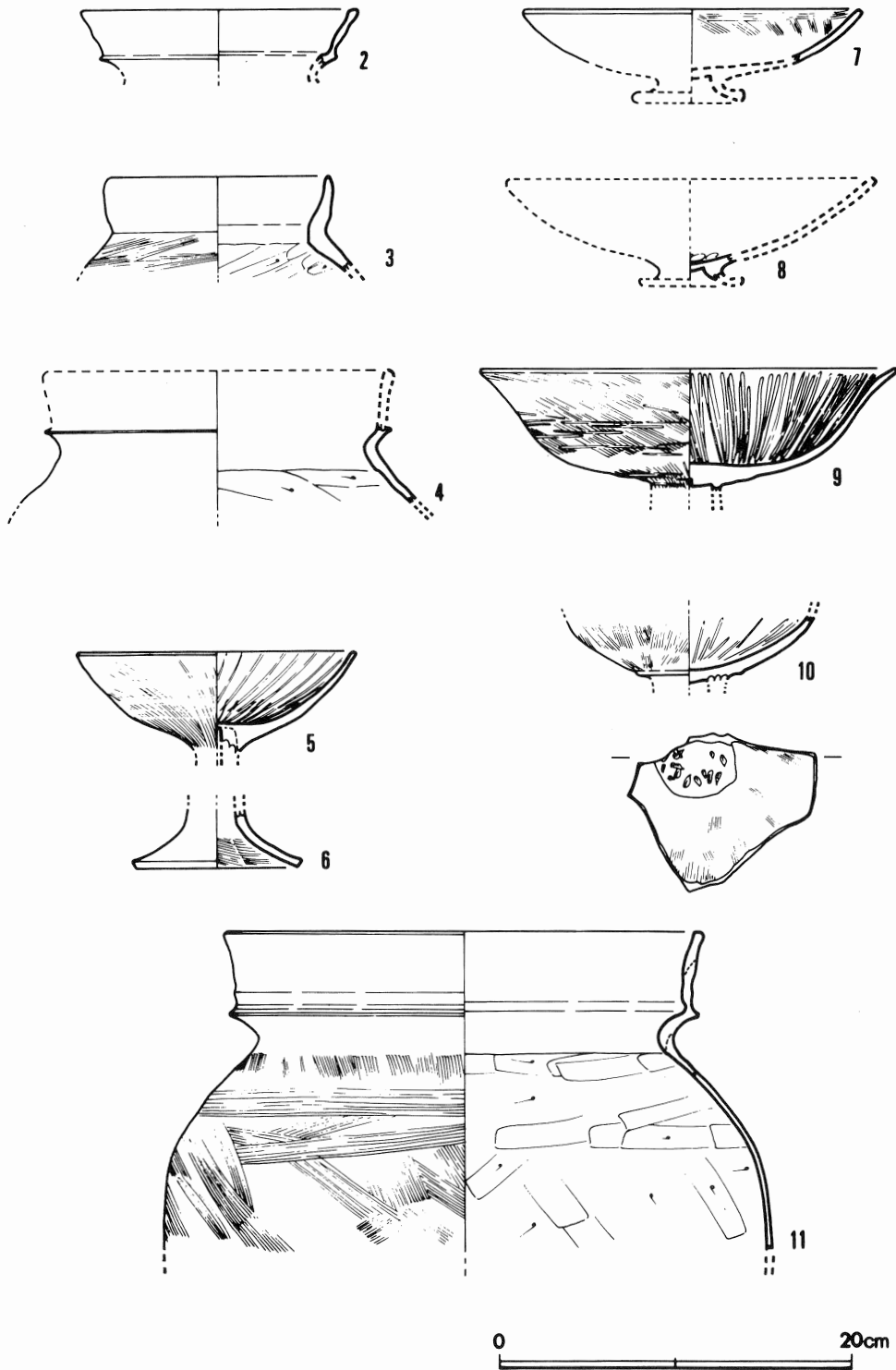


Fig. 39 遺物実測図(2)

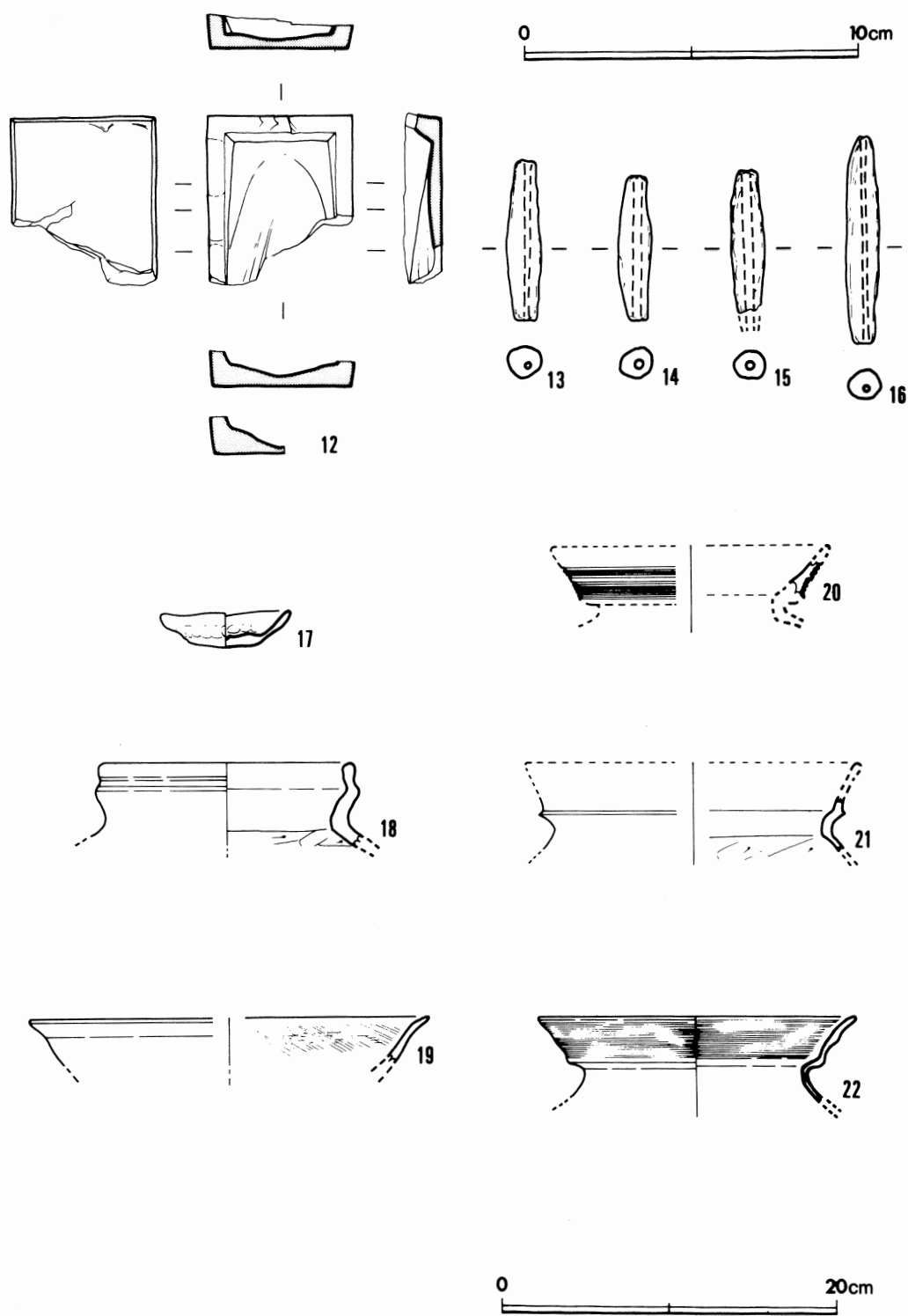


Fig. 40 遺物実測図(3)

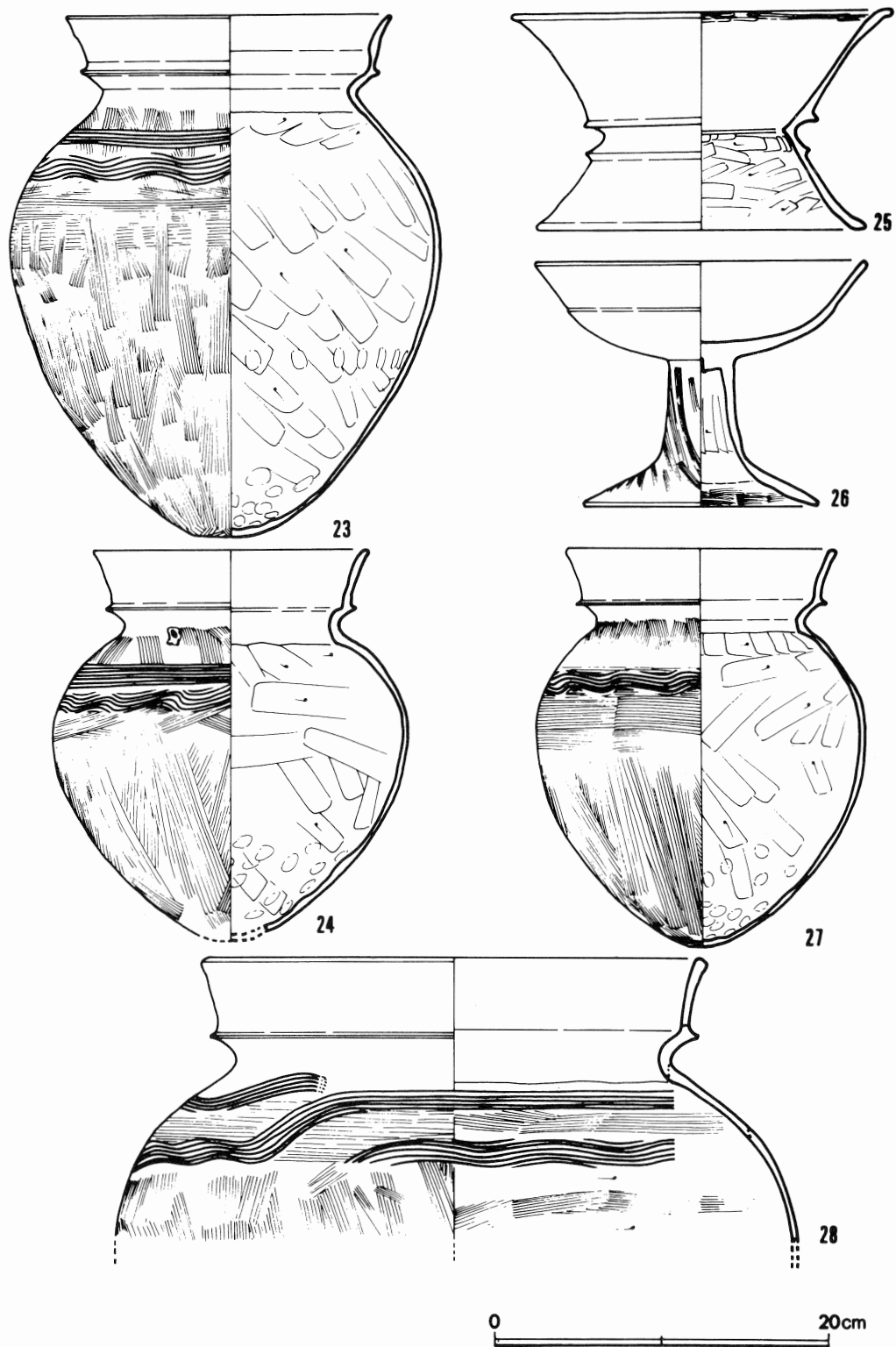
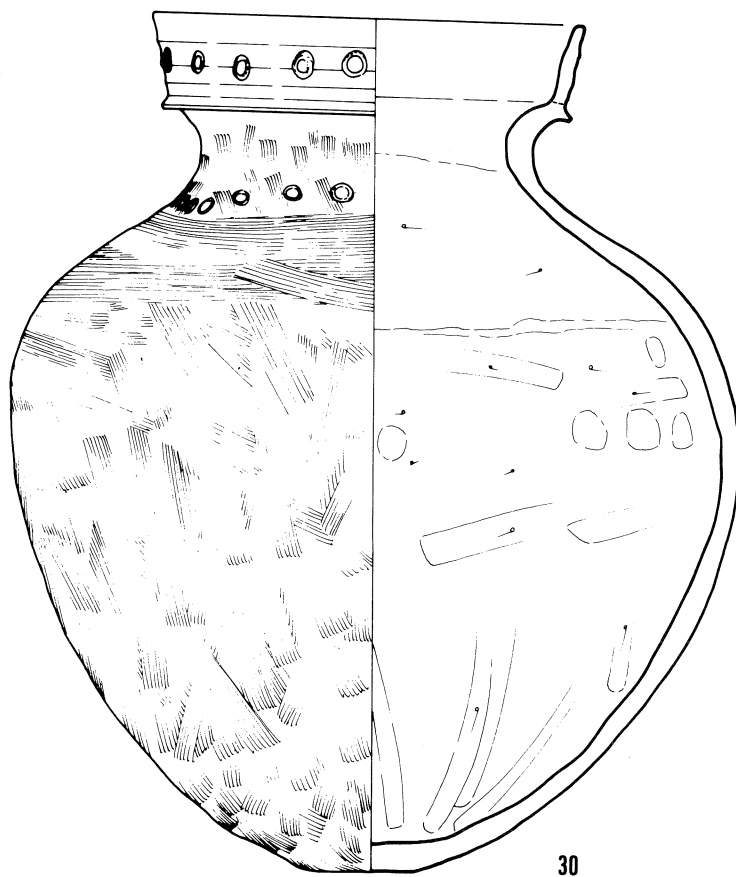
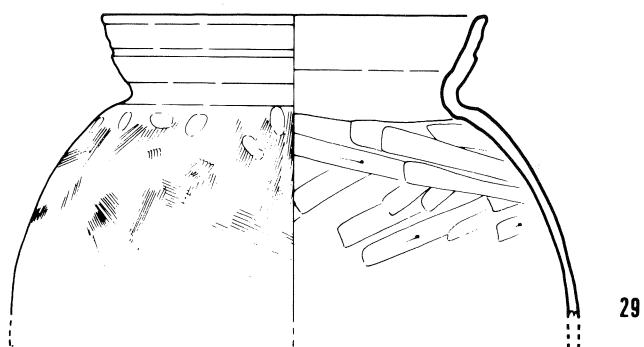


Fig. 41 遺物実測図(4)



0 20cm

Fig. 42 遺物実測図(5)

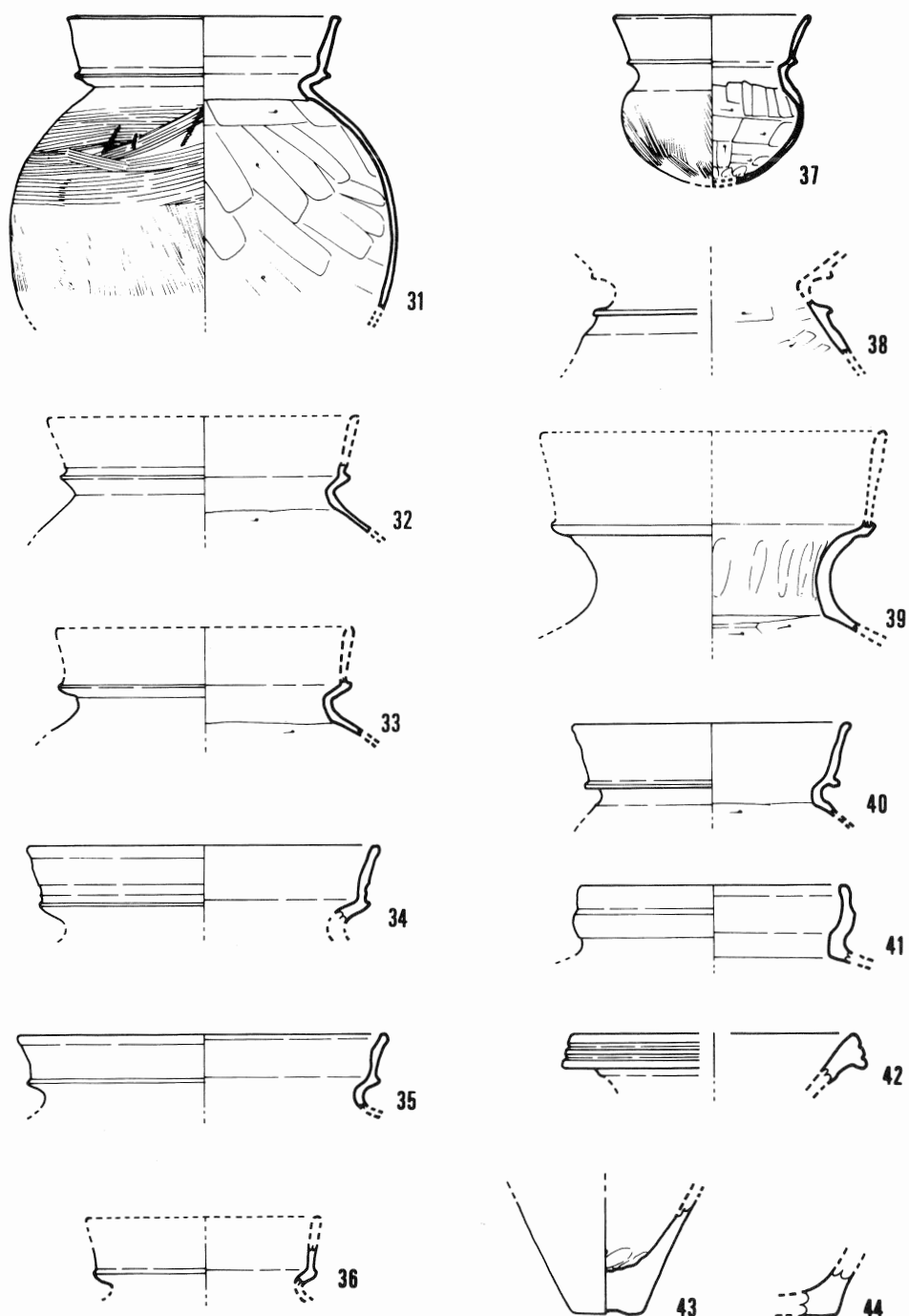


Fig. 43 遺物実測図(6)

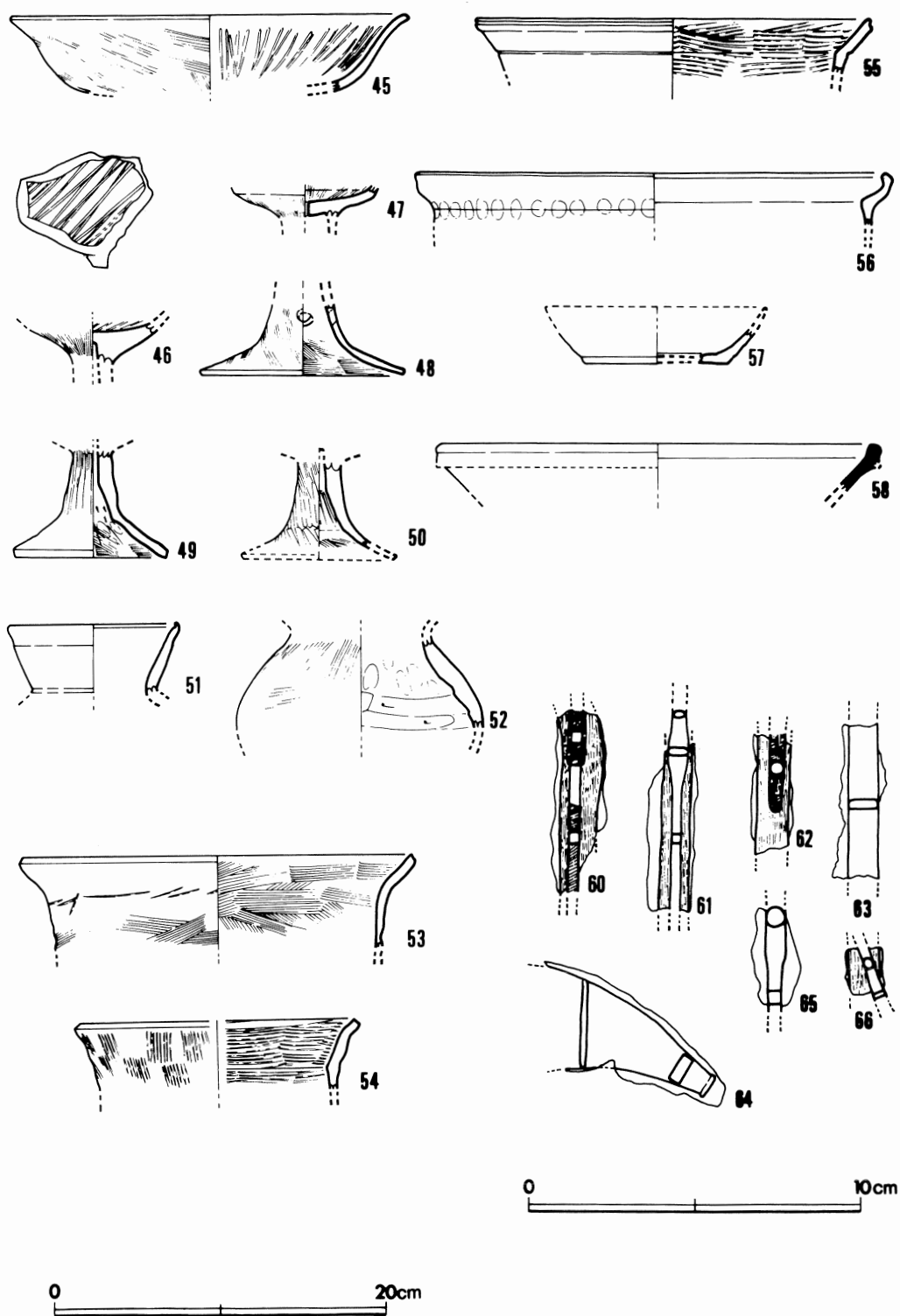


Fig. 44 遺物実測図(7)

第Ⅳ章 総 括

1. 寺内京南遺跡の動態

寺内京南遺跡は、鳥取市の西方約15km、気高郡鹿野町に所在する、弥生時代後期から鎌倉・室町時代へと継続する複合集落遺跡である。遺跡は、三国山麓に源を発する河内川左岸、標高35m付近の低位段丘上に位置する。

弥生時代の遺構・遺物には、後期に属する少量の土器片があるが、遺構の検出はなく、その実態は不明である。ただし、本遺跡の北方約500mに位置する寺内廃寺遺跡⁽¹⁾でも後期前葉の甕形土器が出土しており、周辺に当該時期の集落が所在する可能性は高い。

古墳時代前期には、遺構・遺物とも豊富になる。遺構としては竪穴住居跡7基以上、溝、各種規模の土壌などを検出しており、遺物も土器類を中心に、大部分がこの時期に属するものである。後期も遺物は散見されるが、遺構の実態は明らかではない。ただし、S2トレンチで木棺直葬墓を検出しており、当該時期においても継続して集落が営まれた可能性が高い。

奈良時代以降になると、一部古墳時代竪穴住居跡と共存する可能性もある掘立柱建物跡8棟以上や、各種規模の土壌を検出している。掘立柱建物跡には数グループの存在が想定できるが、全般的に掘形の規模は貧弱で、また梁間、桁行長にも、必ずしも厳密な尺度が使用されたとは考えられない。

鎌倉・室町時代の遺物は、少量表面採集されているが、宝篋印塔、五輪塔を伴った中世墓域を除き、遺構については不明であり、やがて水田化されて現代に至ったと推定される。

2. 寺内京南遺跡出土土器について

前述のように、遺構より検出、あるいは表面採集した土器は、弥生時代後期から鎌倉・室町時代に及ぶが、その中心を占めるものは古墳時代前期の土器である。

これらは、SB1（炉跡）、SD1（N1・S2トレンチ）から纏まって出土した以外、明確な遺構との相伴関係や編年の検討に耐え得る一括性を示さない。ここでは、器種・数量とも限定されるが、SB1・SD1出土土器の両者について若干の検討を加え、その編年的位置について考えておきたい。なお、各個体の詳細については、第Ⅲ章5、遺物観察表を参照されたい。

さて、SB1炉跡では、甕形土器（以下、～形土器は省略）3点、低脚杯2点、高杯1点、半環状把手付甌1点が出土している。甕はいずれも複合口縁形態を呈するもので、器壁は薄く、全体的に鋭い完成された形態を保持するものである。低脚杯は小片のため、細部に及ぶ器形は明らかではない。半環状把手付甌は、低脚杯などと共に山陰地方の古墳時代前期を特徴付ける

器種の一つで、弥生時代後期中葉（青木Ⅲ期古段階）に初見され（伯耆・会見町天王原遺跡⁽²⁾）、当該時期に盛行するものである。また、法量、把手の位置・個数、底部形態から、数種類に分類可能である。その分布は、西は山陰地方西部（石見・六日市町前立山遺跡⁽³⁾）、東は畿内地方西部（摂津・豊中市利倉西遺跡⁽⁴⁾）にまで及ぶ。

用途としては、灰の充満した深い炉跡とその出土状態、台石・石皿・敲石・磨石などの石器組成との関連や、遺跡周辺地域がトチモチとしてトチの実を食する習俗の残る地域⁽⁵⁾であることなどを勘案した場合、縄文時代後期には開発され、当地域にも伝承されていた可能性の高いトチノキの灰あわせ技術⁽⁶⁾に関連する機能を一部に保持するものかも知れない。ただし、山陰地方中心部からより遠距離地域に及ぶ程退化形態が看取される個体が増加し、本来保持したであろう機能と直接関連しない意図の下で製作される傾向が指摘されよう。

次に、SD 1 出土土器であるが、N 1 トレンチ部分では、甕 4 点、高杯 1 点、鼓形器台 1 点、S 1 トレンチ部分では、壺 1 点、甕 1 点が出土している。

まず、N 1 トレンチ出土土器であるが、甕はSB 1 炉跡出土土器と同様、完成度の高い複合口縁形態を呈し、肩部外面には櫛描直線・波状文が施される。その口径は、16～19cm前後のものが主体を占めるが、30cmを越える大形品もある。また、使用痕である煤化部位は、底部付近を除く体部下半部と口頸部外面を中心に看取され、その結果、支脚状器具の使用が想定される。鼓形器台は、筒部内面に鋭い稜を持ち、最も完成度の高い形態を呈している。また、筒部最小径を1とした場合、これに対する高さの比率⁽⁷⁾は1.27である。

次に、S 2 トレンチ出土土器であるが、壺は複合口縁形態を呈し、口縁・肩部外面に竹管文を施す。類例は、伯耆・羽合町長瀬高浜遺跡14J 地区黒砂層⁽⁸⁾・因幡・鳥取市秋里遺跡8・9・10土器群⁽⁹⁾などに認められる。このような竹管文や凸帯、櫛先刺突羽状文になる文様構成は、山陰地方の当該時期における壺を特色付けるものである。甕は複合口縁形態をほとんど失い、器壁も全体的に厚く、退化形態を示す。

以上より、鳥取県東部（千代川流域）・中部（天神川流域）地域のほぼ中間に所在する本遺跡出土土器の編年の位置を求めると、SB 1 炉跡出土土器は、長瀬高浜遺跡出土土器の検討を基礎にして設定された長瀬高浜Ⅰ～Ⅲ期⁽⁸⁾のⅠ期に、SD 1・N 1 トレンチ部分出土土器は、秋里遺跡8・9・10区土器群中の古相のものを標式とした秋里Ⅰ期⁽⁹⁾から長瀬高浜Ⅰ期に、同じくS 1 トレンチ部分出土土器は長瀬高浜Ⅱ期に比定できよう。

さらに、鳥取県西部（日野川流域）に位置し、弥生時代中期中葉から奈良時代までほぼ継続する複合遺跡である伯耆・米子市青木遺跡の編年案⁽¹⁰⁾では、SB 1 炉跡出土土器は青木Ⅶ（古）期に、SD 1・N 1 トレンチ部分出土土器は青木Ⅴ・Ⅵ～Ⅶ（古）期に、同じくS 1 トレンチ部分出土土器は青木Ⅶ（新）期に比定できよう。

〔注〕

- (1) 関西大学文学部考古学研究室 『寺内廃寺発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 鹿野町教育委員会 1979・1982
- (2) 清水真一・景山俊邦・村川裕紀 「コシキ形土器について」 『長瀬高浜だより』 20 中部埋蔵文化財調査事務所 1980
- (3) 内田律雄・勝部昭他 「前立山遺跡」 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』 島根県教育委員会 1980
- (4) 豊中市教育委員会、柳本照男氏の御教示をいただいた。
- (5) 渡辺誠 「桂見遺跡をめぐる諸問題点」 『桂見遺跡発掘調査報告書』 鳥取市教育委員会 1978
- (6) 渡辺誠 『縄文時代の植物食』 雄山閣 1975
- (7) 藤田憲司 「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」 『考古学雑誌』 第64巻 第4号 1979
- (8) 中部埋蔵文化財事務所 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 鳥取県教育文化財団 1981
- (9) 加藤利晴・杉谷愛象 『秋里遺跡Ⅰ』 鳥取市教育委員会 1976
- (10) 青木遺跡発掘調査団 『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 青木遺跡発掘調査団 1976・1977・1978

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

本書は調査上の制限や調査者の力量不足などにより、本来報告書が具備すべき基本的要件が多くにわたり欠落している。

これには、遺跡主要部がローム層直上まで削平された段階で発見されたことにより、遺構の検出状態が悪く、遺物もほとんど良好な状態で取り上げできなかったこと、上記理由にも起因するが、竪穴住居跡や一部の土壌、掘立柱建物跡の掘形・柱痕などの埋没状況を確認できなかったこと、連絡の不手際によりSB1炉跡周辺に据え付けられてあった砂岩製台石やSK10に落ち込んでいた石皿・磨石などの石器類を収容できなかったことなどがある。その結果として、報告書による各種検証や遺跡の景観復原に際して、重度の支障を生じせしめている。

しかし、このような悪条件下の調査にもかかわらず、本報告書が従来ほとんど実態不明であった、鳥取県東部・中部の中間地域における古墳時代前期を中心とした集落遺跡の研究に寄与する所があれば、望外の歓びとするものである。

最後に、関係諸機関の御尽力と御理解をいただき、ほぼ遺跡推定範囲全域について何らかの調査の手を加えることができ、かつ主要部分については設計変更による盛土工法によって遺構の保存対策が講じられたことは評価されよう。今後、ほ場整備事業の進展に伴い新たな遺跡発見が想定されるが、より十分な対策が講じられるよう切望して止まない。

また、発掘調査に従事していただいた地元調査補助員各氏を始めとし、現地調査・報告書作製を御支援・御指導下さった多くの方々に対して、衷心より謝意を表する次第である。

第V章 考 察

1. 鳥取県気高郡鹿野町寺内京南遺跡出土遺物に塗布された赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部 安田博幸・奥野礼子

標記の赤色顔料物質について、筆者らの常法¹⁾に従い、ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行なった結果、赤色顔料物質の成分を確認したので報告する。

試料の外観および分析試料の採取

試料1 小形高杯脚柱部の内面と外面に塗布された赤色顔料物質。それぞれをミクロスパーテルで注意深く削り取り、約2mgを分析用試料とする。

試料2 小形高杯脚部の外面全体と脚柱部の内面に塗布された赤色顔料物質。それぞれをミクロスパーテルで注意深く削り取り、約1mgを分析用試料とする。

試料3 小形高杯の杯底部の内外両面に塗布された赤色顔料物質。それぞれの2mgを注意深くミクロスパーテルで削り取り、分析用試料とする。

試料4 小形壺の口縁の一部で、その内外両面に塗布された赤色顔料物質。それぞれの1mgを注意深くミクロスパーテルで削り取り、分析用試料とする。

試料5 小形壺の肩部の一部で外面は全面、内面は頸部の一部に塗布された赤色顔料物質。それぞれの2mgをミクロスパーテルで削り取り、分析用試料とする。

実験の部

試料検液の作製

上記の採取試料1～5をそれぞれガラス尖形管に移し濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え、加温し、酸可溶性成分を溶解させたのち、適当量の蒸留水を加えて遠心分離器にかけ、酸不溶性成分と分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。試料検液の番号は各試料番号と対応させる。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No.53(2cm×40cm)を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、各試料検液と対照の鉄イオン(Fe^{3+})と水銀イオン(Hg^{2+})の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わった各ろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は検出試薬として1%ジフェニルカルバジドのアルコール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として0.05%ジチゾンクロロホルム溶液を噴霧し、それらの際、ろ紙上に発現するそれぞれの

呈色スポットの位置（Rf値で表現する）と色調を検した。

上記試料検液ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記のTab.17、Tab.18のとおりである。

- (1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出： Hg^{2+} は紫、 Fe^{3+} は紫褐色スポットとして検出される。

Tab. 17 ジフェニルカルバジドによるスポットの呈色とRf値

	Rf値 (色調)		Rf値 (色調)
試料検液 1 (外面)	0.15 (紫褐色)	試料検液 4 (外面)	0.13 (紫褐色)
〃 (内面)	0.14 (〃)	〃 (内面)	0.13 (〃)
試料検液 2 (外面)	0.15 (〃)	試料検液 5 (外面)	0.15 (〃)
〃 (内面)	0.14 (〃)	〃 (内面)	0.12 (〃)
試料検液 3 (外面)	0.16 (〃)	Fe^{3+} 標準液	0.13 (〃)
〃 (内面)	0.14 (〃)	Hg^{2+} 標準液	0.80 (紫 色)

- (2) ジチゾンによる検出： Hg^{2+} は橙色スポットとして検出され、 Fe^{3+} は反応陰性のため呈色せず、表では——で示す。

Tab. 18 ジチゾンによるスポットの呈色とRf値

	Rf値 (色調)		Rf値 (色調)
試料検液 1 (外面)	——	試料検液 4 (外面)	——
〃 (内面)	——	〃 (内面)	——
試料検液 2 (外面)	——	試料検液 5 (外面)	——
〃 (内面)	——	〃 (内面)	——
試料検液 3 (外面)	——	Fe^{3+} 標準液	——
〃 (内面)	——	Hg^{2+} 標準液	0.80 (橙 色)

判 定

以上の結果のとおり、寺内京南遺跡より出土の小形高杯脚柱部、小形高杯脚部、小形高杯杯底部および小形壺口縁部、小形壺肩部破片に塗布された赤色顔料物質からは、すべて Fe^{3+} のみが検出され、 Hg^{2+} は検出されなかった。このことよりそれぞれに使用された赤色顔料物質は、水銀朱(HgS)ではなく、すべてベンガラ(Fe_2O_3)であったと判定する。

(1982年2月分析)

[注]

1. 安田博幸・鶴崎暁子：「尼崎市田能遺跡16号棺の人骨に付着の朱赤色物質の成分について」『古代学研究』 第49号 p.9 (1967)
1. 安田博幸：「埋蔵文化財の分析化学」『考古学と自然科学』 第4号p.33 (1971)

2. 甕形土器の法量検討

——鳥取県地方の古式土師器について——

鳥取県下では、近年、有名な福市遺跡の調査以来、青木遺跡、秋里遺跡、長瀬高浜遺跡といった西日本屈指とも言える古墳時代の大規模遺跡の発掘が続き、膨大な資料を提供しつつある。しかし、一方では、それが土器研究に新たな混乱・支障を来し始めているとも言える状況である。そこで、鳥取県下の古式土師器という限定された条件を満たす土器の特性を探るべく、その中の甕形土器の法量に焦点を当て、検討を加えて行きたい。

ここで問題となるのは甕形土器の選択についてである。壺形土器がその出現以来、器形・装飾を変化させ、多種多様な器種を生んでいるのに対し、甕形土器は、煮沸機能を有するためか、外見的には派手な変化を見ない。この点は、甕形土器が日常性・保守性を物語っているといわれる所以でもあろうが、裏を返せば、甕形土器は広域かつ長期間にわたる土器の研究には好材料となり得るとも言える。また、壺形土器がおそらくは、その内容物によって器形・装飾を変化させたと思われることに対し、同時期の甕形土器内における形式の相違はそのサイズの違いにのみ存するとも言えるであろうことから、その法量検討は、甕形土器の研究には、有効な手段となり得ると信ずるのである。

小稿では、土器の法量を問題にする上で法量計測値の統計処理を行うが、そのためには多くの資料数が必要となる。寺内京南遺跡はそういった意味において良好な資料とはなり得ない。したがって、県内に所在し、本遺跡例と時間的に近い遺物を多量に出土する羽合町長瀬高浜遺跡出土の古式土師器を例にとり、¹⁾ 検討を進めようと思う。

稿を進める上で、鳥取県地方の古式土師器甕形土器（以下、甕と略称）について外形の特徴より、次の4分類を行う。

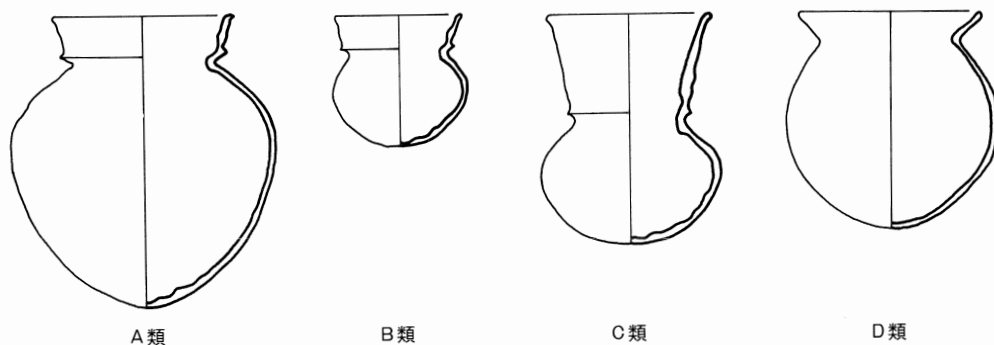


Fig. 45 甕形土器分類図

A 類 二重口縁をなし、卵倒形の胴部を有する。

B 類 扁平な胴部に、A 類に近い二重口縁を付す。多くは、口径が胴部最大径を凌ぐ。

C 類 扁平な胴部に長い口縁部を付す。

D 類 卵倒形の胴部に単純口縁を付す。

これら 4 分類は、Fig.46 にみるような統計的处理を経ても、なお妥当であるといえる。それによれば、A 類・D 類—B 類—C 類相互間の法量分布の差を認めることができる。すなわち、これは、諸類相互の存在を対比的に捉え得ることを示していると考ええる。

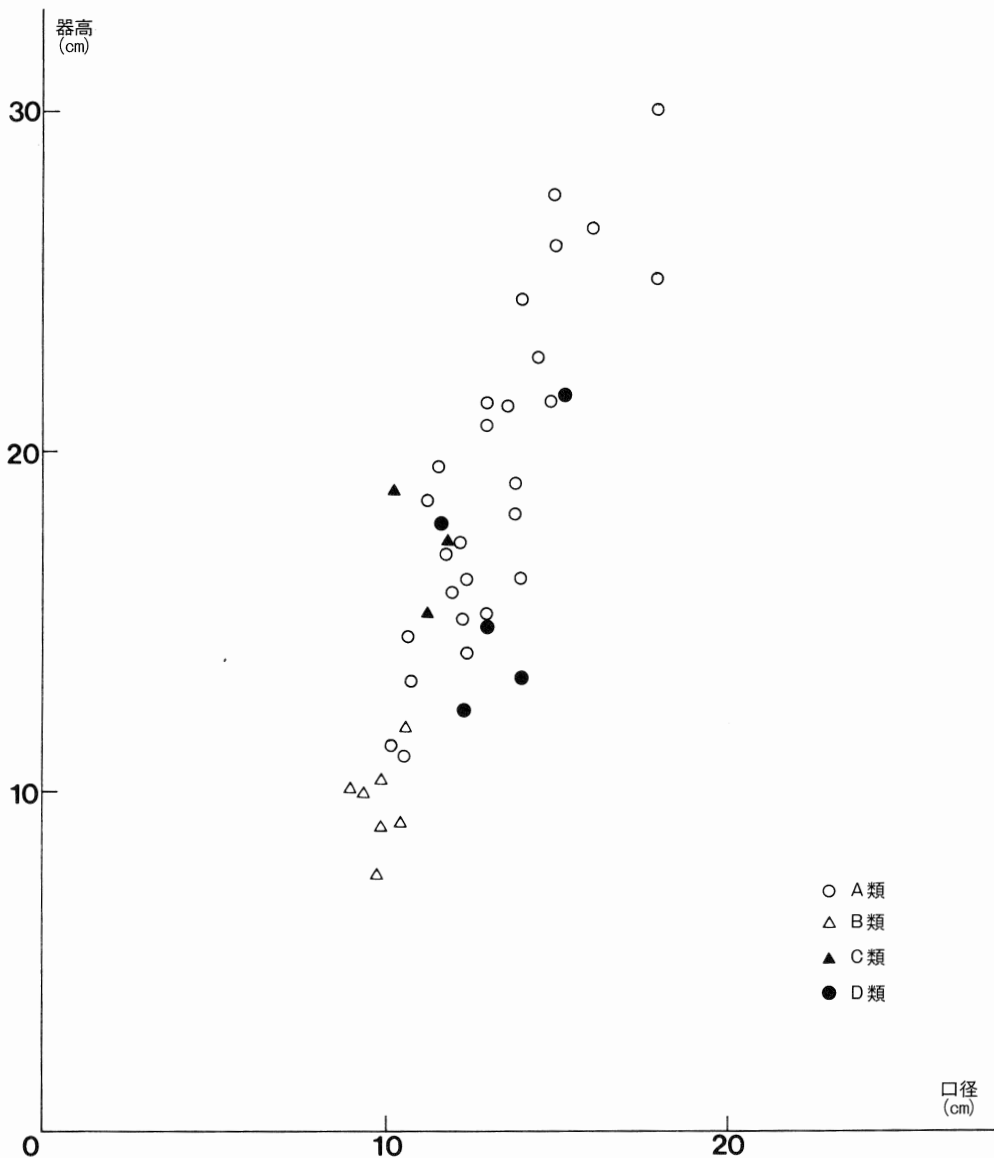


Fig. 46 甕形土器統計図

なお、B類・C類は、通常の甕とされるA類とは全く違った印象を受けるが、外面に煤の付着が多くみられること、壺との比較の場合、器壁の薄さ・頸部の形状・貧弱な装飾から甕により近いと思われることから、甕として扱うこととした。

次に、口径、胴部最大径、器高のそれぞれについての頻度分布を示したのがFig. 47・48・49である。結果、この三葉のグラフからは次の3点を看取できる。

1. Fig. 47は口径14cm前後を頂点として向って左に偏った山形をなす。すなわち計測値は、13cm～16cmに濃密に分布し、まれに非常に大きな口径を持つ甕のある一方、12cmを極大として9cm～13cmに分布する資料が存在することを示している。
2. Fig. 48からはFig. 47とは異なった情報を入手することができる。まず、グラフの向って左端に分布する一群を確認することができる。これは、先の分類によれば総てB類である。次に胴部最大径12.0cm～27.5cmの間に広範に分布する一群がある。その中に個体数の極大を示す資料群を3箇所認め得る。①14.0cm～17.5cmでは一つのまとまりを示すと考えられる。また、その約1/4はC類が占める。②18.0cm～21.5cmに属する一群が存在する。③22.0cm以上の資料群も一、あるいはそれ以上の群として扱うことができる。以上の諸点を総合すれば、A類・B類・C類各相互間を識別し得る一方、A類内に複数の群を認めることができることがわかる。
3. Fig. 49より一見して判断できることは、資料が近似した個体数で広範に分布することである。これは、甕において器高は個体差の大きい、また、非常に変動幅の大きい計測値であるといえる。

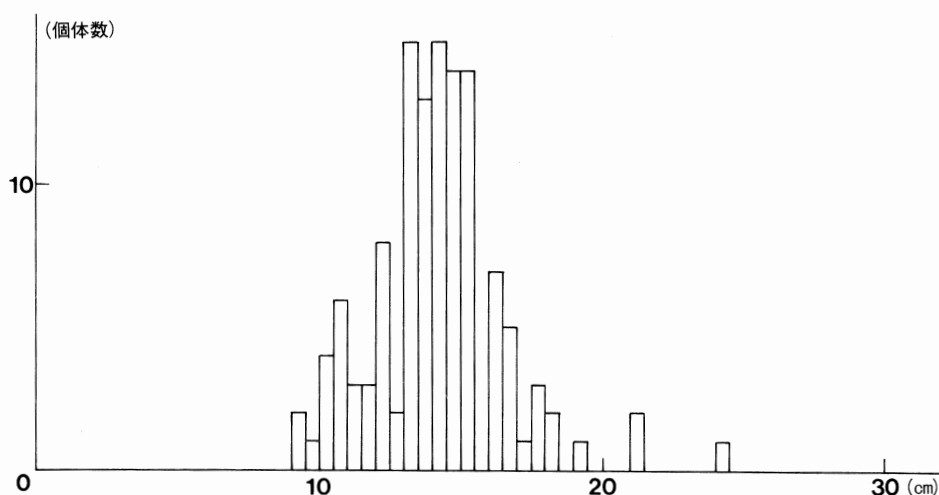


Fig. 47 口径計測値頻度分布図

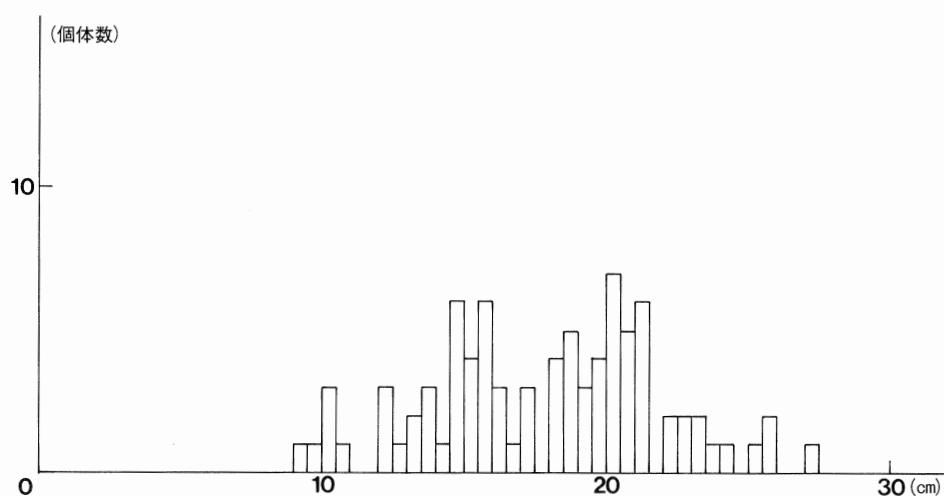


Fig. 48 胴部最大径計測値頻度分布図

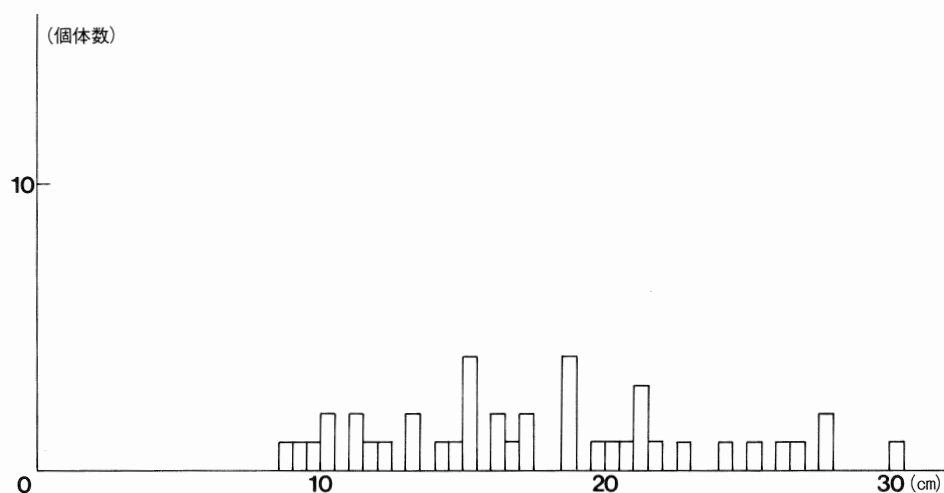


Fig. 49 器高計測値頻度分布図

以上は、次のように要約できる。

1. 口径は、土器個体相互間での差を認めにくい。
2. これに対し、胴部最大径は特にA類内における群の識別を容易にしており、A類には3群以上を認めることができる。
3. 土器個体差は器高計測値に最も端的に表われる。

Fig. 50は土器個々の容量計測値を求め、その頻度分布を示したものである。土器容量の測定にあたっては、土器を直径の異なる厚さ1 cmの円板の集積とし、円板の体積を集計して近似値を

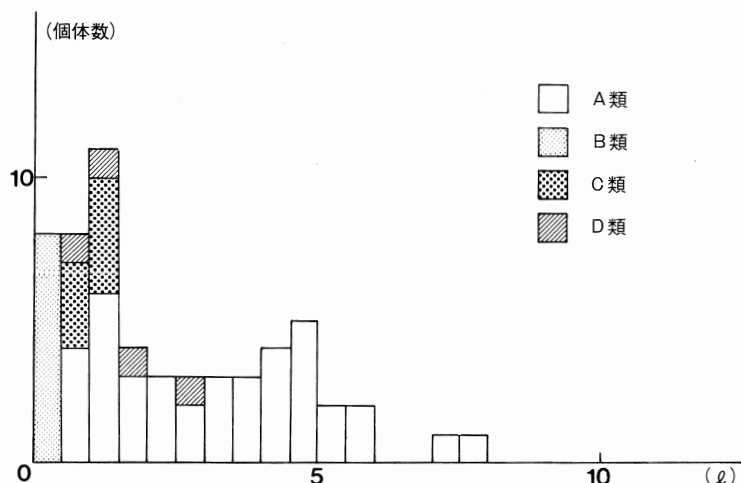


Fig. 50 容量計測値頻度分布図

求める方法を用いた。なお、計測箇所は頸部以下の胴部である。²⁾

この結果、次のような諸点を指摘することができよう。①B類は容量0.5ℓ未満にのみ分布する。②C類は0.5ℓ～1.5ℓの間に総て含まれる。③A類は0.5ℓ～8ℓの範囲に分布するが、その在り方は一様ではない。すなわち1.5ℓ前後を極大に0.5ℓ～3.0ℓに含まれる一群、4.5ℓ前後を極大に3.0ℓ～6.0ℓに含まれる一群、および少数ながら7.0ℓ～8.0ℓに分布する一群の三群あるいはそれ以上の存在を指摘できる。以上から、B類及びC類は土器容量においては、それぞれ非常なまとまりを見せている一方、A類はその中にいくつかの群を包含していると言えよう。

以上の統計的検討の結果は、長瀬高浜遺跡出土の古式土師器のうち、長瀬高浜Ⅰ期と報告される甕の特徴を示しているといえる。そこで、法量計測値頻度分布の観察結果を踏まえ、甕の分類を試みる。

A-1類 A類のうち胴部最大径25.0cm以上、容量7.0ℓ～8.0ℓに含まれるものを指す。このうち外面に煤の付着の見られない資料が多く存在することが注意される。

A-2類 A類の中で、胴部最大径23cm前後、容量5.0ℓ～6.0ℓ程度の甕を指す。煮沸に用いる甕としては、最も大型であろう。

A-3類 A類の中で、胴部最大径がおよそ18.0cm～21.0cm、容量が3.5ℓ～4.5ℓ程度の甕である。検討例中最も数が多い。

A-4類 A類のうち、胴部最大径がおよそ14.5cm～16.5cm、容量1ℓ前後の甕。検討例中A-3類に次いで多数を占める。

B類 当初設定したB類がこれにあたる。

C類 当初設定したC類がこれにあたる。

D類 当初設定したD類がこれにあたる。検討例は資料数が限られるため詳細は不明であるが、胴部最大径・容量の計測値ではA-4類と分布範囲を共有しているが、口径がやや大きい傾向がある。

E類 当初A類に包括していた一群の土器である。これは、口径・胴部最大径・容量はA-4類と同様な計測結果を示すが、器高計測値はA-4類を下まわっており、口縁部がA類より長く、やや扁平な印象を受ける土器である。

これらの分類を踏まえたうえで、法量に関する検討結果をまとめてみよう。

まず、総てのグラフについて同様に観察できるのは、計測値が大きくなるに従い、資料数は少なく、またそのばらつきが大きくなることである。このことは、一つには大型のA-1類の少数存在を示している。A-1類は、外面に煤の付着する資料が少ないことも相関して、甕本来の用途＝煮沸から外れた土器である可能性がある。これは、容量の近い壺と比較した場合、口径の小さい壺とは内容物を異にする貯蔵の目的を持った器種としてA-1類が存在したことを想像させる。また、法量のばらつきの大きい点から、A-1類は一定の法量を持たず、少量生産によってその目的を達することができる甕であったとも言える。次に、それぞれのグラフにおいて、資料が濃密に分布する部位の多くを占めるのは、A-2・A-3・A-4類であることは前に述べたとおりである。これらの甕は報告書を概観したところでは、全体の5～6割に煤の付着が認められる。この数字自体は破片資料も含まれることから断定的ではないが、これら三類が本来煮沸機能を有する土器であるとすれば、煤の付着が見られない資料については、①製作時における不良品としての未使用品、②煮沸以外の用途に転用された土器、③ストックとしての未使用品、等の解釈を与えることができる。また、資料の濃密分布は、サイズを異にする数種類の甕が数多く製作されていたことを示し、それらが何らかの生活システムにおいて、ある比率をもって存在したことを想定させるものである。B類・C類の分布は、各々強いまとまりを示すことから、きわめて限定された用途を与えることができよう。

以上は、先に指摘したように、胴部最大径・器高・容量各計測値の頻度分布において顕著であるが、口径計測値はそれらに較べ変動幅が小さい。このことは、当該時期のほとんどの甕が類似した二重口縁を有する事実とも相まって、土器各部分の中にあっては、口縁部は非常に固定的な位置を占めることを示している。また、このような検討は、長瀬高浜Ⅰ期の甕に限定されるが、他遺跡・地域・時期の資料を検討することによって、土器の構成と生活様式との関わり合いも追究し得るであろう。

〔注〕

1. 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』鳥取県教育文化財団 1981
2. 都出比呂志「畿内第五様式土器の変革」『考古学論考』1982

3. 古墳時代前期の竪穴住居跡の一例をめぐって

——寺内京南遺跡の占める位置——

(1) 寺内京南遺跡の検討

寺内京南遺跡において検出された竪穴住居跡は9基(SB1、SB3を各々2基と算入する)であり、その中で平面形の判明している3基について、若干の考察を加えてみたい。

SB1-a、SB1-bはともに円形で、SB1-aからSB1-bへと同心円状に拡張されている。支柱穴はともに4本で、住居跡の直径はSB1-aが約4.2m、SB1-bが約5.0mを測る。床面積¹⁾は、SB1-aが約10.2m²、SB1-bが13.7m²である。中央の炉跡およびSK6より出土した土器は、いずれも青木Ⅶ期古²⁾のものである。中央の炉跡がSB1-a構築時に掘られたものであるとすれば、SB1-aの構築→SB1-bへの拡張→SK6の構築という一連の過程は、すべて青木Ⅶ期古の時期内において行なわれたことになる。

また、SB2は隅丸方形で、支柱穴は4本、住居跡の長辺約5.2m、短辺約4.8mを測る。床面積は、約18.4m²である。時期を判別しうる遺物の出土をみないが、周辺から出土する土器の大部分が青木Ⅶ期古の範疇に含まれるため、同時期とみて、大過ない時期であると考ええる。

ここで、まず鳥取県下の代表的な遺跡における竪穴住居跡の一般的な平面形の変遷について見ていくこととする。

米子市・青木遺跡³⁾では、円形→隅丸方形→隅丸多角形→長方形→方形という変遷をたどる。これをさらに細かく見てみると、Ⅰ～Ⅱ期は大半が円形で、Ⅲ期に入ると、円形の他に隅丸方形と多角形が出現する。Ⅳ期に入ると、円形が減少し、隅丸方形、隅丸多角形が存続する。Ⅴ・Ⅵ期にいたって方形および長方形が出現し、円形・隅丸方形・隅丸多角形が消滅する。Ⅶ・Ⅷ期には方形・長方形のみがみられるが、なかでもⅧ期は長方形が多数を占める。この長方形優位はⅨ期に継続され、Ⅹ期には方形に限定されるようになる。

米子市・福市遺跡⁴⁾では円形→隅丸方形→方形であり、Ⅰ期(青木Ⅲ期併行⁵⁾)は円形のみみられ、Ⅱ古期(青木Ⅴ期)に入ると円形の他に隅丸方形および方形が出現し、なかでも隅丸方形が主流を占める。Ⅱ新时期(青木Ⅵ期)には円形が消滅し、隅丸方形および方形のみみられ、なかでも方形が主流を占める。Ⅲ期(青木Ⅶ・Ⅷ期)以降は方形のみみられるようになる。

以上のごとく、SB1のような円形住居は青木Ⅴ・Ⅵ期(古墳時代前期中葉⁶⁾)には消滅する傾向にある。また、SB2のような隅丸方形のものも青木Ⅵ期には急減し、青木Ⅶ期以降は、倉吉市・服部遺跡2号住居跡⁷⁾(Fig. 51)のような例外を除けば、消滅する傾向がみられる。

次に、寺内京南遺跡の住居跡について、平面形からみた類似例を挙げることにする。

SB1と同様の平面型⁸⁾をもつ例として、青木遺跡J地区SI04⁹⁾(Fig. 52)がある。円形

で、支柱穴は4本、長径4.51m、短径4.23mを測り、床面積は15.1m²である。床面中央には方形の“特殊ピット”があり、その南北両側には、SB 1 同様、ピットが各1個ある。時期は出土遺物から、青木Ⅰ期に比定されている。

福市遺跡四ツ塚谷地区5号住居跡¹⁰⁾ (Fig. 53) も円形で、支柱穴は4本、径約4.3m～4.5m

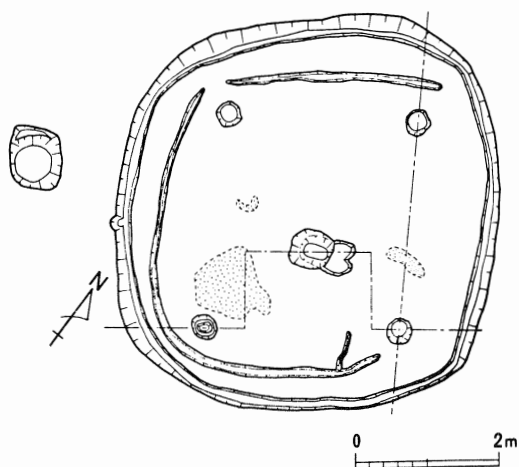


Fig. 51 服部遺跡2号住居跡実測図

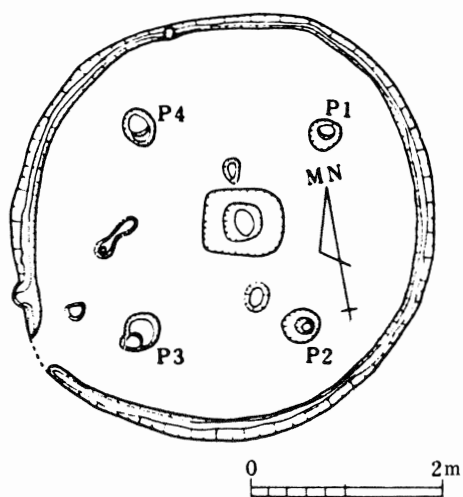


Fig. 52 青木遺跡JSI04実測図

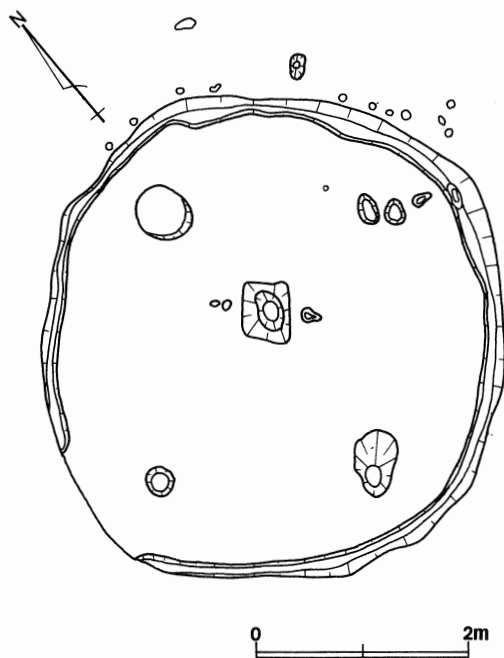


Fig. 53 福市遺跡四ツ塚谷5号住居跡実測図

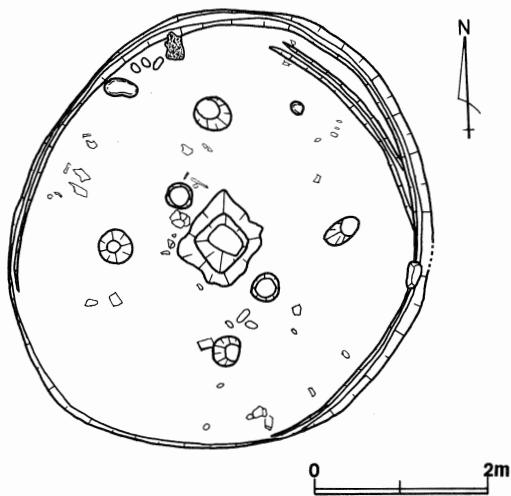


Fig. 54 西原遺跡10号住居跡実測図

を測る。床面中央には長方形のピットがあり、その北西側に2個、南東側に1個のピットがみられる。時期は福市Ⅰ期（青木Ⅲ期）とされている。

また、岡山県落合町・西原遺跡10号住居跡¹¹⁾ (Fig. 54) も円形で、主柱穴は4本、径約5mを測る。床面中央には方形のピットがあり、その東西に各1個のピットがみられる。時期は弥生時代後期であると考えられる。

一方、SB 2に類似した平面型¹²⁾をもつ例として、青木遺跡F地区SI 29¹³⁾ (Fig. 55) が挙げられる。隅丸方形で、主柱穴は4本、長辺4.37m、短辺4.27mを測り、床面積は約18.7m²である。床面中央には楕円形の特殊ピットがみられる。時期は青木Ⅲ期である。

また、福市遺跡吉塚地区18号住居跡¹⁴⁾ (Fig. 56) も隅丸方形で、主柱穴は4本、一辺約4.9mを測り、床面積は約22.0m²である。床面中央には、同様の楕円形ピットがみられる。時期は、福市Ⅱ古期（青木Ⅴ期）とされる。

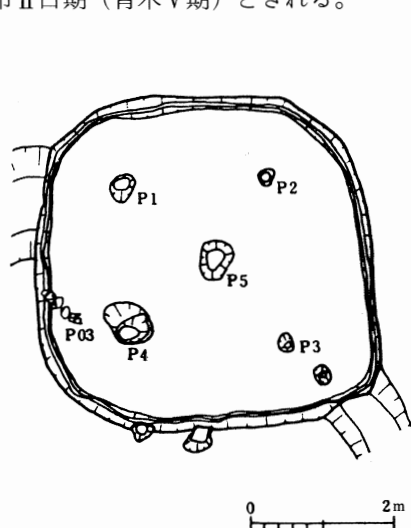


Fig. 55 青木遺跡FSI29 実測図

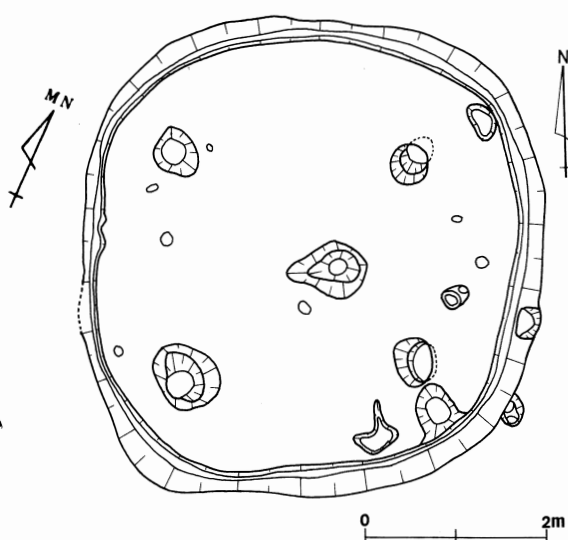


Fig. 56 福市遺跡吉塚18号住居跡実測図

このように、平面型¹⁵⁾から見た場合、他の遺跡では「SB 1」型¹⁶⁾のものは、青木Ⅳ期以降該当例がなく、「SB 2」型¹⁷⁾のものも青木Ⅵ期まで降らないといえるだろう。

これらの住居跡がいかなる意味をもつのかは後述することにして、次に因伯地方における古墳時代前期¹⁸⁾に属する竪穴住居跡についてみてみよう。

(2) 因伯地方における古墳時代前期の竪穴住居跡

管見によると、旧因幡国内では、古墳時代前期の竪穴住居跡の検出例は少ない (Fig. 57参照)。寺内京南遺跡の他には、鳥取市・松原谷田遺跡に例を見るのみである。松原谷田遺跡TD 2号住居跡¹⁹⁾は六角形で、一辺約4.8mを測り、古墳時代前期前半（青木Ⅳ期か？）に比定される。

一方、旧伯耆国内においては、かなりの検出例が認められる。まず、東伯郡羽合町・長瀬高

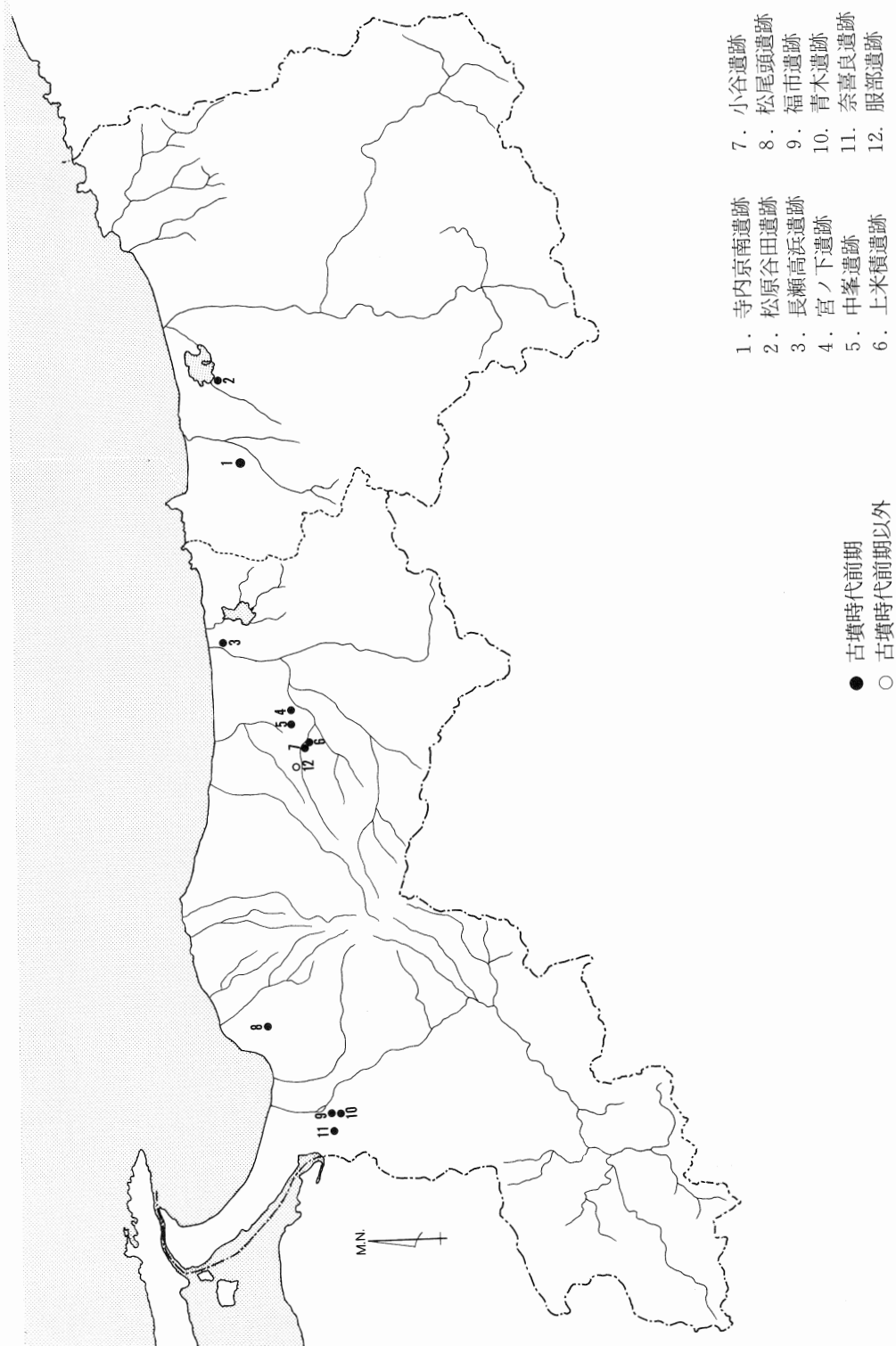


Fig. 57 因伯地方における竪穴住居跡分布図

浜遺跡²⁰⁾では、計75基以上²¹⁾の竪穴住居跡が検出されているが、うち49基が古墳時代前期²²⁾に属するとされている。

内訳は、長瀬Ⅰ期(青木Ⅶ期古)のものが18基、長瀬Ⅰ期～Ⅱ期のものが2基、長瀬Ⅱ期(青木Ⅶ期新)のものが27基、長瀬Ⅱ期～Ⅲ期のものが2基である(Tab. 19参照)。その他、長瀬Ⅲ期(青木Ⅶ期古)のものが15基、時期不明のものが10基、弥生時代前期のものが1基確認されている。

当遺跡における古墳時代前期(長瀬Ⅰ期～Ⅱ期)の竪穴住居跡の変遷を見てみると、長瀬Ⅰ期では方形住居、なかでも4支柱のものが主流を占める。これに対して、隅丸長方形、隅丸方形は少なく、多角形及び隅丸多角形のものは見られない。

ところが、長瀬Ⅱ期になると、方形及び長方形のものと隅丸方形及び多角形のものが相半ばするようになる。これらの資料で見える限りにおいて、当遺跡における変遷はその他の遺跡で見られた円形→隅丸方形→方形という一連の流れに少なからず矛盾しているといえよう。

また、当遺跡における円形住居は弥生時代前期のS I 71しかないが、ただ、S I 13やS I 31などの多角形のものや、S I 11やS I 32といった隅丸方形のものが、長瀬Ⅱ期(青木Ⅶ期新)においてみられるということは注目に値する。

倉吉市・宮ノ下遺跡²³⁾では合計11基の竪穴住居跡が検出されているが、これらの中で、4号および6号住居跡が古墳時代前期後半に比定されている。4号住居跡は円形に近い隅丸方形で、長径6.82m、短径6.44mを測り、支柱穴は6本である。床面中央には不整長方形のピットがみられる。6号住居跡は丸味を帯びた隅丸方形で、長径6.02m、短径6.0mを測り、支柱穴は4本ないしは5本である。

倉吉市・中峯遺跡²⁴⁾で検出された竪穴住居跡25基中、4基が弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭に比定されている。

7号住居跡は丸味を帯びた六角形で、長径7.06m、短径6.40mを測り、支柱穴は6本である。床面中央には方形ピットがみられる。14号住居跡は隅丸六角形で、長径7.48m、短径7.36mを測り、支柱穴は6本である。床面中央には台形に近い方形ピットがみられる。24号住居跡は円形に近い六角形で、長径6.12m、短径6.05mを測り、支柱穴は6本である。床面中央には隅丸方形のピットがみられる。25号住居跡は南側の一部分しか検出されておらず、平面形・規模などは不明である。

倉吉市・上米積遺跡²⁵⁾では5基の竪穴住居跡が検出されたが、奥田地区の3基の住居跡が古墳時代前期に比定されている。1号住居跡は円形に近い隅丸方形で、長径6.92m、短径6.68mを測り、支柱穴は4本である。床面中央には不整長方形のピットを有する。また、この中央ピットから周溝に向かってのびる一条の溝がみられる。その他の2基はいずれも未調査であるが、検出面では隅丸方形を呈する。

倉吉市・小谷遺跡²⁶⁾では、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡が4基検出されている。1号住居跡は円形に近い六角形で、長径5.56m、短径5.28mを測り、主柱穴は6本である。床面中央には方形ピットをもつ。2号住居跡は大部分が未調査だが、円形に近い方形もしくは多角形であると考えられている。その他の2基についての詳細は不明である。

大山町・松尾頭遺跡²⁷⁾では3基の竪穴住居跡が確認されているが、その中の1基が古墳時代前期に比定されている。SI001は隅丸長方形で、長径4.2m、短径3.6mを測り、主柱穴は4本である。床面中央には方形ピットがみられる。

米子市・福市遺跡²⁸⁾では152基の竪穴住居跡が検出されているが、古墳時代前期（福市Ⅱ古期およびⅡ新期、Ⅲ古期）に層するものは、日焼山地区で5基、吉塚地区で28基、四ツ塚谷地区で1基検出されている。時期別・平面形については、Tab. 20のごとくである。

米子市・青木遺跡²⁹⁾でも多数の竪穴住居跡が検出されており、総数256基のうち、青木Ⅲ～Ⅳ期に属するものが5基、Ⅳ期に属するものが29基³⁰⁾、Ⅴ・Ⅵ期に属するものが5基、Ⅶ期に属するものが6基、およびⅦ期～Ⅷ期に属するものが1基確認されている。時期別・平面形については、Tab. 21のごとくである。

最後に、米子市・奈喜良遺跡³¹⁾では、10基の竪穴住居跡のうち、6基が古墳時代前期に比定されている。³²⁾ 2号住居跡は、方形または長方形で、長辺3.05m、短辺2.20m（現存長）を測り、南側壁寄りに円形ピットがみられる。時期は前期後葉とされている。3号住居跡は楕円形で、長径4.43m、短径2.15m（現存長）を測り、床面中央よりやや西寄りに楕円形のピットがみられる。時期は、前期中葉とされる。4号住居跡は隅丸方形もしくは隅丸五角形で、長辺6.45m、短辺4.24mを測り、主柱穴は4本で、床面中央には円形のピットがみられる。時期は前期中葉に比定されている。6号住居跡は、隅丸五角形で、長径5.65m、短径4.87m（現存長）を測り、主柱穴は4本まで確認されており、床面中央には隅丸方形のピットがみられる。時期は前期初頭とされている。8号住居跡は隅丸方形で、長辺4.3m、短辺4.27mを測り、主柱穴は4本で、床面中央には浅い皿状の炉跡があり、南東壁下中央には隅丸方形のピットがある。時期は前期後葉に比定されている。9号住居跡は隅丸六角形(?)で、長径6.58m、短径6m（現存長）を測り、主柱穴は6本で、床面中央には不整円形のピットがみられる。時期は前期初頭に位置づけられている。

以上のように、因伯地方における古墳時代前期の竪穴住居跡について概観してみたが、当地域における平面形の変遷に関して、他地域との比較をも交えながら、小論を進めていきたいと思う。

(3) 小 結

古墳時代前期における竪穴住居の平面形に関していえば、山陰地方は独特の地域性を保持した地域といえよう。

他地域と比較してみると、九州地方では弥生時代後期以降、「円形」住居が完全に消滅し、

「方形」住居のみによって占められている。また、近畿地方でも古墳時代前期にはすべて「方形」住居によって占められるようになる。

これに対し、山陰および山陽地方、そして北陸地方においては古墳時代前期に入っても依然として、「円形」住居がかなりの割合を占めている。³³⁾ここで、青木Ⅳ期を古墳時代前期前葉、青木Ⅴ・Ⅵ期を同前期中葉、青木Ⅶ期を同前期後葉として、再び、因伯地方の平面形の変遷について考えてみたい。

前期前葉においては、弥生時代中期以来みられる多支柱構造³⁴⁾の「円形」住居は減少するが、弥生時代後期後半になって急増した「多角形」・「隅丸多角形」の住居が存続し、「隅丸方形」の住居もみられ、多様性を帯びているが、いわゆる「方形」住居はほとんどみられない。前期中葉に入ると、「方形」・「長方形」住居が出現し、「円形」および「隅丸方形」・「隅丸多角形」の住居は消滅する。そして、前期後葉には、「長方形」および「方形」住居のみみられるようになる。

すなわち、九州地方においては弥生時代中期後半→同後期の時期に、近畿地方では弥生時代後期→古墳時代前期前半の時期にみられた「円形」→「方形」への統合が、因伯地方においては古墳時代前期前葉→同前期中葉になって、はじめて及ぶに至ったのである。

また、山陽地方でもこの現象は同じ頃にみられる。例えば、岡山県・雄町遺跡³⁵⁾の場合、古墳時代前期前半（雄町13類）では、4支柱の「方形」住居の他に、4支柱の「不整円形」住居、4支柱の「円形」住居、6支柱の「六角形」住居がみられるが、次段階の雄町14類期になると、2支柱ないし4支柱の「方形」住居によってのみ占められるようになる。

一方、北陸地方においても、古墳時代前期前半まで、「円形」・「多角形」住居が残存するようで、その例として、金沢市・塚崎遺跡第6号竪穴³⁶⁾などがある。

以上のように、山陰・山陽および北陸地方は、九州・近畿地方に比べると、遅くまで「円形」住居がみられるという点において、保守的な地域性を保っていたといえる。しかも、今回、寺内京南遺跡において検出された竪穴住居跡は、「円形」住居が長く存続する山陰地方の中でも、よりその伝統を根強く保持する一例として注目されよう。

〔注〕

1. この場合の床面積とは、実質的な意味においての“床”の面積を表わす。すなわち、全住居跡面積から、周溝・ピット・炉跡などの占める面積を除いた部分の面積をさす。
2. ①『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（F・J地区）1976 青木遺跡発掘調査団
②『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（C・D地区）1977 青木遺跡発掘調査団
③『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』（A・B・E・H地区）1978 青木遺跡発掘調査団
3. 前掲書（注）2—①による
4. 『福市遺跡の研究：古墳時代集落跡と土師器について』1969 山陰考古学研究所

5. 前掲書（注）2—①による
6. 青木Ⅳ期を古墳時代前期前葉、青木Ⅴ・Ⅵ期を同前期中葉、青木Ⅶ期を同前期後葉とする。
7. この住居跡は服部Ⅲ期（すなわち青木Ⅷ期）に比定されているが、長瀬高浜遺跡においても、ほぼ同時期の長瀬Ⅲ期に、隅丸方形および隅丸長方形のものが数例みられる。
8. この場合は平面形が円形で、支柱穴が4本、床面中央に“特殊ピット”をもち、その両側に、一対のピットをもつものをさす。
9. 前掲書（注）2—①
10. 前掲書（注）4
11. 『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査3』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6）1973 岡山県文化財保護協会
12. この場合は、平面形が隅丸方形で、支柱穴が4本、床面中央に“特殊ピット”をもつものをさす。
13. 前掲書（注）2—①
14. 前掲書（注）4
15. この場合の“平面型”とは、単なる平面の形、すなわち“平面形”のみならず、支柱穴の数やその他のピットなどをも加味した住居跡の平面的な型をさす。
16. （注）8参照
17. （注）12参照
18. （注）6参照
19. 『松原谷田遺跡Ⅱ・大路川遺跡調査概報』1976 鳥取市教育委員会
20. 『鳥取県羽合町・長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1981 鳥取県教育文化財団
21. 前掲書（注）20のみによる。昭和56年度の調査までに、130基余の竪穴住居跡が検出されている。
22. ここでは、長瀬Ⅰ期、Ⅰ期～Ⅱ期、Ⅱ期およびⅡ～Ⅲ期に属するものをさす。
23. 『宮ノ下遺跡発掘調査報告』1976 倉吉市教育委員会
24. 『中峯遺跡発掘調査概報』1975 倉吉市教育委員会
25. 『上米積遺跡群分布調査概報』1980 倉吉市教育委員会
26. 『ごりょう塚古墳他発掘調査概報』1978 倉吉市教育委員会
27. ①『大山町長田・高麗地域遺跡群・松尾頭遺跡調査報告書』1978 大山町教育委員会
②『鳥取県大山町・松尾頭遺跡Ⅱ』1979 大山町教育委員会
28. 前掲書（注）4
29. 前掲書（注）2
30. 前掲書（注）2—③の中の「第四章・考察編」の「第2節・遺構論」では、Ⅳ期21棟とあるが、管見によれば、29基認められる。
31. 『鳥取県米子市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』1976 米子市教育委員会
32. 奈喜良遺跡における、Ⅴ期～Ⅶ期に属する6基の竪穴住居跡（2号・3号・4号・6号・8号・9号）をさす。
33. 石野博信「考古学から見た古代日本の住居」『家』1975 社会思想社
34. 支柱穴を5本以上もつものをいう。
35. 『埋蔵文化財発掘調査報告——山陽新幹線建設に伴う調査——』1972 岡山県文化財保護協会
36. 『金沢市塚崎遺跡（第2・3次）』1971 石川県教育委員会

	I 期	I～II期	II 期	II～III期	III 期	不 明	計
円 形	—	—	—	—	—	—	0
多 角 形	—	—	4	—	—	—	4
隅丸多角形	—	—	1	—	—	—	1
隅丸方形	1	1	7	—	1	—	10
隅丸長方形	2	—	—	—	2	—	4
方 形	13	—	10	1	9	7	40
長 方 形	1	1	4	1	3	2	12
そ の 他	1	—	1	—	—	1	3
計	18	2	27	2	15	10	74

Tab. 19 長瀬高浜遺跡竪穴住居跡平面形・時期別一覧表

	I 期	II 古期	II 新期	III 古期	III 新期	IV 期	計
円 形	16	2	1	—	—	—	19
多 角 形	—	—	—	—	—	—	0
隅丸多角形	—	—	—	—	—	—	0
隅丸方形	—	7	5	—	—	—	12
方 形	—	3	11	4	1	5	24
長 方 形	—	—	1	—	—	—	1
計	16	12	18	4	1	5	56

Tab. 20 福市遺跡竪穴住居跡平面形・時期別一覧表

	III～IV期	IV 期	V・VI期	VII 期	VII～VIII期	計
円 形	1	6	—	—	—	7
多 角 形	—	2	—	—	—	2
隅丸多角形	2	8	—	—	—	10
隅丸方形	2	10	1	—	—	13
方 形	—	—	3	4	—	7
長 方 形	—	1	1	2	1	5
そ の 他	—	2	—	—	—	2
計	5	29	5	6	1	46

Tab. 21 青木遺跡竪穴住居跡平面形・時期別一覧表

4. 掘立柱建物跡の年代について

—— 寺内京南遺跡と青木遺跡の比較を通して ——

掘立柱建物は、一般に弥生時代に高床式の倉庫として発生したものが、古墳時代に入り住居様式として用いられた新しい建築様式と考えられている。それは、伝香川県出土の袈裟襷文銅鐸に描かれた倉庫や、奈良県唐古遺跡出土の弥生土器片に線刻された倉庫、奈良県佐味田宝塚古墳より出土した家屋文鏡に描かれた家屋、その他種々の古墳より出土する家形埴輪などよりその存在は実証される。しかし、考古学的な発掘調査によりその上部構造の復元は不可能に近く、現状では、平面構成によってのみ確認される。つまり、遺構として残る柱穴の並びを検討するのであるが、たとえ同一遺構面で柱穴が多量に検出されても、必ずしも同時期であるとは限らず、そのために柱穴の重複関係、その柱穴の埋土に混在している遺物から時期決定を行っているのである。しかし実際には、層序・遺物から時期決定が十分にできない場合が多く、柱間距離・主軸方向から検討を加えることにより、その性格等を考察するのが限界である。これには報告者の主観が多分に入り込み、単に方形に並んでいるため、それが1つの掘立柱建物であると判断することもあると考えられる。

寺内京南遺跡もその例の1つである。これは、報告者が現地に赴いた時は既に完掘されており、層序は全く不明で、柱穴がどの面より掘り込まれているのか、また柱穴の埋土なども全くわからず、出土遺物も不明であった。そこで報告者はやむをえず、柱間距離・主軸方向などにより掘立柱建物であると判断し、それが尺度（1尺＝約30cm）で完数を得られることにより、奈良時代の掘立柱建物であると報告した。これは、たとえ、伯耆国という「畿内」に対する「地方」であっても、奈良時代の掘立柱建物には、何らかの規則性が存在するという前提に立脚した上での判断であるが、この方法で果して正しい判断が下せるのかという問題点がある。

奈良時代に推定される遺跡は、鳥取県において、伯耆国庁跡以外にはその類例が少ない。しかし、寺内京南遺跡と伯耆国庁跡とは、遺跡の性格がかなり違っているものと考えられ、¹⁾寺内京南遺跡に相当する例は、米子市青木遺跡に求められる。青木遺跡は縄文時代後期から奈良時代へと続く複合遺跡で、遺構としては、掘立柱建物跡260棟、竪穴住居跡206棟、柵列10本等の住居関係遺構、貯蔵穴14基、落し穴238基、水田推定地などの生産・狩猟関係遺構、古墳53基、周溝墓36基、土壇墓81基等の埋葬遺構などがある。²⁾ここでとりあげる奈良時代の掘立柱建物跡は76棟検出され、その平面構成の内訳は、1間×1間が16棟、1間×2間が13棟、1間×3間が7棟、2間×2間が10棟、2間×3間が28棟、2間×4間が2棟である。

青木遺跡発掘調査報告書の考察によると、奈良時代の掘立柱建物跡には何らかの法則を持っているということを示唆する文章として、「柱間距離は、奈良朝以外は不統一で、高い建築構造

を作り得ない³⁾」。「弥生時代とみられる長棟建物からは一片の土師・須恵器が出土しないのにすぐ横の正方形に近い建物からは土師器が出土し、大形の柱掘り方を持つ整然と並ぶ建物からは奈良朝の須恵・土師器が出土した⁴⁾」とある。それでは、どのような法則性があるのか確認するために、柱間距離及び、掘立柱建物跡の規模を図化し、検討を加えていくことにする。

Fig.58は、1間あたりの距離、つまり、梁間長、桁行長をそれぞれの間数で割ったもので、縦軸に梁間、横軸に桁行をとったものである。斜めの線は、1尺が30cmとしてその倍数をとったものであるが、平面構成に法則性があるのならこのラインに集中すべきであるが、図を見る限りにおいて、奈良時代のものは、様々な規格があって必ずしも一定の法則性を持っているとは限らないと考えられる。それでは、寸法が不統一であるとされている弥生時代のものと比較してみると、意外に弥生時代の数値の方がばらつきが少なく、1間が梁間5尺、桁行4.5尺前後のグループと梁間10尺、桁行5.5尺前後のグループに大別できる。

次に、奈良時代の柱間距離についてまとめてみると、一定の尺度でまとまるということはないが、尺単位でまとまることは確かであり、1尺=約30cmで完数を得られる数値を示す掘立柱建物跡が、奈良時代以降であるという可能性が高い。しかし、弥生時代のものも5尺、10尺前

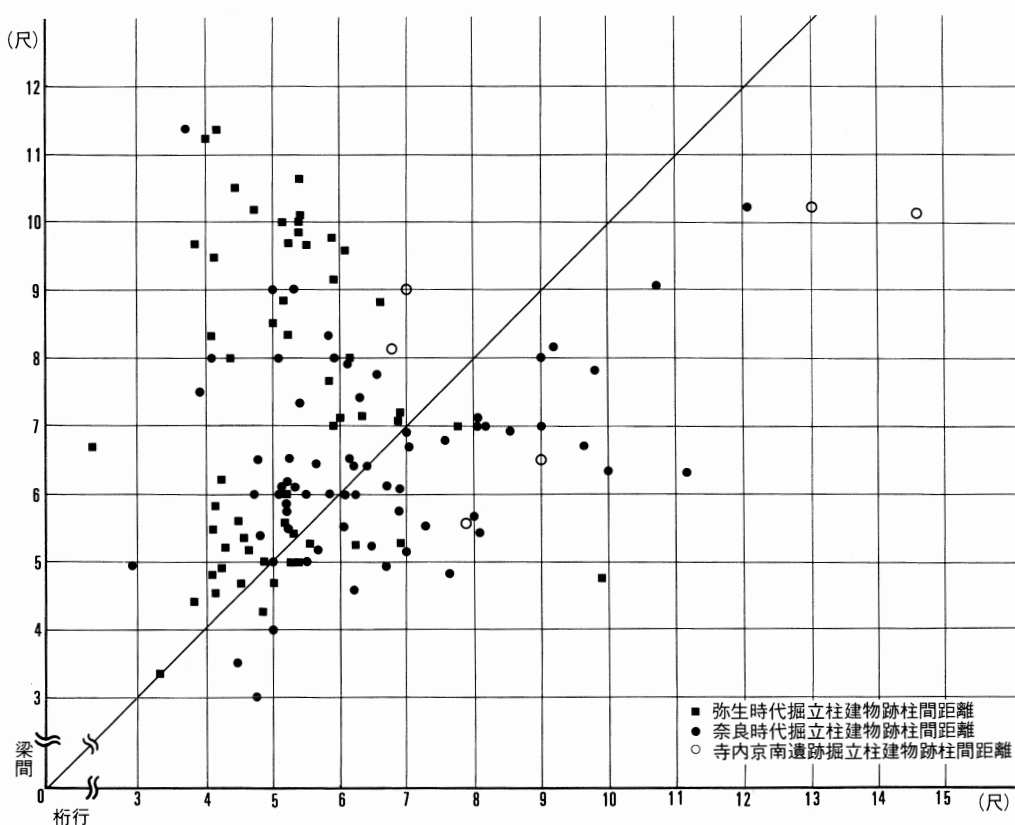


Fig. 58 掘立柱建物跡柱間距離の比較

後で完数を得られるものが存在し、また、尺単位で割れないものも多く存在することなどより、単に柱間距離によって時期設定を行なうことに無理があると考えられる。

Fig.59 は、掘立柱建物の規模と形状の図であり、縦軸に梁間長、横軸に桁行長をとったものである。この図より検討を加えてみると、床面積 12m^2 を境に2つのグループに大別でき、 12m^2 以下のものを奈Ⅰグループ、 12m^2 以上のものを奈Ⅱグループとすると、奈Ⅰグループは、当然間数が少ないものが主であり、一辺が尺度で割れるものが比較的多く、1つの規模に集中するのではないが、1間×1間・1間×2間のグループであると、梁間長約7尺×桁行長約9尺、同じく8尺×10尺、9尺×11尺、10尺×12尺と桁行長が梁間長より2尺長いものと、梁間長7尺×桁行長8尺、同じく8尺×9尺と1尺長いものに集中する傾向がある。しかしこれも一概には論ずることができず、これらのグループに属さないものも同数近く存在する。唯、尺度で完数を得られるものは、このグループに属する傾向にある。

奈Ⅱグループは、梁間長が11尺～14尺で、桁行長は最小10.2尺、最大23尺前後で、主に15尺～19尺に集中することがわかる。これらより奈良時代の掘立柱建物跡の規模についてまとめてみると、1間×1間、1間×2間の様な小規模建物の場合、その梁間長、桁行長は、尺度で合わせ、2間×3間、2間×4間の様に規模が拡大すると、梁間長、桁行長よりも1間あたりの柱間距離に尺度を用いて設計していったものであると考えられる。比較のために弥生時代のものの規模と形状の図をあげると、やはり、 12m^2 を境に2つのグループにわけられる。弥生時代の弥Ⅰグループは、奈良時代のそれとくらべて尺度で割れるものが少なく、数値がちらばっている。弥Ⅱグループは、奈良時代のものとは全くちがう数値のあり方を示し、梁間長が8尺～

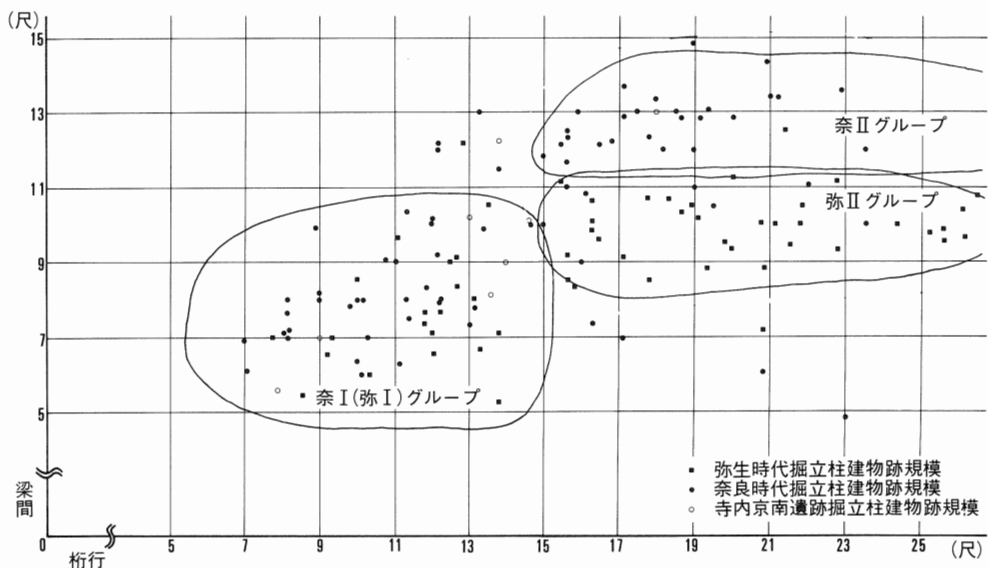


Fig. 59 掘立柱建物跡の規模の比較

11尺に集中し、桁行長が23m以上の長棟の建物も存在する。これは「青木遺跡報告書」によると「弥生時代では床面積の拡張に際しては桁行を主に拡張した⁵⁾」というのを実証することになると考えられる。

次に、寺内京南遺跡より検出された掘立柱建物跡8棟について、Fig. 58・59にあてはめて述べていきたい。寺内京南遺跡の掘立柱建物跡の1間あたりの距離は、3つのグループに大別される。つまり梁間10～12尺、桁行13～15尺の範囲に含まれるSB9、SB10、SB11のグループ〔第1グループ〕、梁間8～9尺、桁行7尺の範囲に含まれるSB8、SB13のグループ〔第2グループ〕、梁間5.5～7尺、桁行8～9尺の範囲に含まれるSB12、SB14、SB15のグループ〔第3グループ〕である。しかし、どのグループも、先述した青木遺跡の掘立柱建物跡のグループにあてはまらず、強いて述べれば、第3グループのSB14、SB15が、梁間7尺、桁行9尺のグループに含まれる程度である。

掘立柱建物の規模・形状についてみると、2つのグループに大別される。つまり6m²以下におさまるSB12、SB15と、1間あたりの距離が梁間8尺～12尺、桁行13～15尺の範囲に含まれるSB8、SB9、SB10、SB11のグループである。これらもまた青木遺跡の掘立柱建物跡のグループに含まれず、SB14だけが梁間長13尺×桁行長18尺と先述した青木遺跡の奈良時代掘立柱建物跡のⅡグループに含まれる程度である。

以上のように検討を進めてくると、寺内京南遺跡より検出された掘立柱建物跡のうち、奈良時代のものとしては、小規模なグループに属するSB15、大規模なグループに属するSB14がほぼ確実視できるのを除けば、他は必ずしも奈良時代のものとは断じ難い。

拡張部のSB8に施された整地層内より検出された布目瓦片は、これら掘立柱建物跡に奈良時代もしくはそれ以降のものが含まれていることを示唆するものであるが、その整地層が他の掘立柱建物跡に及んでいる状況を確認できたわけではない。

したがって、これら3棟を除けば、他の時期、たとえば、掘立柱建物跡と、その東南に存在する古墳時代の竪穴住居跡(SB1・SB2)とが重複しないことより、それと併行する時期を想定することも可能である。

青木遺跡の弥生時代と奈良時代の掘立柱建物のデーターと寺内京南遺跡のそれとが、多くの場合合致しないのは、この様な造営時期の相違を反映しているといえるかもしれない。ただ、この図ではどのグループにも属さないが、寺内京南遺跡の掘立柱建物跡内では、先述したようにある程度グルーピングできるのは興味深い。

以上のように造営期をほぼ確定できるのは、SB8・SB14・SB15の3棟にすぎない。これら3棟についてみても、1間あたりの距離や尺度が統一されているとはいえず、寺内京南遺跡と青木遺跡で検出された小規模掘立柱建物に関する限りにおいて、必ずしも厳格な尺度が使われたものとは考えられない。

さらに、このことは柱間距離に反映されると考えられる上屋構造部に、規格化された用材を使用することができなかったことを示しているといえ、これに使用される建築用材の流通は、当時一つのまとまりをもった集落を越えるものではなかったと考えてよい。

このような状況は、鳥取県下の各集落遺跡から検出された掘立柱建物跡において、弥生時代以来、奈良時代に至るまで小稿で検討したように大きな変化はなかったものと思われる。

したがって、寺院跡・官衙遺跡等の規格化された建物跡とこれら集落跡との間に存在する著しい相違は強調されねばならないのであり、本遺跡の掘立柱建物跡に関していえば、白鳳時代以降に存在した瓦葺で、規格化された伽藍を持っていたと推定される寺内廃寺の南側に隣接して存在した寺内京南遺跡の規格化されない庶民生活の一面をうかがうことも許されよう。

〔注〕

1. 伯耆国庁跡の様な官衙遺跡では、掘立柱建物跡が多数検出されているが、それらは、計画的に配置され、また、主軸方向も時期によって明確に分割される。掘形も1m前後の方形のものが多く、寺内京南遺跡の様な遺跡の掘立柱建物跡と同一レベルで比較することはできない。
2. 3. 4. 5 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』1976・1977・1978

図版



1 : 6 ca.



PL.1



寺内京南遺跡周辺地域航空写真（垂直）

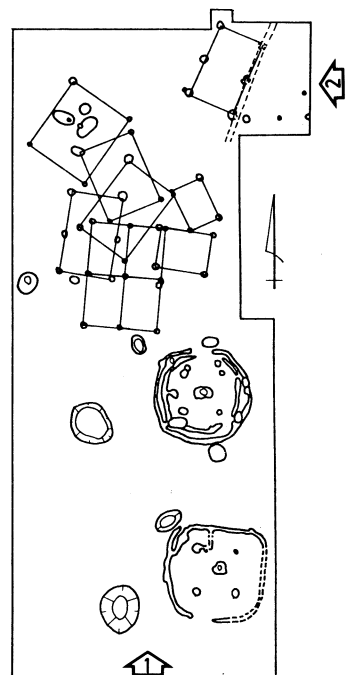
1 : 30000 ca.



1. 寺内京南遺跡周辺地域航空写真（東北から）



2. 寺内京南遺跡遠景（西南から）

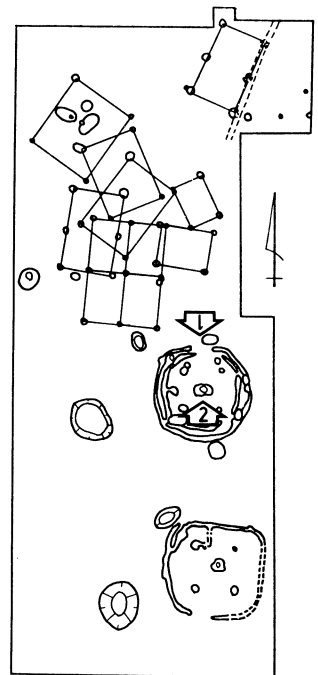


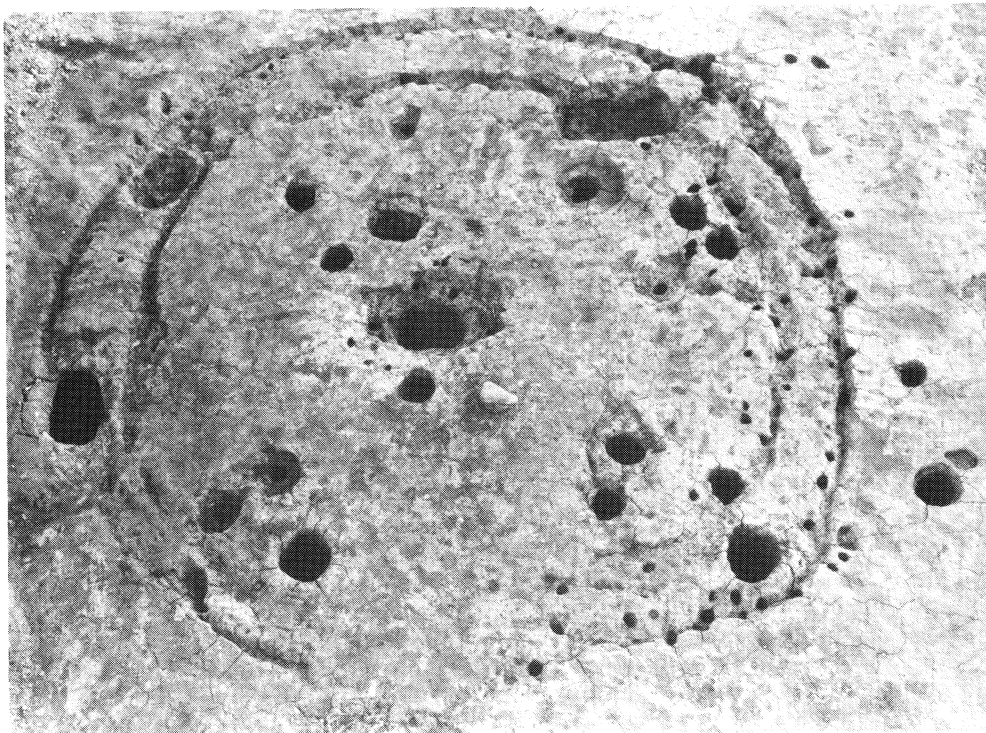


1. 北地区全景（南から）

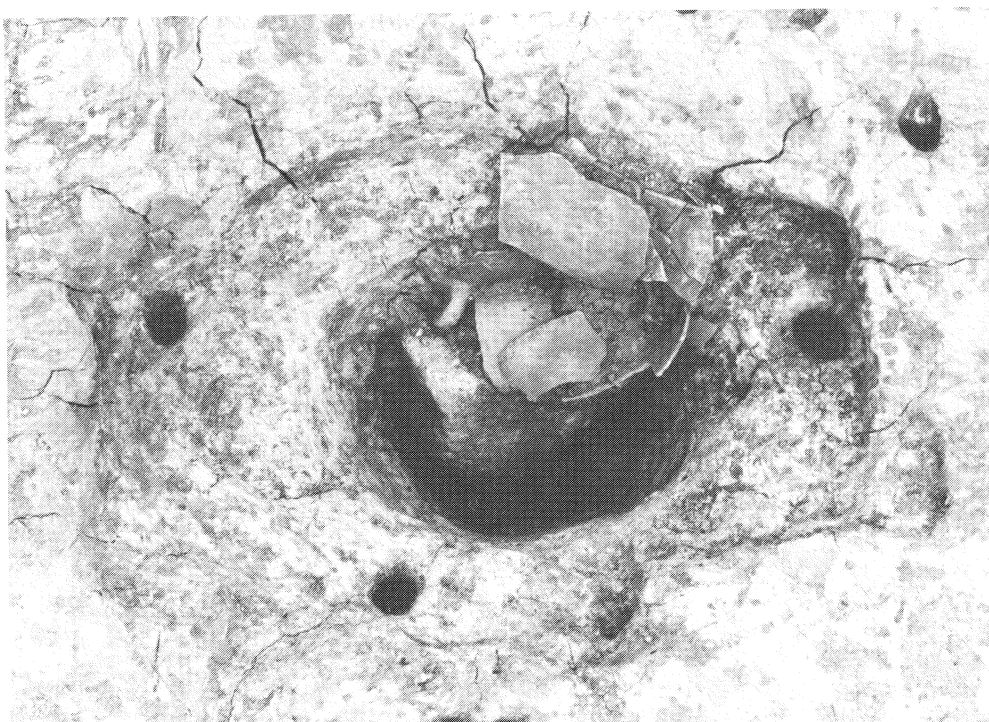


2. 北地区掘立柱建物群（東から）

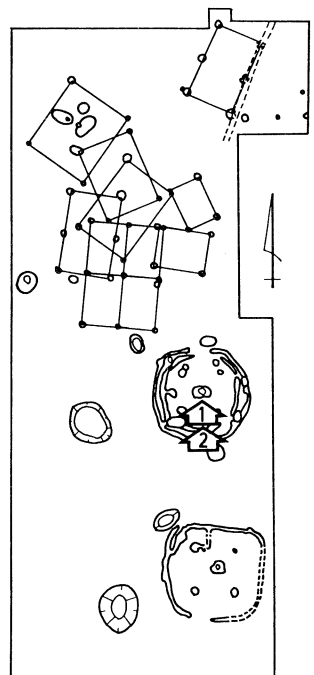


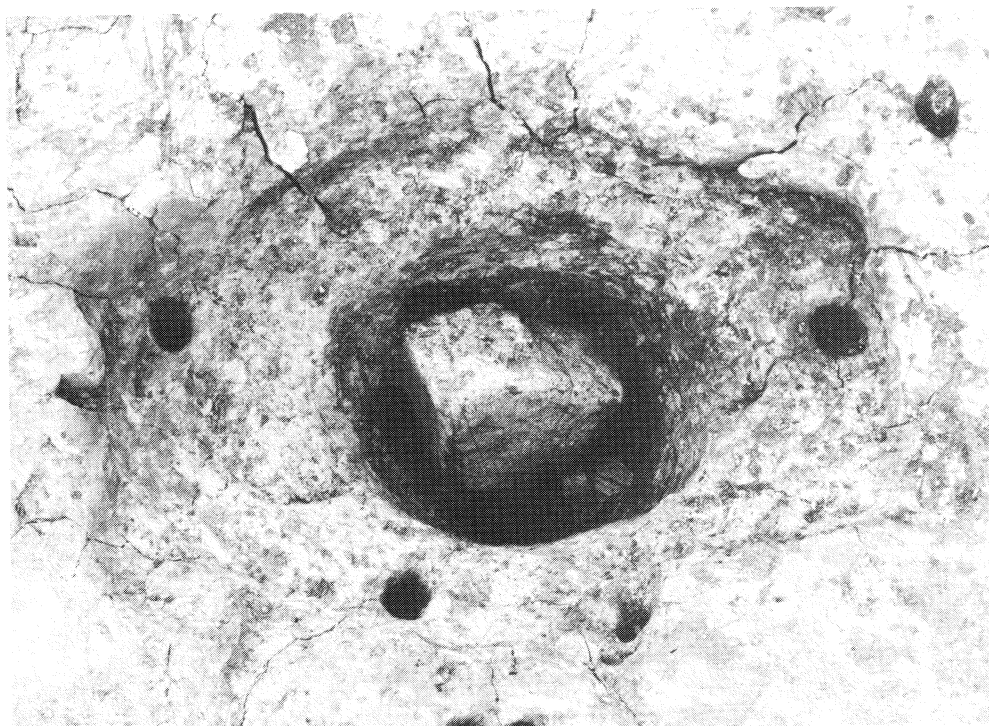


1. SB 1 全景 (北から)

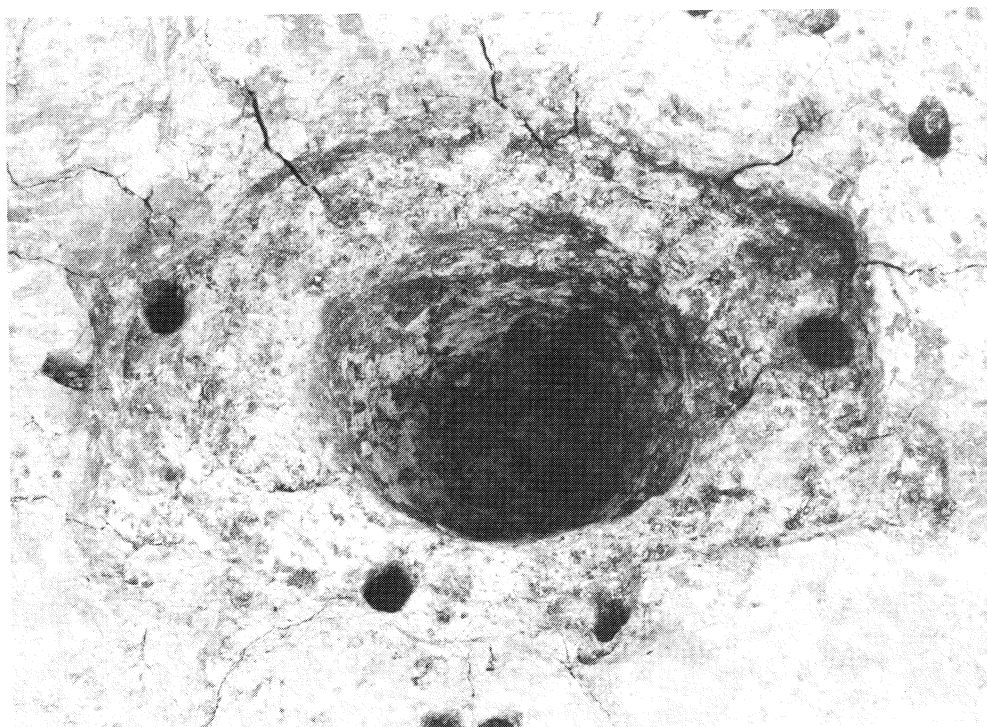


2. SB 1 炉跡 甕形土器出土状況 (南から)

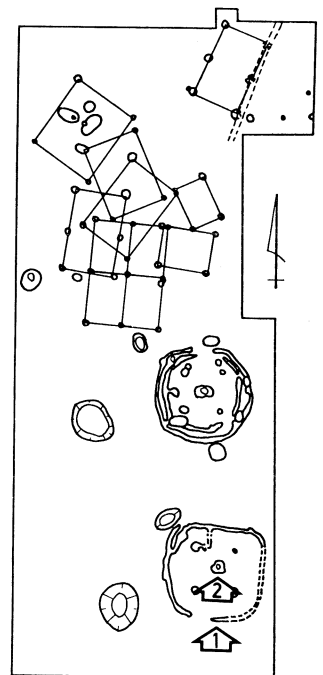


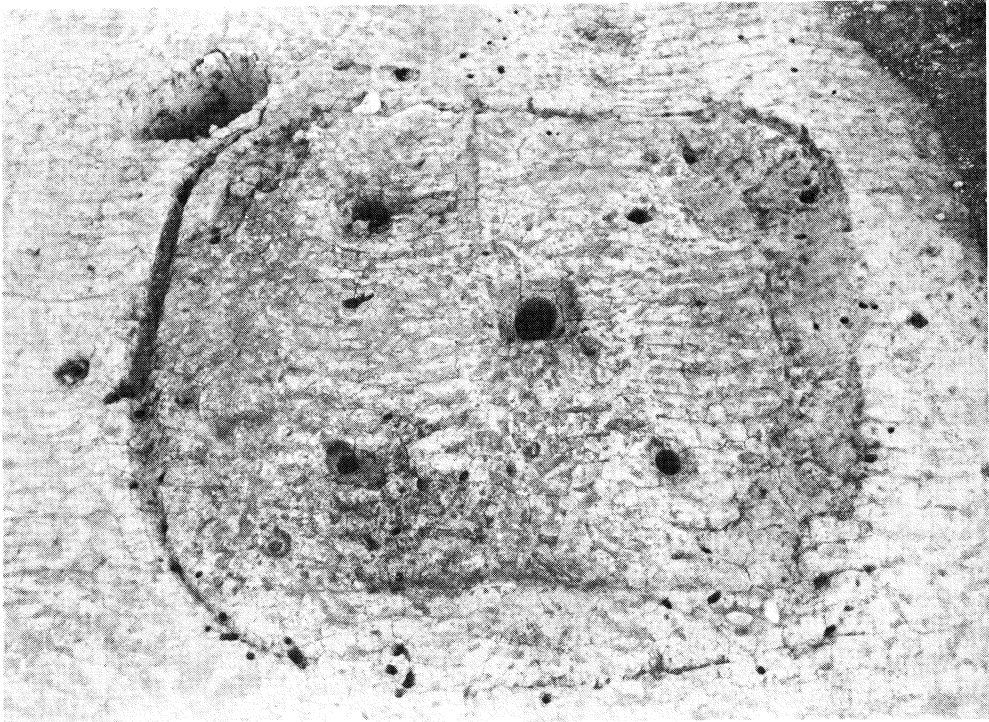


1. SB 1 炉跡 甕形土器取り上げ後（南から）

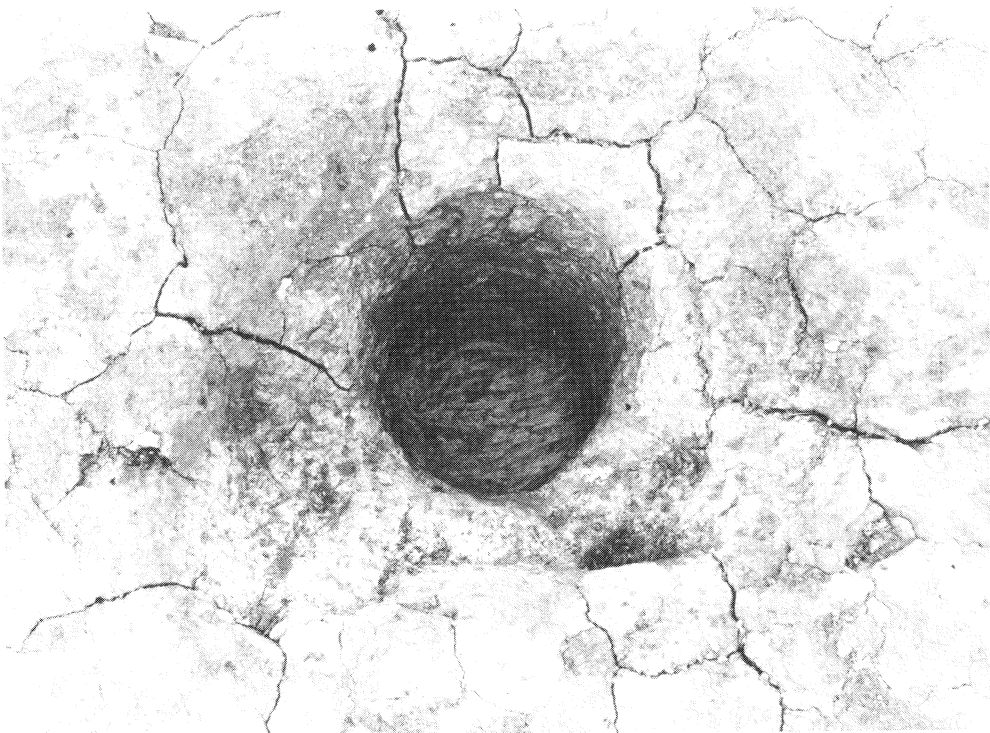


2. SB 1 炉跡 完掘後（南から）

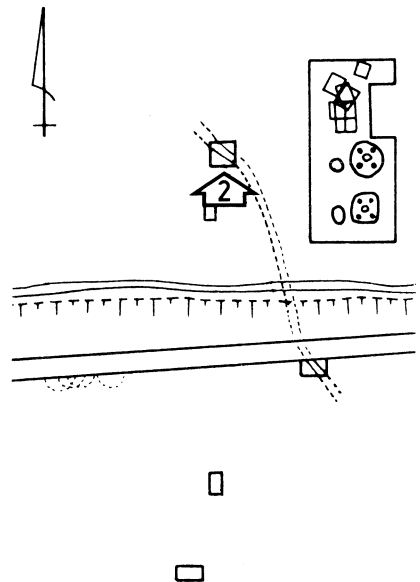
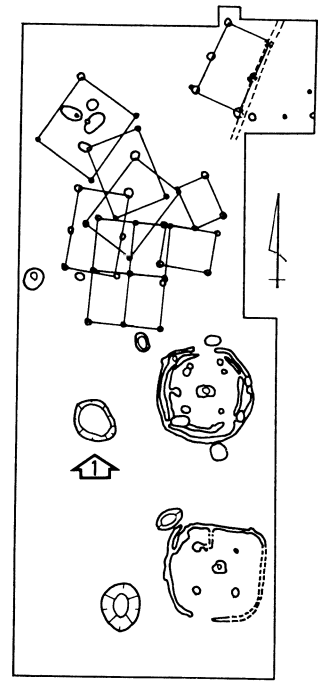


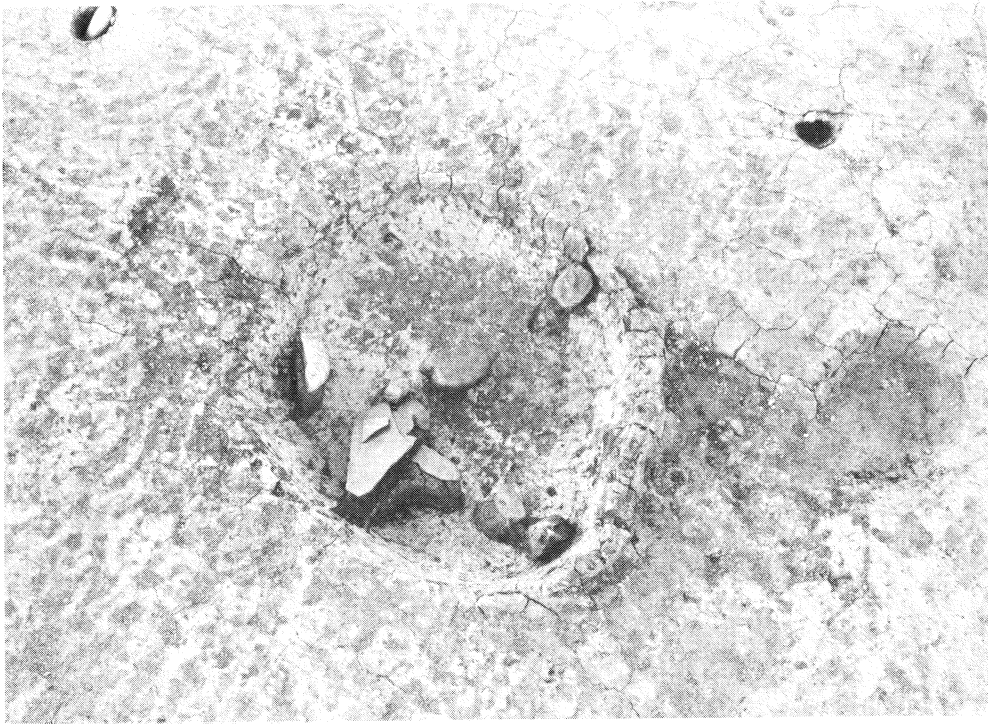


1. SB 2 全景 (南から)



2. SB 2 炉跡 完掘後 (南から)

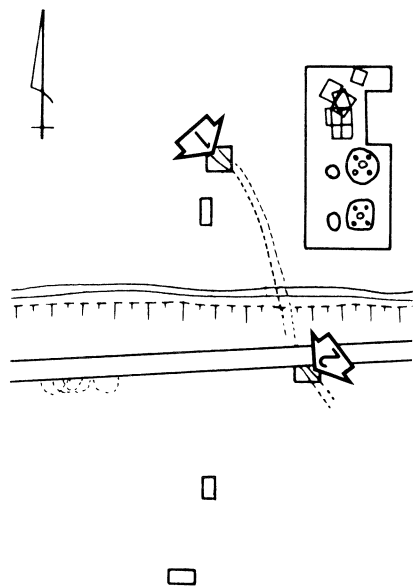


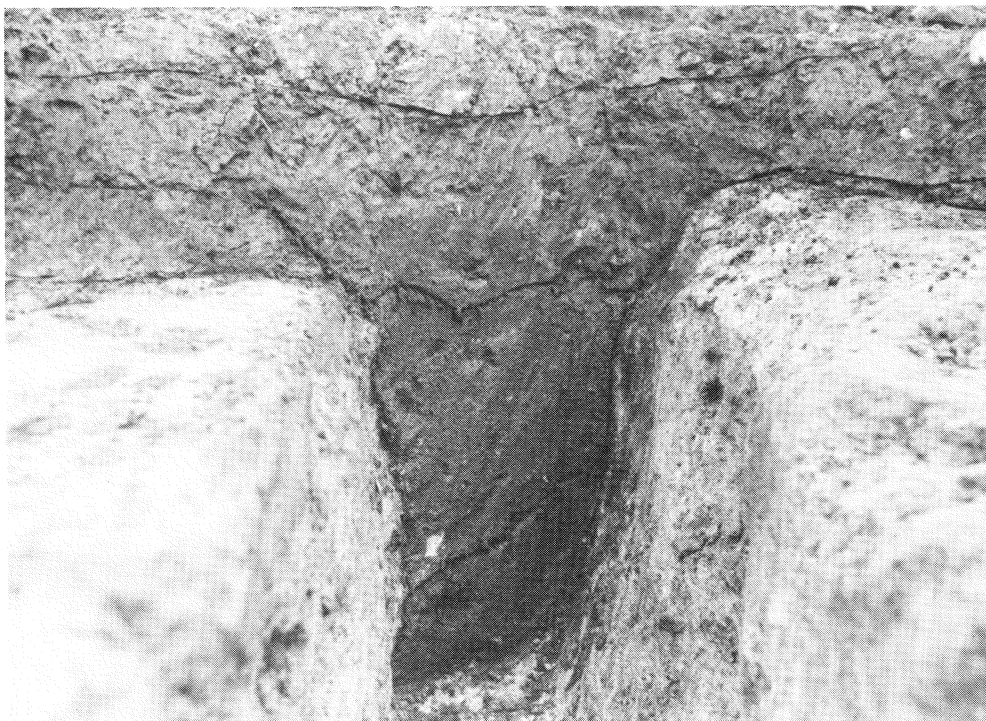


1. SK10全景（南から）

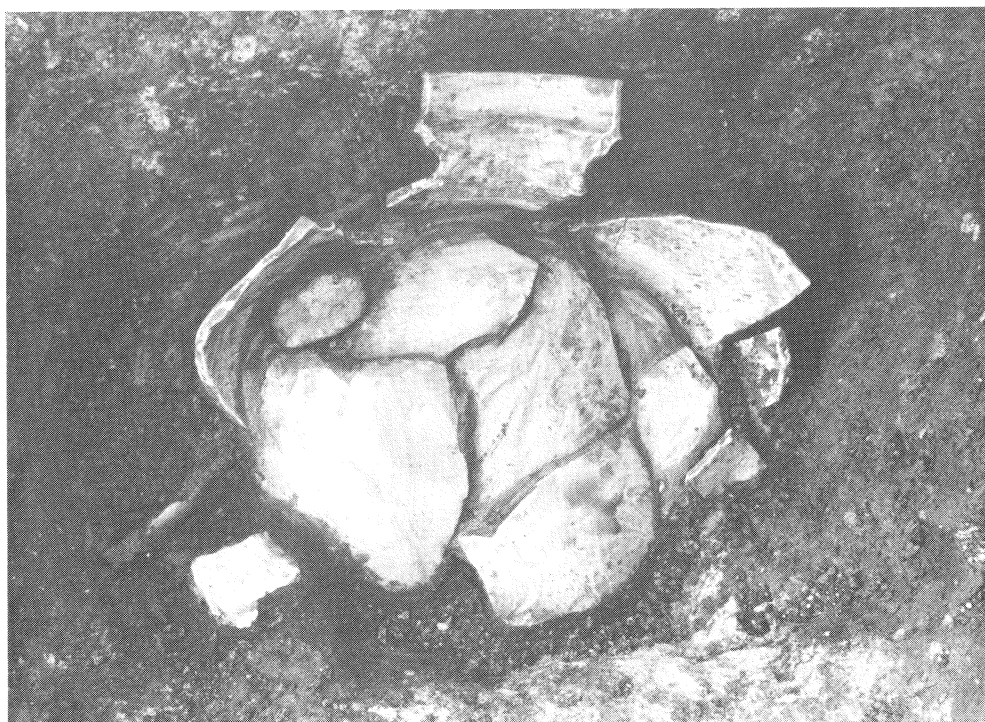


2. N1トレンチ全景（南から）

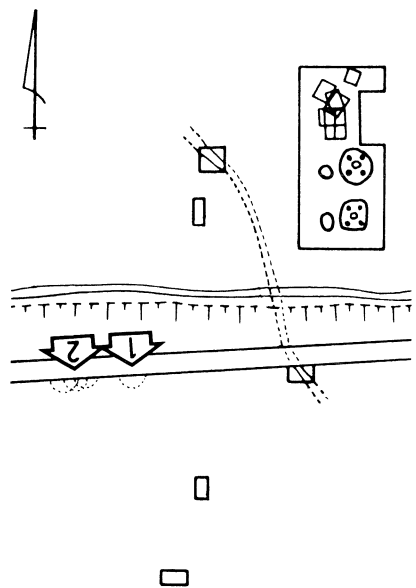


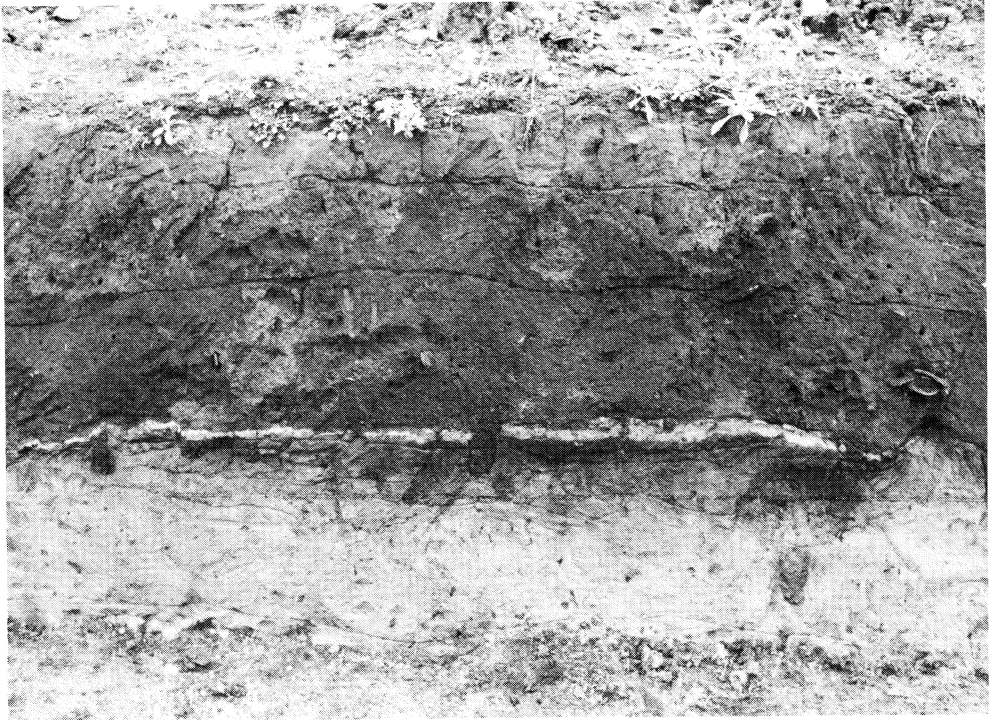


1. N1トレンチSD1 土層断面（西北から）

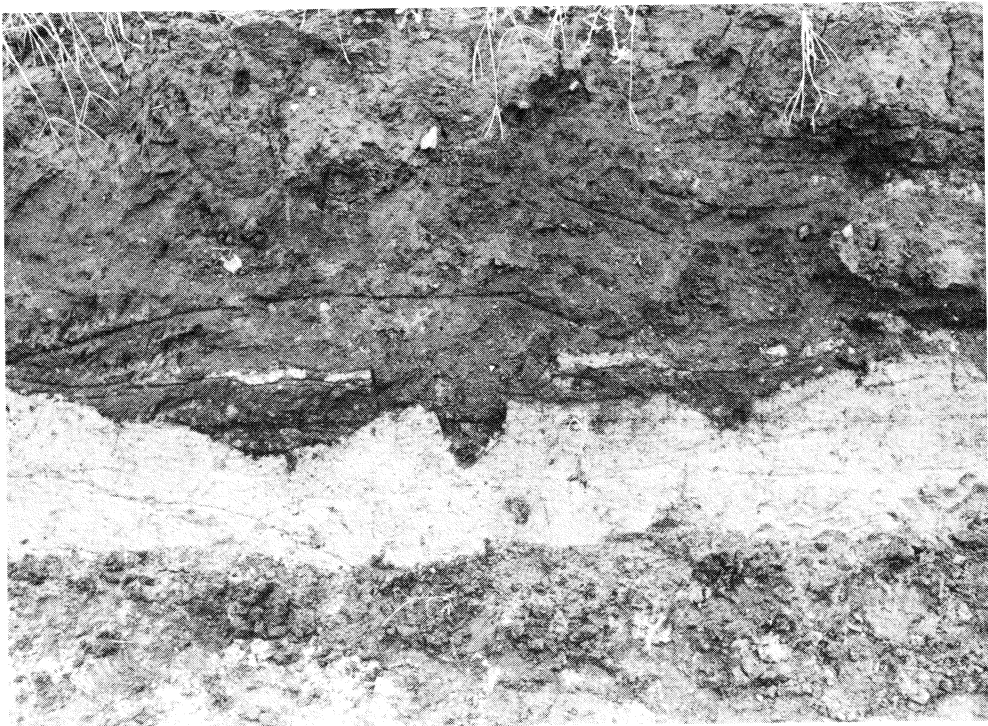


2. S2トレンチSD1 壺形土器出土状況（東北から）

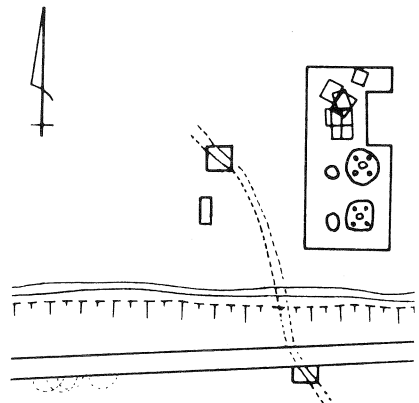


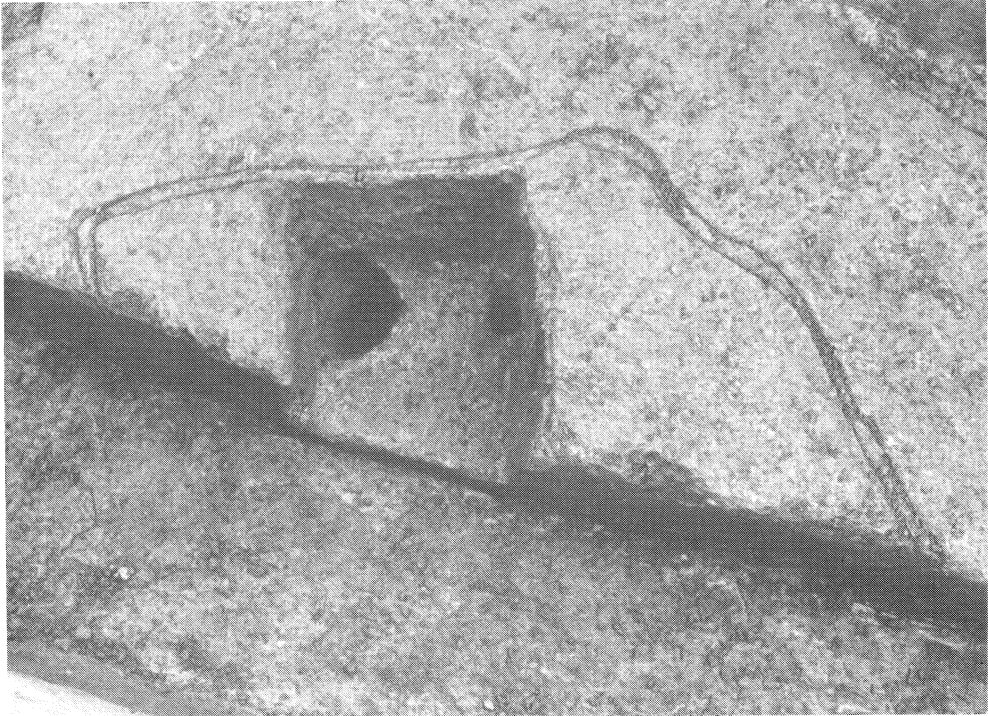


1. 排水溝SB 3 土層断面（北から）



2. 排水溝SB 4 土層断面（北から）

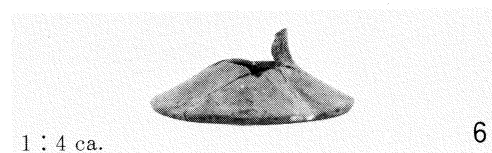
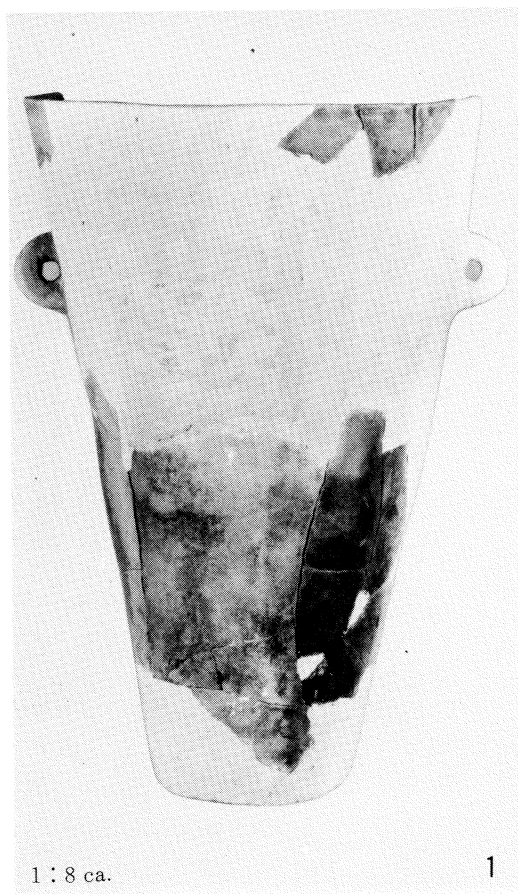
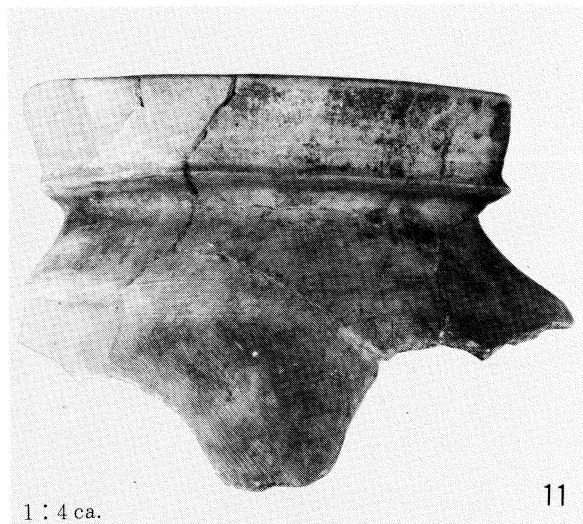




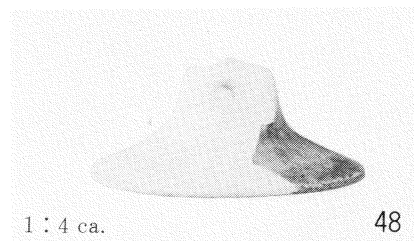
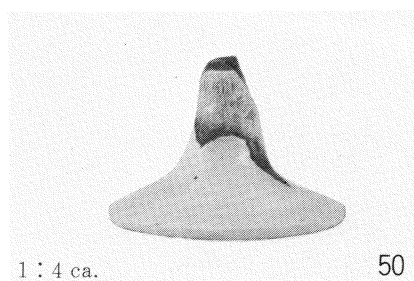
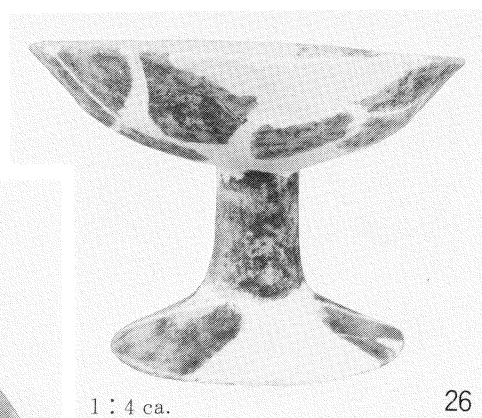
1. S 2 トレンチ SX 1 検出状況（西南から）



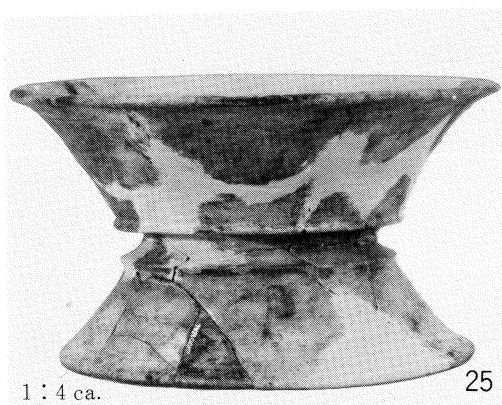
2. S 2 トレンチ SX 1 鉄製品出土状況（西南から）



出土土器 SD 1 (30) SB 1 (1・6・11) 排水溝 (31・37)



出土土器 SD 1 (23・24・26・27) 表面採集 (48・50)



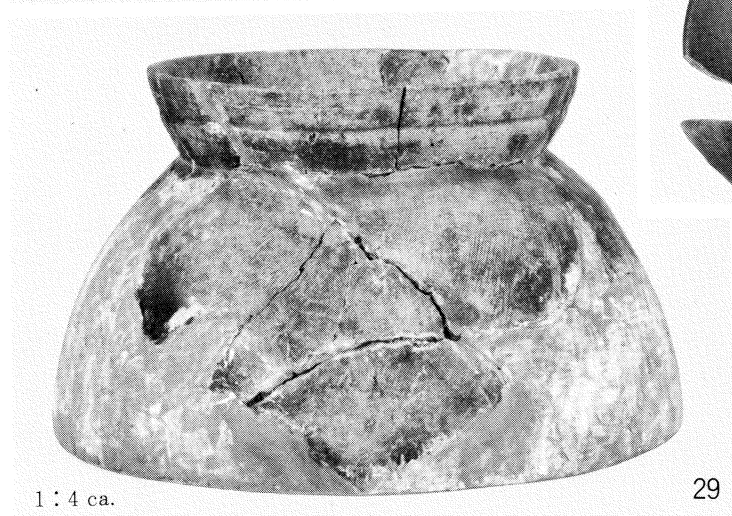
1 : 4 ca.

25



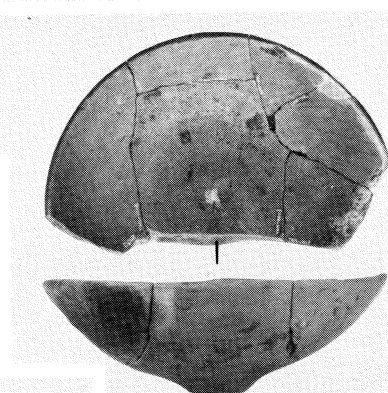
1 : 4 ca.

9



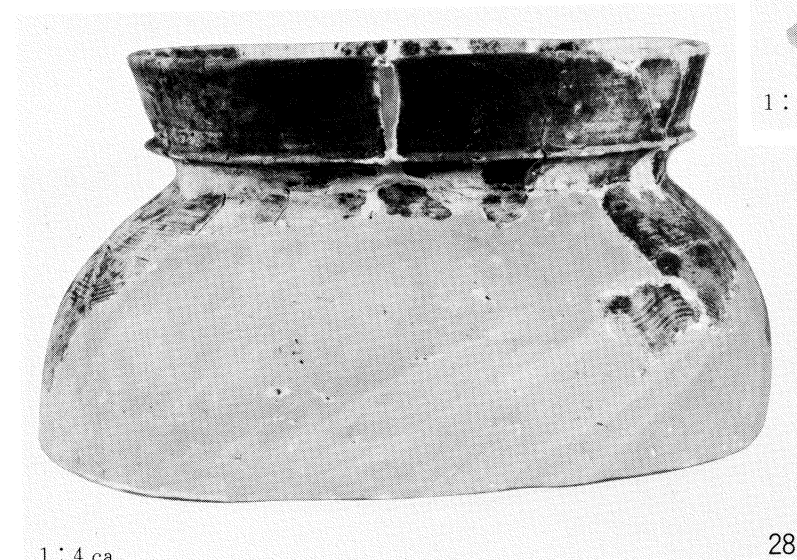
1 : 4 ca.

29



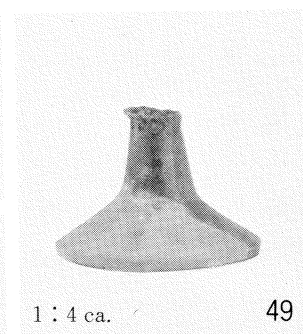
1 : 4 ca.

5



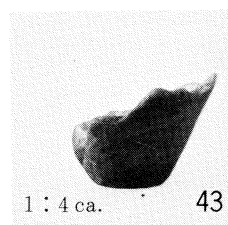
1 : 4 ca.

28



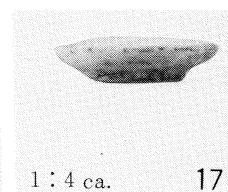
1 : 4 ca.

49



1 : 4 ca.

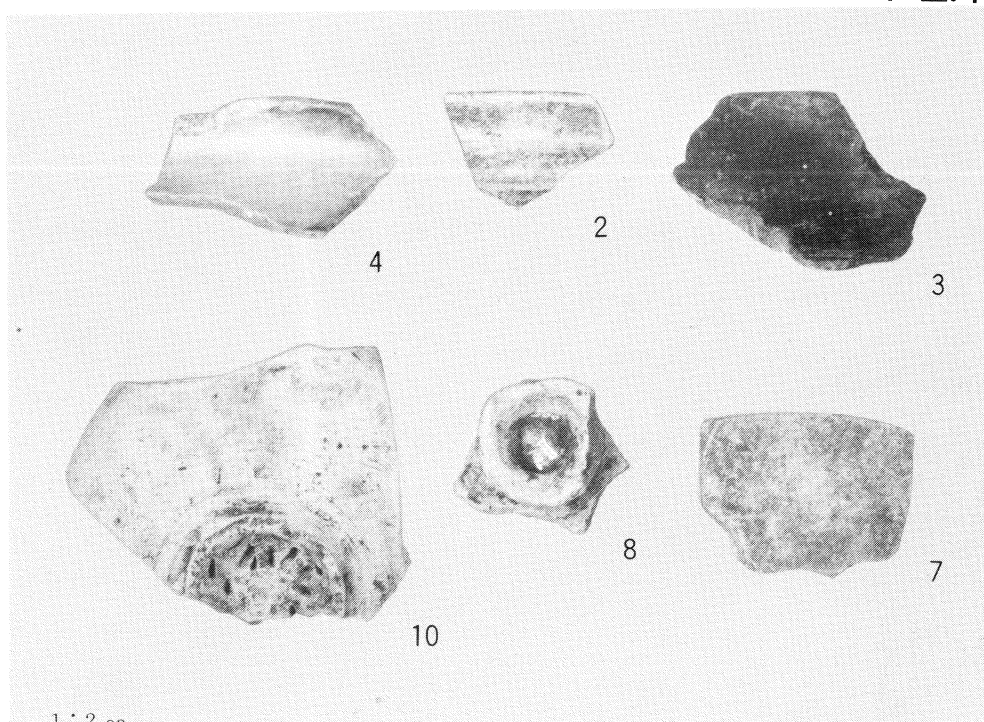
43



1 : 4 ca.

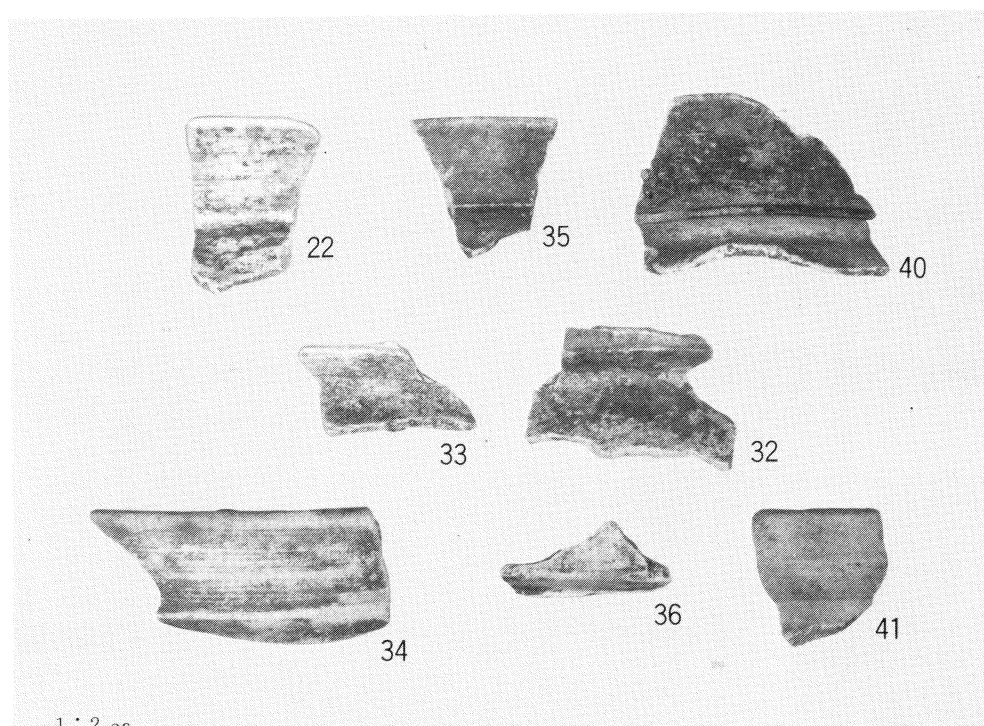
17

出土土器 SD 1 (25・28・29) SB 1 (5・9) P35 (17) 表面採集 (43・49)



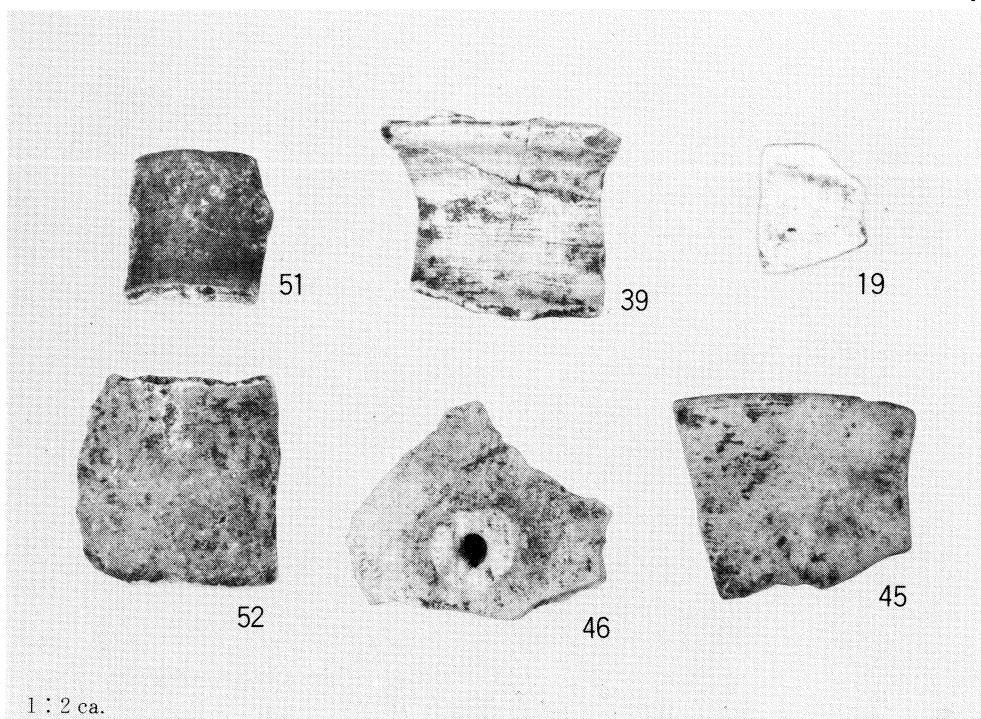
1 : 2 ca.

1. 出土土器 SB 1 (2・4・7・8・10)

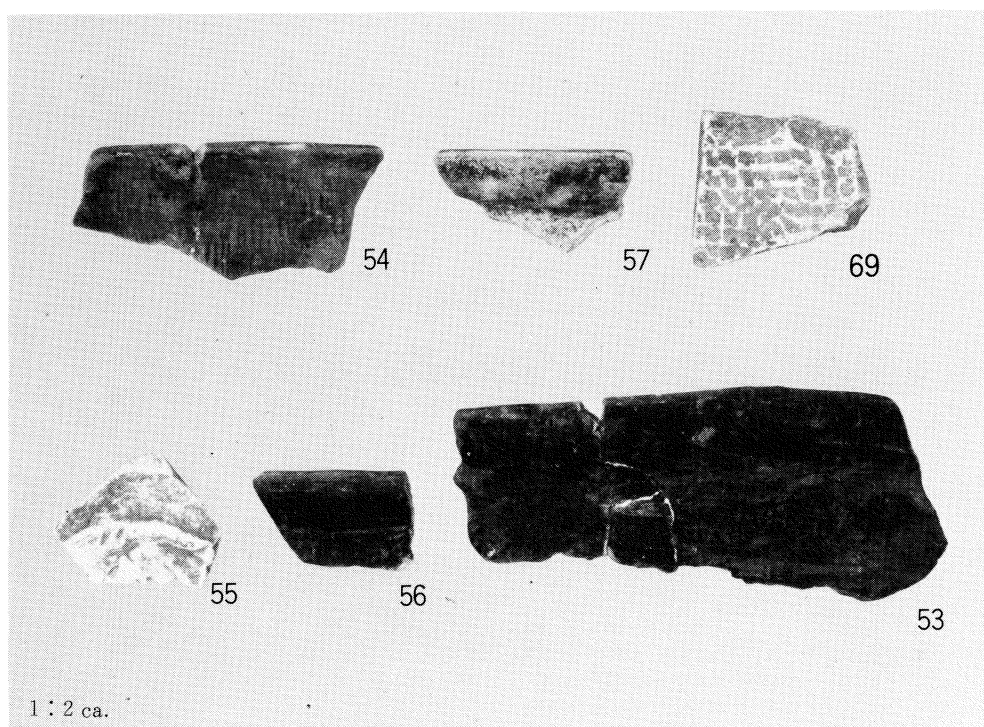


1 : 2 ca.

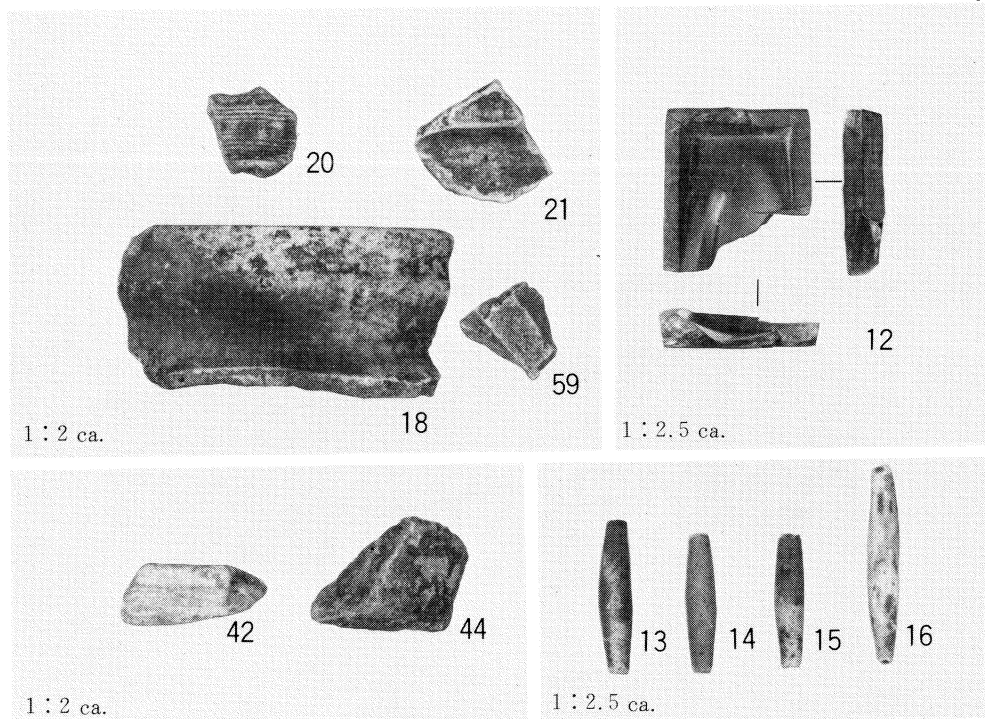
2. 出土土器 表面採集 (22・32・36・40・41)



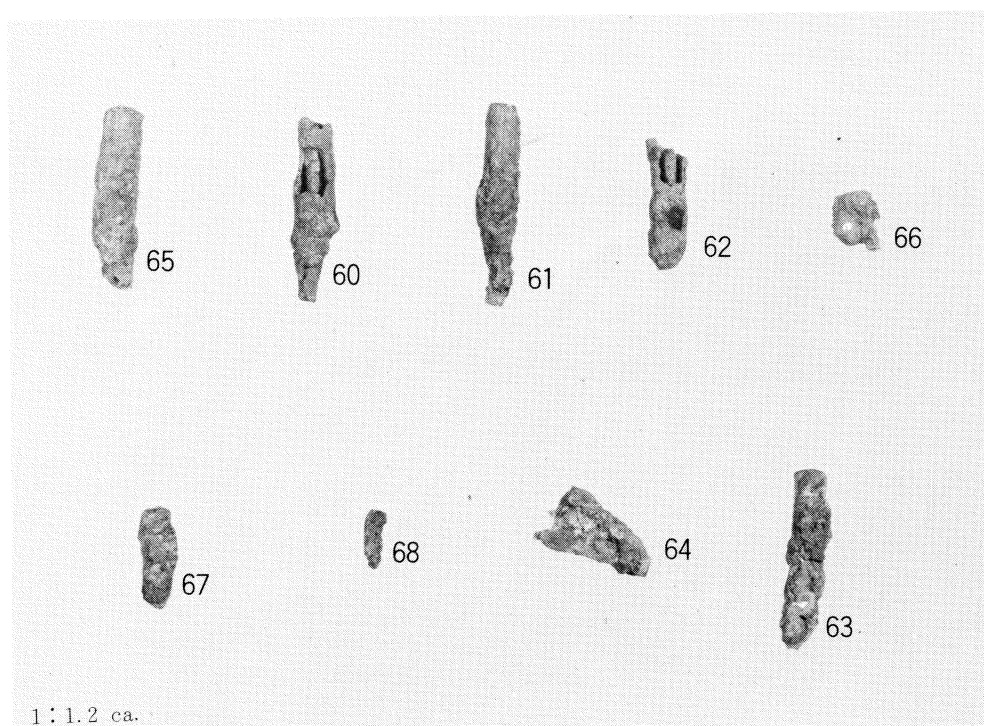
1. 出土土器 表面採集 (19・39・45・46・51・52)



2. 出土土器 表面採集 (53~57・69)



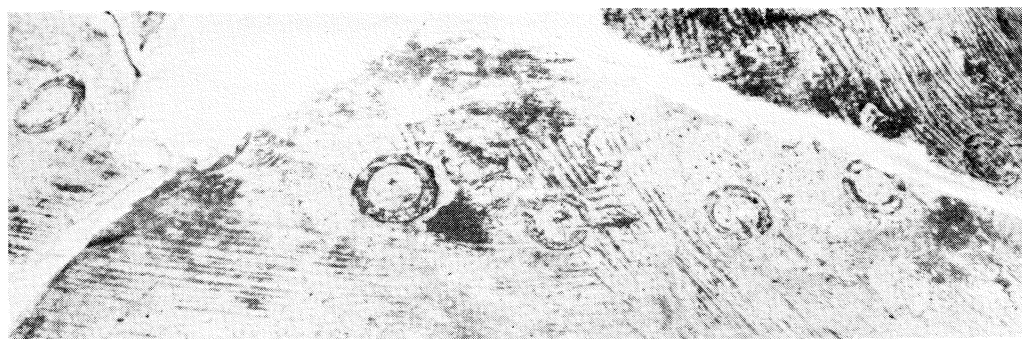
1. 出土土器 SK 4 (18) P78 (13~16) 表面採集 (12・20・21・42・44・59)



2. 出土鉄製品 S 2 トレンチ S X 1 (60~68)



1. 壺 口縁部外面竹管文と半截竹管文 (30)



2. 壺 肩部外面竹管文と半截竹管文 (30)



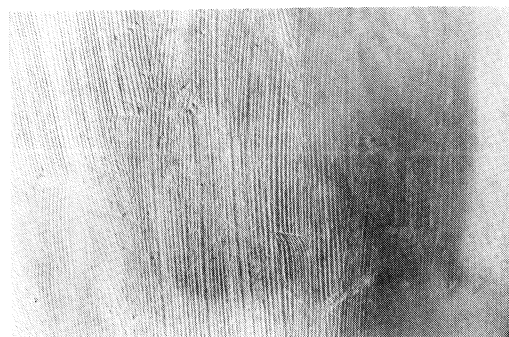
3. 甕 肩部外面ハケメと櫛描直線・波状文 (23)



4. 甕 肩部外面ハケメと櫛描直線・波状文 (28)
土器細部写真



1. 甕 体部外面ハケメ (23)



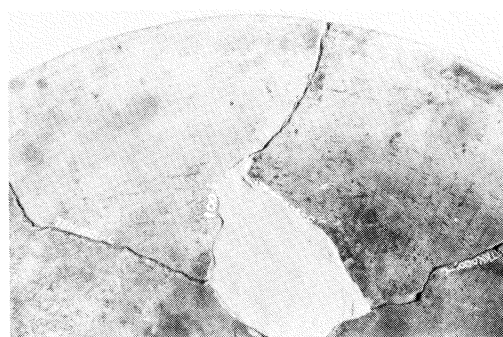
2. 甕 体部外面ハケメ (1)



3. 高杯 脚裾部内面ハケメとヘラ削り (26)



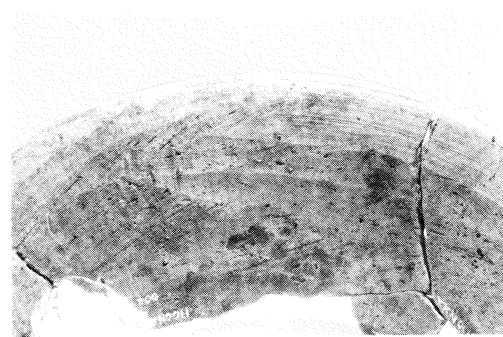
4. 高杯 杯部外面ハケメと杯・脚接合部 (51)



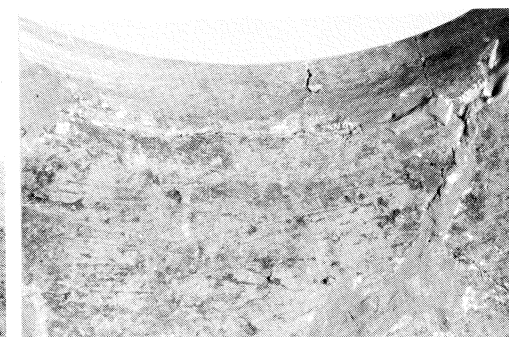
5. 高杯 杯部内面放射状ヘラ磨き (9)



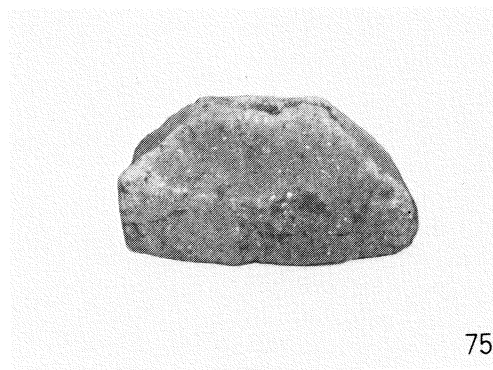
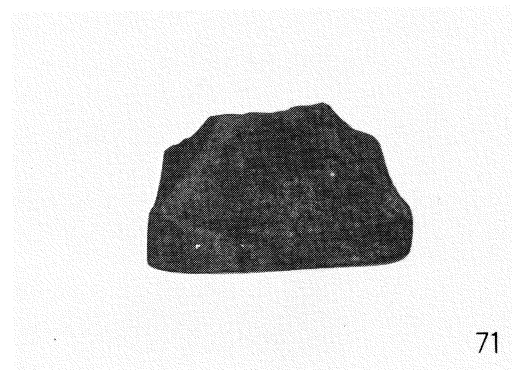
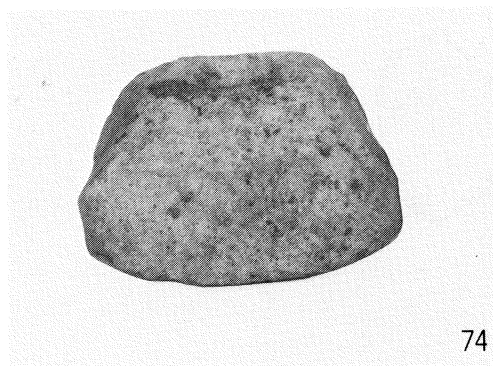
6. 甕 底部内面ヘラ削りと指頭圧痕 (27)



7. 器台 脚部内面横ナデとヘラ削り (25)
土器細部写真



8. 甕 肩部内面ヘラ削り (29)



中世墓域出土 宝篋印塔・五輪塔各部分

1 : 6 ca.



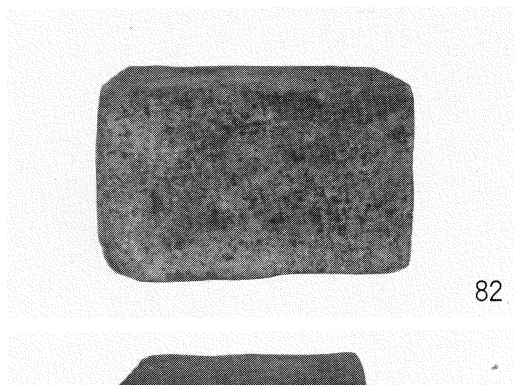
77



81



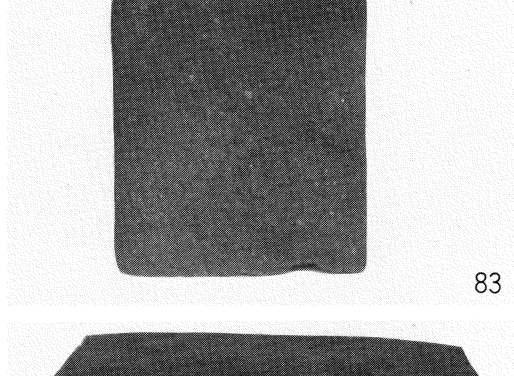
78



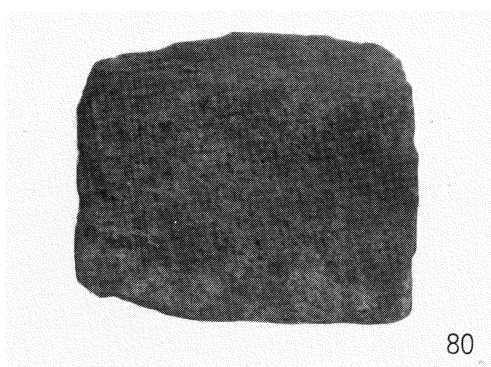
82



79



83



80



84

昭和57年 3 月25日印刷

昭和57年 3 月31日発行

鹿野町埋蔵文化財調査報告書 4 輯

寺内京南遺跡発掘調査報告

— ほ場整備に伴う調査 —

編集 関西大学文学部考古学研究室

〒564 大阪府吹田市山手町 3 丁目 3 番35号

電話 (06)388-1 1 2 1

発行 鹿 野 町 教 育 委 員 会

〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町大字鹿野

1778番地

電話 (085784) 2 2 9 9

印刷 勝 美 印 刷

〒682-07 鳥取県東伯郡羽合町長瀬

電話 (085835) 4 4 1 1

